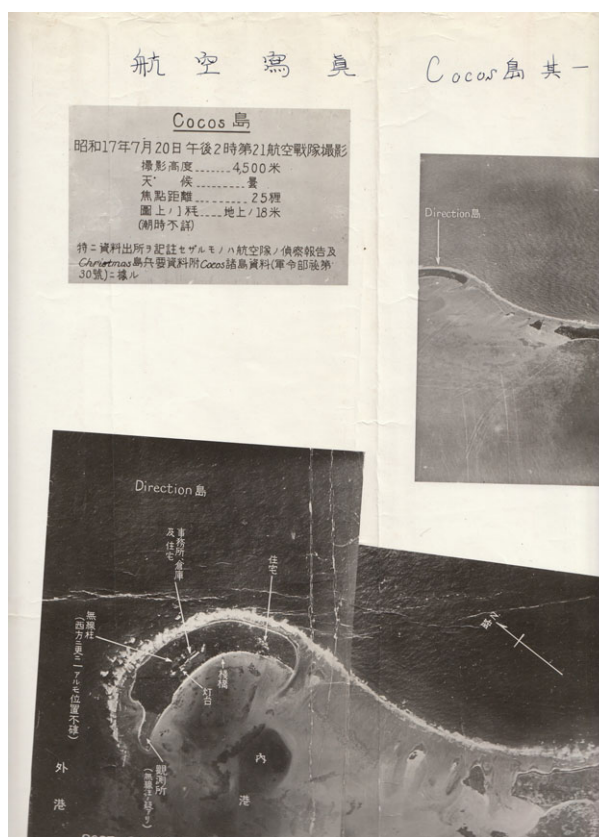


外邦図 研究 ニューズレター

財団法人国土地理協会平成18・19年度研究助成「社会教育機関等への助成」中間報告書
平成19年度科学研究費補助金(基盤研究[A][1] 課題番号:19200059)
アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成
研究成果中間報告書



航空写真 Cocos島其一(左上部分、アメリカ議会図書館蔵)

1942年7月に第21航空戦隊(海軍)が撮影した写真を中心に編集したもので、右下部分には「軍令部」の印がある。Cocos島はインド洋の環礁で、他の写真から、1943年8月にも日本軍は偵察撮影をおこなったことがわかる。(本誌、78-79頁参照)

外邦図研究グループ

大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室
〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/>

2008年3月

外邦図研究の7年

国土地理協会の研究助成に、故久武哲也氏らが応募した課題「アジアにおける植民地形成と地図作製事業」が2001年に採択され、本格的な外邦図研究が始まって7年を経過した。2002年には科学研究費、基盤研究(A)『外邦図』の基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして」による研究活動が開始され(～2004年)、『東北大学所蔵外邦図目録』(2003年)、『京都大学総合博物館収蔵外邦図目録』(2005年)を編集・刊行するとともに、関連研究者のネットワークを構築した。また、そのなかから、地理学者の戦時の活動の一端を示す重要資料が現存することがわかり、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』を編集し、刊行することとなった(2005年)。外邦図研究はその後も国土地理協会の助成をえて継続され(2005年～現在)、2007年1月には大学では最大のコレクションである『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』を刊行した、

はじめに目標としたことは、これで何とか達成されたが、ただし、外邦図の研究は進んでいけばいくほど、さらに新しい課題がみえてくる。故久武哲也氏と今里悟之氏がアメリカ議会図書館で発見した、日本軍撮影空中写真は、この方面に大きな課題があることを示すこととなった。また、韓国や台湾では、過去の景観や地名を示す資料として外邦図が注目され、その研究が進められるとともに、リプリントが刊行されてきたことを知ることとなった。施添福氏(元台湾大学教授、現中央研究院研究員)による『臺灣堡図』(1996年)および『臺灣地形圖：日治時代二萬五千分之一』(1999年、いずれも遠流出版公司より刊行)、さらに南榮佑高麗大学教授による『舊韓末 韓半島地形圖』(図書出版成地文化社、1997年)がそれである。これによって、外邦図研究の国際化をめざすこととなった。さらに地球環境の変動を示す資料として、気象観測資料も視野にはいつてきた。

2007年4月に開始された、科学研究費基盤研究(A)「アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成」による研究は、こうした新しい課題に対応するもので、さらに大きく展開しようとしている。これによって購入した、高木菊三郎(1888-1967年、陸地測量部で外邦図の整理を担当)旧蔵の資料は、謎につつまれていた中国大陸における日本軍の秘密測量にアプローチする大きな手がかりとなることが予想される。また、アメリカ議会図書館での調査によって、日本軍の航空偵察に関連する資料のほか、日本軍将校による秘密測量の原図も発見された。

こうした研究とともに、外邦図の公開にむけたデジタルアーカイブの整備も東北大学を中心としたデータベース科研(課題名「外邦図デジタルアーカイブ」、2005年度)によって、すすめられてきた。多数の地図のスキャニングを終えるとともに、その索引図も整備され、ウェブでの公開を開始した(2005年12月)。2007年度には、再度データベース科研の採択をえて(課題名「外邦図デジタルアーカイブ」)、さらに公開する図幅数を増大させ、索引などにも改良をくわえている。

これにともなって、さまざまな技術的課題があきらかになるとともに、配慮すべき国際的課題も明確になり、2008年3月の日本地理学会では、日本学術会議地域情報分科会がオーガナイズするシンポジウム、『『地域の知』の統合に向けて：地域情報データベースの利活用』で、これらを中心に二つの報告（本号所収）をおこなうこととなった。

以上のように、研究の歩みはおかげで何とか順調ではあったが、他方、外邦図に関連する活動をおこなってこられた、以下の方々の訃報にも接することとなった。水路部で長年海図の製図を手がけられ、秘密海図にくわしい坂戸直輝氏（2004年9月）、陸地測量部で外邦図の作製にあたられた富澤章氏（2005年4月）、資源科学研究所の外邦図を整理分類され、多くの大学に配布された浅井辰郎先生（2006年11月）である。いずれの方にも、さらにお聞きしたいことが多かったが、それがかなわぬこととなってしまった。また『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』を、完成を念願されていた浅井先生にご覧に入れることができなかつたのも残念であった。さらにこの間、外邦図研究の中心として活躍してきた久武哲也氏までも病気のため逝去されることとなった（2007年7月）。

このように、外邦図研究の7年間をふりかえると、資料調査や編集作業、さらに研究会の光景がいくつも思い出され、それだけの長さをもった歳月と感じられる。またこの歳月のなかから出てきた新たな課題も視野にはいつてくる。このなかでとくに今後努力が必要と感じられるのは、上記のような研究の継続や公開の拡大とともに、研究者や社会に対して、外邦図の存在とその学術的・社会的意義について、広く知られるようにすることである。地理学や地図学をこえた領域でも外邦図を認知していただき、その利用・活用を広げていきたい。幸い2007年秋に、これまで学術誌や『外邦図研究ニューズレター』に関係者が発表してきたものをまとめて刊行することに向けて、科学研究費（研究成果公開促進費）に応募したところ、これが採択されたとの通知をいただいた。今後はその完成にも努力したい。

なお国土地理協会からは、科学研究費が採択されない時期にも助成をいただき、おかげで外邦図研究をとぎれなく推進することができた。あらためて、御礼申し上げたい。

2008年4月

小林 茂

目次

はしがき	小林 茂	i
1. 本研究の経過		
1-1 2006年度の研究経過		1
1-2 2007年度の研究経過		6
2. 第8回外邦図研究会		
2-1 お茶の水女子大学地理学教室と外邦図との関わり	式 正英	17
2-2 浅井辰郎先生(1914-2006)と外邦図	久武哲也・小林 茂	21
2-3 浅井辰郎先生の地図配布のお手伝い	松田孝一	25
2-4 お茶の水女子大学が所蔵する外邦図の特徴	宮澤 仁・高槻幸枝	27
2-5 白頭山一帯の近世韓国地図仮製版本の地形図に関して	南 榮佑・李 虎相	29
2-6 お茶の水女子大学所蔵の台湾五万分の一旧地形図について	郭 俊麟	32
2-7 航空気象図について	田宮兵衛	34
コメント 航空気象図について	谷治正孝	34
2-8 外邦図デジタルアーカイブの公開と課題	村山良之・照内弘通・山本健太・宮澤 仁	35
コメント 外邦図デジタルアーカイブの公開と課題	鈴木純子	36
3. 第9回外邦図研究会		
3-1 外邦図の東北大学への搬入経緯をめぐって	岡本次郎	39
3-2 清末から日本統治初期の台湾に関する地図	魏 徳文	49
3-3 高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の仮目録について	小林 茂・金 美英	60
3-4 高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の仮目録		61
4. 第10回外邦図研究会		
4-1 外邦図作成の歴史を記録に留める各種一覧図と外邦図の『初刷』一覧	長岡正利	65
4-2 アメリカ議会図書館蔵日本軍航空偵察写真について	今里悟之・池中香絵・岡本有希子・小林 茂	77
4-3 日本軍による航空偵察写真一覧		80
4-4 高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について	三木和美・亀山玲子・金 美英・竹内加枝・小林 茂	84
4-5 大阪大学蔵 高木菊三郎旧蔵 内邦図一覧(図式も含む)		85
4-6 大阪大学蔵 高木菊三郎旧蔵 内邦図一覧図		88
5. 学会発表		
5-1 戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について	岡本有希子・長澤良太・今里悟之・久武哲也・小林 茂	93

5-2	総合地理研究会と皇戦会—初期地政学グループの活動— 久武哲也・鳴海邦匡・石橋 諭・小林 茂	98
5-3	外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題 一戦前期の地域資料の活用に向けて..... 小林 茂・村山良之・宮澤 仁	103
5-4	満州気象資料のデータベース化による中国東北地区の気候変動解析 山本晴彦・岩谷 潔・張 継権	109

6. 短報

6-1	訂正.....	118
6-2	『「地図」が語る日本の歴史：大東亜戦争終結前後の測量・地図史秘話』の刊行	118
6-3	『測量臺灣：日治時期繪製臺灣相關地圖』の刊行	118
6-4	ウェブページ「外邦図研究プロジェクト」を公開中	118

1. 本研究の経過

1-1 2006 年度の研究経過

(1) 国土地理協会の助成

2005 年度より国土地理協会からの助成をうけ、外邦図研究を継続してきた。この助成は、2006 年度も継続していただき（助成金額は 200 万円）、後述のような『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』の編集ならびに刊行、さらに第 8 回外邦図研究会の開催をおこなうことができた。

なお、2005 年秋には科学研究費（基盤研究（B）「アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成」代表者：小林 茂）を申請したが、不採択であった。これに関連して、後に日本学術振興会、研究事業部研究助成課から「不採択課題中におけるおおよその順位」について、A（上位 20%）という通知があった。この通知によれば、申請細目の「地理学」における基盤研究（B）の申請数は 32 件にたいし、採択課題は 7 件ということで、ボーダーライン上で不採択になったことが判明した。

(2) 『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』の編集と刊行

これまでの外邦図研究では、大学所蔵の外邦図コレクションの公刊を目標とし、すでに『東北大学所蔵 外邦図目録』（2003 年 3 月）、『京都大学総合博物館収蔵 外邦図目録』（2005 年 3 月）が刊行された。これらにくわえ、念願の『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』（全 234 頁）を 2007 年 1 月に刊行した。日本関係の地形図、さらに海図も含めて約 1 万 7 千点に達した。巻頭に田宮兵衛・お茶の水女子大学教授の挨拶文につづき、大浦瑞代（お茶大・院）・高槻幸枝（同）・宮澤 仁（お茶大准教授）三氏による解説、さらに故浅井辰郎先生（元お茶の水女子大学教授・日本地理学会名誉会員）の遺稿「資源科学研究所の地図の行方：多田文男先生の英断」（解説：久武哲也・甲南大学教授）を掲載するとともに、巻末には浅井先生の作製された「東半球大縮尺図 総目録及

び索引図」を付した。

(3) 第 8 回外邦図研究会の開催

2007 年 2 月 17 日（土）に、東北地理学会・お茶の水地理学会・お茶の水女子大学地理学教室と共催により、「ようやく全容がみえはじめた外邦図：大学所蔵図目録の整備と活用」と題して、第 8 回外邦図研究会を、お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 102 教室で開催した。『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』（お茶の水女子大学地理学教室編集）の刊行を記念するもので、冒頭では、外邦図の分類整理にあたられ、外邦図研究会にご参加されてきた浅井辰郎先生のご逝去（2005 年 11 月 1 日）を悼むことになった。海外からのゲストにくわえ、お茶の水女子大学地理学教室の卒業生、旧教員、現教員、学部生・大学院生も多数が参加し、盛会であった。

出席者（敬称略・順不同）：

長谷川孝治、鳴海邦匡、鈴木純子、八木 明、中沢佳子、斉藤元子、飯本節子、菊池正浩、井内 昇、式 正英、田宮兵衛、高野佳代、佐藤 久、大野康彦、児玉 茂、小澤知子、小林雪美、今里悟之、上杉和央、新沼星織、田中順子、辻野民雄、宮澤仁、村山良之、山本健太、大浦瑞代、李 虎相、大宮 治、清水靖夫、長岡正利、小林 茂、青木和子、郭 俊麟、今井健三、手塚 章、首藤英児、渡辺信孝、加藤敏雄、金窪敏知、谷治正孝、佐々木精一、謝 陽、上山昭一郎、砂田幸子、牛越国昭、西城 潔、高槻幸枝、源 昌久、松田孝一

まず浅井先生のご冥福をお祈りする黙祷をおこなった。

つぎに式 正英・お茶の水女子大学名誉教授：「大いなる師表、浅井辰郎先生を偲んで」をお聞きした。浅井先生と外邦図に関する思い出にはじまり、お茶の水女子大学所蔵図の来歴、浅井先生のお茶大着任と資源科学研究所からの外邦図の購入、外邦図の収蔵と利用、学生社版『朝鮮半島五万分の一地図集成』刊行（1981 年）のいきさつなどにふれていただいた。これからまず、外邦図の購入が、当時のお茶大の先生方の努力によるものであったことが理解された。

また、学生社版『朝鮮半島五万分の一地図集成』に使用されたお茶大所蔵図は、大部分が戦前に学生用に消耗品として購入されたもので、原図になった資源科学研究所からの図は少数とのことであった。これから、同集成には等高線を省略した「交通図」がかなり含まれる背景がよく理解できることとなった。



写真1 式 正英先生の講演

その後4件の研究発表と5件のコメントがあった。



写真2 盛況の会場

①久武哲也（甲南大）・小林 茂（大阪大）：「浅井辰郎先生と外邦図」

久武氏は入院中のため、小林が発表した。浅井先生の経歴とともに、先生が地理学における海外地域研究の先達であったことや、資源科学研究所での外邦図との出会いについて紹介した。この発表に対し、松田孝一・大阪国際大学教授（東洋史）が、『中国本土地図目録』を編集された立場から、現在大学や個人の研究者が所蔵する外邦図の多くが、資源科学研究所から頒布されたものであることを指摘しつつ、そのキーパーソンであった浅井先生の役割の大きさについてコメントされた。



写真3 松田孝一氏のコメント

②宮澤 仁（お茶大）・高槻幸枝（お茶大・院）「お茶の水女子大学が所蔵する外邦図の特徴」

お茶の水女子大学が所蔵する外邦図は、1970年代初頭、浅井先生の仲介により資源科学研究所から購入したもので、大学の外邦図コレクションとしては現在のところ最大である。この内容を示す『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』の編集作業を通じて見えてきたコレクションの全貌とその特徴が説明された。およそ13,000点の外邦図のうち約3,800点が、他の大学には存在しないお茶の水女子大学だけが所蔵する地図であること、とくに旧植民地（台湾、朝鮮半島）や満州（中国東北部）の地形図、南方地域の兵要地誌図、航空図が充実していることが紹介された。



写真4 宮澤 仁氏の説明

そのうち朝鮮半島の地形図に関しては南 榮佑・高麗大学教授（代読：李 虎相・筑波大学大学院生）から、とくに一時期秘図となっていたもの10枚について詳細なコメントをいただいた。なお、これらの図はお茶大所蔵のものをスキャンして南教授にお送りし、鑑定していただいたものである。また

郭 俊麟・中央研究院（台北）地理資訊科学研究專題中心所員は、お茶大所蔵の台湾5万分の1地形図について、その性格を多角的に検討した。



写真5 李 虎相氏



写真6 郭 俊麟氏によるコメント

③田宮兵衛（お茶大）「航空気象図について」

お茶大の外邦図コレクションの特色として、航空気象図の存在がある。この構成や記載内容の紹介とともに、作成した研究者を推定した。これに対し、谷治正孝・帝京大学教授から気象庁図書館の航空気象図の所蔵状況ならびにアメリカ軍の風船爆弾への対応に関する紹介があった。



写真7 田宮兵衛氏による説明



写真8 谷治正孝先生によるコメント

④村山良之（東北大）・照内弘通（東北大）・山本健太（東北大・院）宮澤 仁（お茶大）「外邦図デジタルアーカイブの公開と課題」

東北大学で開発が進められてきた外邦図デジタルアーカイブが本格公開されたことが報告され、インターネットに接続しつつその閲覧の実演がおこなわれた。このデジタルアーカイブは、外邦図の保護と公開・利用促進を両立させるための有効な手段として期待される。



写真9 村山良之氏による説明



写真10 山本健太氏による説明

これに対して、鈴木純子・お茶の水地理学会会長（元国立国会図書館）からは外邦図デジタルアーカ

イブに対する高い評価とともに、国立国会図書館における実務経験をふまえて、幾つかの課題が指摘された。また、**小林雪美・高野佳代両氏（国立国会図書館地図室）**から、国立国会図書館 OPAC に掲載された同館所蔵外邦図の書誌データについての紹介も行われた。



写真 11 鈴木純子氏によるコメント



写真 12 小林雪美・高野佳代両氏によるコメント

以上のように、外邦図の頒布における浅井先生の大きな役割を再認識しつつ、お茶大の外邦図の特色を検討した。また生前の浅井先生の取組みを継承しつつ、外邦図を財産として、様々な人や組織、研究分野をつなぎあわせるための資源として活用することが次世代の課題であることが感じられた。

なお、浅井先生のご逝去に関連して紙碑（西沢利栄「浅井辰郎先生の御逝去を悼む」）が地理学評論 80 巻 8 号（2007）に掲載されたが、先生の外邦図に関するお仕事への言及がなく、残念であった。

(4) その他の活動

2006 年度におこなったその他の活動は、つぎのようなものである。

①2006 年 7 月 25 日、国立公文書館で朝鮮半島・台

湾の外邦図関係資料を調査（渡辺理絵・岡田郷子・小林 茂）。

②2006 年 8 月 4 日、国立国会図書館で朝鮮半島の外邦図関係資料を調査（小林 茂）。

③2006 年 8 月 17 日、PNC 2006 Annual Conference in Conjunction with PRDLA and ECAI でのプレゼンテーション（Seoul National University Hoam Faculty House, Seoul, Korea）（岡田郷子・小林 茂）・Kobayashi, S. and Okada, S., “Japanese Military Cartography in the Korean Peninsula, 1873-1910” .

PNC (Pacific Neighborhood Consortium) および PRDLA (Pacific Rim Digital Library Alliance)、ECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative) がおこなった国際会議で、范 毅軍・中央研究院(台北) 研究員の要請で出席した。旅費は日本学術振興会からの受託研究費ならびに国土地理協会の助成によった。なお、楊 普景・誠信女子大学校教授の下記の発表もおこなわれた。

・Yang, Bo-kyung, “1:50, 000 Topographic Maps of Korea in the Late 19th Century and Early 20th Century” .

またこの発表の翌日、韓国における日本軍による地図作製の研究を続けてこられた南 榮佑・高麗大学教授の研究室を訪問した。



写真 13 南教授と岡田郷子さん
(高麗大学正門にて)

④2006 年 8 月 21 日～27 日、国史館・中央研究院・中央図書館台湾分館（いずれも台北）で、植民地期の台湾における土地調査事業ならびに中華民国の類似事業に関する資料調査を実施した（小林 茂・渡辺理絵）。旅費は千田 稔・国際日本文化研究センター教授が代表者をつとめる科研費研究「東アジアとその周辺地域における伝統的地理思

考の近代地理学の導入による変容過程」および片山 剛・大阪大学教授（東洋史）が代表者をつとめる科研費研究「1930年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用」によった。

- ⑤2006年9月1日、国立国会図書館で朝鮮半島の外邦図関係資料を調査（小林 茂）。
- ⑥2006年9月8日、アジア経済研究所（千葉幕張）で、台湾の土地調査事業関係の資料の調査ならびに複写依頼（小林 茂）。
- ⑦2006年9月13日午前中、国立国会図書館で大山巖文庫の地図の調査をおこなった。また同日午後、三菱財団の人文科学研究助成「日本の旧植民地における土地調査事業と地図作製」（助成金額：2年間で180万円、研究者：小林 茂・久武哲也・鳴海邦匡）の贈呈式に出席した（小林 茂）。
- ⑧2006年9月24日、日本地理学会大会（静岡大学浜松キャンパス）の昼休みを利用して、外邦図研究の経過報告と今後の方針を話し合った（田村俊和・村山良之・宮澤 仁・小林 茂ほか）
- ⑨2006年11月12日、人文地理学会大会（近畿大学）での発表
・岡田郷子・小林 茂「植民地期以前の朝鮮半島における日本の軍用地図作製」（『2006年人文地理学会大会要旨集』30-31頁）。
- ⑩2006年12月15日、国立公文書館で朝鮮半島の外邦図の調査（小林 茂）
- ⑪2007年2月24日、午前中に国立国会図書館で「総合地理調査研究会」関係資料の調査（小林 茂）
- ⑫2007年2月24日、日本国際地図学会の総会がおこなわれ、渡辺理絵さんが論文奨励賞を受賞した（渡辺理絵・小林 茂「日本-中国間の地図作製技術の移転に関連する資料について」、『地図』42巻3号[2004]、15-30頁のファースト・オーサーとして）。



写真13 受賞のあいさつをする渡辺理絵さん

- ⑬2007年2月24日、日本国際地図学会の総会で清水靖夫氏が特別講演「第二次大戦前後の日本の地図事情」（要旨は『地図』45巻3号[2007]、23-27頁）をおこなった。



写真14 清水靖夫先生による特別講演

- ⑭2007年3月6日～9日、琉球大学図書館、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館で沖縄県の土地整理事業関係資料を調査（鳴海邦匡・小林 茂）。旅費は三菱財団助成金によった。
- ⑮2007年3月14・16日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑯2007年3月16日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑰2007年3月、片山 剛・大阪大学教授の科研費研究「1930年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用」の中間報告書に下記の報告を寄稿した。
・小林 茂・渡辺理絵（2007.3）「近代東アジアの土地調査事業と地図作製：地籍図作製と地形図作製の統合を中心に」片山 剛編『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター2』大阪大学文学研究科片山研究室、4-14頁。
・渡辺理絵・小林 茂（2007.3）「陸地測量部修技所に在学した清国留学生の名簿に関するノート」片山 剛編『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター2』大阪大学文学研究科片山研究室、102-114頁。

（文責：宮澤 仁・波江彰彦・小林 茂）

1-2 2007 年度の研究経過

(1) 国土地理協会の助成

継続して国土地理協会より助成をいただいた（助成金額は 200 万円）。つぎに述べるように 2007 年度は科学研究費が採択され、研究の中心はこの科研費ですすめるが、とくに外邦図研究会関係の費用については、国土地理協会の助成金を使用することとした。

(2) 科学研究費の採択

2006 年秋に申請した科学研究費（基盤研究（A）「アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成」代表者：小林 茂、平成 19 年度の直接経費 870 万円）が採択された。

またあわせてデータベース科研（「外邦図デジタルアーカイブ」代表者：今泉俊文・東北大学教授、790 万円）も採択され、両者が連携しながら作業を進めることとした。なお、基盤研究だけでなくデータベース科研も 2006 年度には不採択となっていたので、本格的な作業の再開が期待され、東北大学の外邦図のスキンを終了するとともに、そのかなりの部分のウェブ公開をおこなうこととなった。

(3) 室賀信夫氏の個人資料の研究の開始

故室賀信夫氏（1907-1982）は、戦前・戦中期に京都大学地理学教室で助教授をつとめ、同教室を中心とする地政学グループで重要な役割を果たしたことがよく知られている。同氏の収集資料（古地図など）が京都大学図書館に収蔵される一方、個人資料は同文書館に収蔵された。後者には上記地政学グループに関する一次資料（報告書や書簡）が含まれており、その活動を知るには不可欠の資料である。私たちは、すでに第二次世界大戦末期に東京在住の地理学者を中心に参謀本部が組織した「兵要地理調査研究会」について、その基本資料を刊行しており（『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』2005 年）、やはり軍と密接に関係しつつ活動をおこなったこの地理学者グループの理解を深めておくことは重要な意義をもつと考え、この資料の閲覧を開始した。

(4) 外邦図研究打合会の開催

科学研究費採択をうけて、2007 年 6 月 24 日にお茶の水女子大学文教育学部 711 教室で打合会をおこなった。

出席者（敬称略・順不同）：

田村俊和、今泉俊文、李 虎相、関根良平、山本健太、長谷川孝治、今里悟之、鳴海邦匡、岡本有希子、渡辺理絵、田中宏巳、石原 潤、山本晴彦、上田 元、山近久美子、星川圭介、宮澤 仁、村山良之、小島泰雄、源 昌久、小林 茂

外邦図・日本軍撮影の空中写真・戦前・戦中期の気象観測資料の調査に関する打ち合わせのほか、外邦図デジタルアーカイブの整備に関する打ち合わせ、お茶大での外邦図のスキアン作業に関する打ち合わせなどをおこなった。また「京都大学東南アジア研究所における外邦図整理状況」と題する報告（同研究所研究員の星川圭介氏による）のほか、2003 年 9 月にアメリカ議会図書館でスキアンされた日本軍撮影の空中写真の標定作業経過の報告もおこなわれた（阪大院生の岡本有希子さんによる）。さらに山本晴彦・山口大学農学部教授（農業気象）から、戦前期の旧満州における気象観測資料のデータベース化とそれにもとづく温暖化の研究が紹介された。

(5) 高木菊三郎旧蔵資料の購入

東京の古書市「明治古典会」に、戦前から戦中にかけて外邦図の目録作成などにあたった高木菊三郎の旧蔵品が多数出品された（『平成 19 年 明治古典会七古書大入札会目録』）。そのうち中国大陸の外邦図整備に関する手書き地図および刊行図（上記目録の 1995 号「外邦図一覧図・目録・資料」で、高木菊三郎によると思われる作業のあとがみられる）にくわえ、日本本土および植民地の地図一覧図と凡例一覧図（上記目録では 1857 号「地形図記号・図式一覧表」）のコレクションを京都の古書店、臨川書店を通じて購入した。両者はいずれも大阪大学人文地理学教室に収蔵するが、早急に目録を作製しニューズレターに掲載するとともに、デジタル化して、可能な物から公開していくことにした。

(6) 第9回外邦図研究会の開催

2007年10月27日～28日、大阪大学で開催した。

出席者（敬称略、五十音順）：

石原 潤・今井健三・今里悟之・上杉和央・上田元・牛越国昭・岡本次郎・郭 俊麟・加藤敏雄・川端幸夫・魏 徳文・河野泰之・小島泰雄・小林茂・司馬愛美子・清水靖夫・鈴木純子・田中宏巳・田村俊和・長岡正利・長澤良太・中村威也・鳴海邦匡・星川圭介・源 昌久・村山良之・山近久美子・山本健太・山本晴彦・楊 普景・渡辺理絵

〈10月27日（土）〉

13時30分より、中庭会議室にて開催され、以下のような発表が行われた。

①岡本次郎（北海道教育大学名誉教授）：「外邦図の東北大学への搬入経路をめぐって」

本土空襲が始まっていた1945年4月に、第1回生として東北大学理学部地理学教室に入ってから、戦争末期、敗戦、占領という大きな時代の転換の中で、極めて密な先生方や学生相互の交流があったことや、田中館先生との思い出について語られた。

とりわけ、敗戦後に市ヶ谷の大本営陸軍部で手伝った、地図の受領の話は興味深い。先生は、閉業処理中のこの施設に赴き、参謀に大量の地図（大半は諸外国の地形図）の寄贈を求め、地図の選定をはじめ作業を学生に任せた。当初、作業にあたったのは学生2人で、西神田の借家から大本営までリヤカーを曳いて、図一種ごとに数枚ずつ抜き出して積み上げ、集めた地図を神保町に先生が借りた建物の一室に運んでいた。

当時、東北大学地理学教室の助手就任予定の土井喜久一氏の回想録によると、まもなく大量の地図を計画的に運び出す作業に移ったそうだ。多田文男先生と相談して資源科学研究所からは中野尊正氏その他、東北大学から岡本、福井英夫、三田亮一など、気象部の元軍属の女子など10名足らずで、図一種ごとに10枚ずつ抜き出し、その場で梱包して積み上げ、最後は運送業者が直接東北大学の地理教室に送った。仙台へ送った地図は鉄道貨車1両に近く、資源研に

は同量をトラックで2回運んだという。

市ヶ谷～神田へのルートを示す地形図を用いながら、外邦図の搬入について生き生きとした説明が加えられた。



写真1 岡本次郎先生の説明

②魏 徳文（南天書局、台北）：「清末と日本統治初期の台湾地図について」

1684年に台湾が清国の版図に組み込まれてから、日本に統治される19世紀末までの台湾に関する多数の地図を披露していただいた。

康熙帝に命じられた宣教師によって測量された皇輿全覽図、19世紀中葉の台湾港開港前の地図、開港後の地図、1870年代の牡丹社事件前後の地図、清仏戦争時の地図、1890年代の日本に統治される直前直後の地図、日本統治時代初期の2万分1迅速測図、および編集図などが紹介された。

こうした地図の変遷から、近代測量による地図は国土や人々の統治に寄与してきたことは明らかである。清国時代の地図は伝統的測量法によるため、地形や地勢への追求が不十分であったが、欧米諸国や日本が作成した近代地図によってその地形が明らかにされていく過程を確認することができた。



写真2 魏 徳文氏による説明

③郭 俊麟 (国立花蓮教育大学) : 「Google Earth による外邦図の活用 : 索引図と時空間ナビゲーションの試み」 (提案)

まず、Google Earth 使用開始前の準備・確認作業について説明があった。日本統治時代の台湾基本図 (地形図) の全貌を把握するために、発行年・種類・比例尺・帳数・製図機関・原図収蔵単位の項目に着目して整理し、4 つの発行期ごとの索引図と影像接合図を示した。また、復刻版 5 万分 1 台湾地形図について、鮮やかな一覧図を交えながら、1980 年の学生社と 2007 年の上河文化の復刻出版に関する考察が加えられた。終戦まで (1944 年の米軍が調製した地形図を含む) の台湾における 5 万分 1 地形図も比較した。

次に、Google Earth による外邦図の活用事例として 3 つの提案がされた。1 つは Google Earth を共通のプラットフォームとして、日本の外邦図研究者と台湾の GIS 研究者との技術や情報交換を促進し、外邦図の一覧図とコンテンツを編集するというものである。2 つ目に、地域変遷を直感できるプラットフォームとして、Google Earth による地図の時系列的な重ね合わせを活用した、台湾都市の事例を紹介した。最後に、鄭和の西洋航海に関する時空間ナビゲーションや大正時代の花蓮県における日本移民村のバーチャルナビゲーションを事例に、文化・知識を再発見するバーチャルスペースとしての可能性を指摘した。



写真 3 郭 俊麟氏による説明

④故久武哲也 (甲南大学)・鳴海邦匡 (大阪大学)・小林 茂 (大阪大学) : 「室賀文書資料の検討」 (報告)

これまで不明な点が多かった「総合地理研究会」

の活動の全容や軍との関係などにアプローチする手掛かりとして、京都大学・大学文書館に架蔵される室賀信夫氏の個人資料のうち書簡と原稿に着目し、検討を加えた。

特に皇戦会との関係について、1939 年までは皇戦会の財政的な基礎が確立せず、研究を依頼しても長期間経費の支払いが遅延していたこと、皇戦会からの依頼に応じて各種レポートを提出していたこと、さらにレポートの内容は陸軍将校・高嶋に高く評価され陸軍の幹部に紹介されていたことなどが確認された。このような点から、当時の総合地理研究会は今日のシンクタンクのような機能を果たしていたことが推測される。

今後は、資料目録をさらに精緻なものにするだけでなく、クロノジカルに整理し、画期を検出し、重要なものについては刊行していく必要を述べた。



写真 4 鳴海邦匡氏による説明

⑤懇親会

18 時 00 分より学内食堂「宙 (そら)」で懇親会にうつった。

〈10 月 28 日 (日)〉

9 時 00 分より、中庭会議室にて開催され、以下のような発表が行われた。

⑥長岡正利 (国土地理院客員研究員・国土地理院 08) : 高木菊三郎旧蔵の「地形図記号・図式・一覧表」、「外邦図一覧図・目録・資料」の検討と活用法に関する討論 (コメント)

高木菊三郎旧蔵の地図に該当する地域の 10 万分 1 図という観点と、満州と支那本部における地図作成

とその作成記録としての地図一覧図 (Index Maps) という観点とからコメントがあった。

まず、「一覧図 (表)」は業務用資料のため、系統的な保存の対象とされず、国立国会図書館でも蔵書として扱われていない。「地図図式」や「作業規程」も同様である。冊子体として (海図・航空図を除く)、『北方地区地図整備目録』(参謀本部、1943年)、『南方地域地図整備目録』(参謀本部、1942年)、『関東軍調製・陸軍秘密地図一覧図』(関東軍司令部、1941年)、『支那地域兵用地図整備目録』(大本営陸軍部、1944年)、『支那製地図一覧図』(陸地測量部、1936年) が例示された。また、他に多数の一枚刷りの一覧図も存在することも指摘された。

次に、満州における地図作成について説明があった。当初はロシア版や中華民国製の地図を代用していたが、明治末期からは必要に応じて「迅速測図」や「目算及記帖測図」を併用するようになり、1933年以降は関東軍測量隊による現地実測測図も行われていた。

一方、中国本土については、明治末期から大正期にかけて「目算及記帖測図」が主体であり、1934～37年に東部で民国5万分1図が、奥地で民国10万分1図が利用されていたことを指摘した。



写真5 長岡正利氏による説明

いて整理し、1942年に敷かれた48の満州国地方気象観測台の位置を図示した。続いて、気象庁図書館における満州気象月報の保存状況を概観し、1941年4月以降の気象月報については、日本と中国において保存されておらず未収集の状況にあることを明らかにした。1933～40年の満州気象月報については、国立公文書館「アジア歴史史料センター」にて電子提供されている。それらのデータを元に、1910年から100年間の瀋陽、長春、ハルピンにおける月平均気温(1月・8月)の推移を折れ線グラフで示し、気温の変化と社会状況について述べた。

米国議会図書館では気象資料の検索・撮影が行われた。その結果、極秘扱いの「満州高層気象月報」(第14～18号、1944年6～10月)や「内南洋気象月報」(第14～18号、1937～41年)などが発見され、南洋庁における気象観測業務の沿革についてうかがうことができた。しかし、満州気象月報はみつからなかった。

今後は、満州気象月報(1941年4月以降)の所在を追究するとともに、中華人民共和国建国以降の気象観測業務と資料の状況把握・データの接続や、長期的な気象データベースの構築に基づく温暖化分析といった研究の方向性が考えられた。



写真6 山本晴彦氏による説明

⑦山本晴彦(山口大学)・今里悟之(大阪教育大学)・小林茂(大阪大学):「ワシントン議会図書館、公文書館の調査について」(報告)

前半では、気象庁図書館における満州気象月報について触れ、後半で2007年9月17～22日に行われた、米国議会図書館、米国公文書館での、満州・南洋庁における気象観測資料の調査報告がされた。

まず、満州における気象観測業務とその変遷につ

(7)第10回外邦図研究会の開催

2008年2月10日に立正大学大崎キャンパス、11号館8階、第6会議室で開催した。

出席者(敬称略・順不同):

中村和郎、大塚昌利、田村俊和、山本晴彦、佐藤秀樹、清水靖夫、鈴木純子、今井健三、渡辺信孝、渡辺理絵、山近久美子、長岡正利、加藤敏雄、山

本健太、宮澤 仁、関根良平、村山良之、米澤 剛、松岡資明、古市剛久、石原 潤、田中宏巳、小林雪美、長澤良太、司馬愛美子、堀井英夫、高野佳代、楊 普景、小島泰雄、源 昌久、幡田一雄、熊谷 清、大堀和利、中川 透、高村聡史、三木和美、池中香絵、金 美英、小林 茂

①長岡正利（もと国土地理院）「外邦図作製の経緯を記録に留める各種一覧図（索引図）と外邦図の『初刷』一覧」

これまでの研究をふまえ、外邦図の全容を示す資料として、各種の一覧図を紹介するとともに、その利用の必要性を指摘された。また、同様に外邦図の初刷り集成が現存していることにくわえ、その目録としてセットになった『国外地図目録』・『国外地図一覧図』が国土地理院・国立国会図書館・防衛省防衛研究所などに保存されていることなどが紹介された。紹介された一覧図と本年度に購入した高木菊三郎旧蔵の「外邦図一覧図・目録・資料」にふくまれる図との比較についても議論がおよんだ。



写真7 長岡正利氏による説明

②大塚昌利（立正大）「立正大学図書館の外邦図について」

立正大学図書館が所蔵する田中啓爾文庫の韓国・中国の地形図（計約200枚）、石川与吉文庫の東亜輿地図（100万分の1、102枚）、中国（旧満州）の各種地図（計82枚）・朝鮮半島の各種地図（計691枚）、樺太・台湾の地形図（ただし少数）について、報告があった。



写真8 大塚昌利氏による説明

③今里悟之（大阪教育大）・池中香絵（大阪大・院）・岡本有希子（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）「（報告）アメリカ議会図書館蔵、日本軍航空偵察写真について」

今里氏欠席のため、池中さんが発表した。2007年9月にアメリカ議会図書館で発見した、日本軍による航空偵察写真集「豪州西北部飛行場要覧」を中心とする、偵察写真について、その目録を示すとともに、特色を検討した。田中宏巳・防衛大学教授より撮影当時の日本陸海軍のオーストラリア侵攻に関連した思惑についてコメントがあったほか、今井健三氏（水路協会）より、海上保安庁海洋情報部図書室にも類似の偵察写真集が保存されているとの紹介があった。また中村和郎・日本国際地図学会会長は、ウィスコンシン大学留学時に日本を戦時中に撮影した空中写真が、教材として使われていたとコメントされた。

④三木和美（大阪大・院）・亀山玲子（大阪大・学生）・金 美英（大阪大・院）・竹内加枝（大阪大・学生）・小林 茂（大阪大）「（報告）高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について」

東京の古書市「明治古典会」で購入した高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について、目録を示すとともに、保存状況、特色を検討した。

⑤小林 茂（大阪大）・村山良之（山形大）・宮澤 仁（お茶の水女子大）「外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題」

日本地理学会でひらかれるシンポジウム『地域の知』の統合に向けて：地域情報データベースの利活

用」で発表を予定している内容を紹介し、討論の素材とした。とくに外邦図研究およびそのデータベース化をふりかえって、その問題点と課題を検討した。ウェブで公開するにあたっての技術的な問題（解像度と認視性、保存媒体、緯度経度の記載のない図のインデックス上での表示、特殊な図の表示など）のほか、日本軍が南京などで「鹵獲（ろかく）」した民国製地形図を複写して作製した図などの公開に関連して予想される問題、さらにデータベースの長期的な維持管理についても課題を検討した。

発表の後、佐藤秀樹氏（岐阜県図書館世界分布図センター）より、岐阜県図書館の外邦図コレクションとその閲覧について紹介があった。つづいて堀井英夫氏（アジア歴史資料センター）および松岡資明氏（日本経済新聞）より、今後公文書館制度の見直しがおこなわれる可能性があることとの指摘があった。また、小林雪美氏（国立国会図書館）より、国立国会図書館での外邦図閲覧サービスの特色についてコメントがあった。



写真9 宮澤 仁氏による説明



写真10 佐藤秀樹氏によるコメント



写真11 堀井英夫氏によるコメント

会議終了後、ゲートシティ大崎2Fの「一番どり」で懇親会を行った。

(8) その他の活動

- ①2007年4月26日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ②2007年5月19日、国立国会図書館で台湾・朝鮮半島関係の外邦図の調査（渡辺理絵・小林 茂）。
- ③2007年5月31日、京都大学文書館にて、同人間・環境学研究科の松田 清教授と同文書館の西山伸准教授に会い、同館所蔵の故室賀信夫氏（元京都大学文学部助教授）の個人資料の閲覧と利用について承諾をえた（小林 茂・鳴海邦匡）。
- ④2007年8月23日～30日、中央研究院・中央図書館台湾分館・台湾大学図書館（いずれも台北）で、植民地期の台湾における土地調査事業ならびに中華民国の類似事業に関する資料調査を実施した（小林 茂・渡辺理絵）。旅費は三菱財団の助成金を使用した。



写真12 米議会図書館マディソン館の前で（次頁⑤）
右から山本、太田米司氏（米議会図書館アジア部日本課）、
藤代真苗氏（同目録部日本課）、小林（今里撮影）

- ⑤2007年9月16日～24日、アメリカ議会図書館、公文書館における外邦図・日本軍撮影空中写真・気象観測資料の調査（小林 茂・山本晴彦・今里悟之）。
- ⑥2007年9月20日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑦2007年9月27日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑧2007年10月7日、日本地理学会秋期学術大会（熊本大学）で発表
・岡本有希子・長澤良太・今里悟之・久武哲也・小林 茂「戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について」（『日本地理学会発表要旨集』72, 59頁）。
- ⑨2007年10月12日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑩2007年11月2日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑪2007年11月20日、人文地理学会大会（関西学院大学）での発表
・久武哲也（故人）・鳴海邦匡・石橋 諭・小林 茂「総合地理研究会と皇戦会：初期地政学グループの活動」（『2007年人文地理学会大会要旨集』58-59頁）。
- ⑫2007年11月21日、外務省外交史料館で資料調査（渡辺理絵）。
- ⑬2008年2月6日、国立国会図書館で樺山文庫の資料調査（渡辺理絵）。
- ⑭2008年3月2日～10日アメリカ議会図書館、公文書館における外邦図・日本軍撮影空中写真・気象観測資料の調査（小林 茂・高村聡史・山近久美子・渡辺理絵）。
- ⑮2008年3月12日、京都大学文書館で同館所蔵の故室賀信夫氏（元京都大学文学部助教授）の個人資料の研究に関する会議を開催した（田中宏巳・源昌久・鳴海邦匡・小林 茂）。なお当日、同館の西山准教授は入院のため、人間・環境学研究科の松田教授は所用のため出席できなかったが、資料の一部を閲覧し、今後の資料集の刊行や解説の執筆について話し合った。
- ⑯2008年3月29日、日本地理学会春期学術大会（獨

協大学）シンポジウム「『地域の知』の統合に向けて：地域情報データベースの利活用」で発表
・小林 茂・村山良之・宮澤 仁「外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題：戦前期の地域資料の活用に向けて」（『日本地理学会発表要旨集』73, 24頁）。
・山本晴彦・岩谷 潔・張 継権「満州気象資料のデータベース化による中国東北地区の気候変動解析」（『日本地理学会発表要旨集』73, 25頁）。

(9) 研究分担者、久武哲也・甲南大学教授の逝去

2007年7月27日夕刻に、本研究に大きく貢献してきた久武哲也・甲南大学教授が自宅で逝去された。享年60歳であった。2年間の学部長職の任期が終わりかかった2006年春に胃ガンであることが判明し、手術の後は一時期回復するかにみえたが、2007年にはいって悪化することになり、小康をえて自宅で療養されていたところであった。

外邦図研究における同氏の仕事は大きく二つに分かれ、一方は内外の外邦図コレクションの系譜に関するもので、下記の論文がある。

久武哲也（2005）「日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係」地図情報, 25(3)：7-11.

もうひとつは、第二次世界大戦末期に東京在住の地理学者を中心に参謀本部が組織した「兵要地理調査研究会」に関するもので、海外における戦争と地理学者との関係も検討し、その特色を位置づけている。

久武哲也（2005）「『兵要地理調査研究会』について」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 5-19.

なお、病床の久武氏に、松田 清・京大教授による、故室賀信夫氏の個人資料が京大文書館へ収蔵されたことを紹介する記事（京都大学文書館だより, 8号, 2005）を示すと、大きな関心を示した。このた

め、弟子の鳴海邦匡・阪大博物館助教は、同資料中の地政学関係の報告や書簡を撮影し、そのプリントを久武氏に提供した。久武氏はこれを検討して、同氏自身の見解もふくめ、今までのこのグループの理解について、修正すべき多くの点を認め、重要な報告や書簡を収録し、解説を付した資料集の編集を構想することとなった。この関心が、下記の同氏の論文の延長にあることは、あらためていうまでもない。生前同氏は、「戦争と地理学者」を研究テーマの一つにしてきたと語っていたことも思い出される。

久武哲也 (1999, 2000) 「ハワイは小さな満州国：日本地政学の系譜」現代思想, 27 (13) : 196-204, 28 (1) : 60-82.

久武氏の地理学史・地図学史に対する造詣はふかく、また広い視野のなかで対象を理解しようとする態度は、多くの関係者に信頼されており、京都の地政学グループのように評価の容易でない対象についても、その活躍が期待されていた（山野正彦「久武哲也評議員の死を悼む」人文地理, 60 (1) : 96-98, 2008 参照）。私たちは大きな戦力を備えた、心強い同志を失ったことになる。しかし、同氏が生前に病床でこの方面の研究について、いくつか指針を示しておい

てくれたことは、大きな救いである。今後この指針に沿って久武氏の構想の実現に努力するとともに、あらためてご冥福をお祈りしたい。



写真 13 久武哲也氏

外邦図調査に際し、母方の祖母の旧居の近くで
(ハワイ大学正門付近 2002年9月 今里悟之氏撮影)

(文責：三木和美・波江彰彦・小林 茂)

2. 第8回外邦図研究会

日 時：2007年2月17日（土）

会 場：お茶の水女子大学

共 催：お茶の水地理学会・東北地理学会

第8回外邦図研究会「ようやく全容がみえはじめた外邦図：大学所蔵目録の整備と活用」が開催された。外邦図の保存や整理に尽力された浅井辰郎お茶の水女子大学名誉教授が、折しも同大の目録がほぼ完成した2006年初冬にご逝去され、研究会の最初に式正英お茶の水女子大学名誉教授による「大いなる師表、浅井辰郎先生を偲んで」と題する追悼講演があった。参加者は53名、講演とコメントおよび参加者の討論が熱心に行われ、予定を1時間ほどオーバーした。以下に講演要旨とそれぞれに対するコメントを掲載する。

お茶の水女子大学地理学教室と外邦図との関わり

式 正英（お茶の水女子大学名誉教授）

1. 「お茶の水女子大学所蔵外邦図目録」について

この度、数年に亘る外邦図研究の成果の一部として「お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録」（2007年1月）が刊行された。刊行に至るまでの経緯については同目録書の解説や改題において詳しく述べられている。外邦図とは戦時下の陸地測量部において調製された近隣諸国の範囲の地形図類であり、字義からは「外国の地図」に当てはめての用語と解されるが、同目録書によれば日本の地形図がかなりの数含まれている。しかもそれらには戦後に刊行された版が含まれ、戦後に編集された地図集が母体であることが判る。

これに関しては1970年、浅井辰郎教授の斡旋で資源科学研究所所蔵の「東半球縮尺図 16,000枚」¹⁾を一括して購入した際、その中に含まれていた地図すべてを、原則的に今回其の俣目録化した事に原因があると思われる。当時はお茶大の地理学教室員は上記の一群の地図を「資源研の地図」と呼んで、折々拝見させて戴く程度であった。「東半球縮尺図」として資源研での呼称は、参謀本部から移動した地図の由来を曖昧にする意味があったであろうし、まして軍での呼称であった「外邦図」とは敢えて言うまいとする様な認識はあった。

お茶の水女子大学は戦後の1949年に発足した新制大学ではあるが、明治初年の1874年に創設された東京女子高等師範学校を引継いで建学されたので、明治大正と昭和戦前の遺産を其の俣継承した、歴史的伝統の上に建つ学校である。女高師時代には地理学教室として独立はしていなかったが、地歴科地理学の専任教授は着任していたので、地図類の整備も着々とすすめられて来ていた。地形図の製本されたものは、単行本と同様図書備品として扱われており、2万分の1地形図、5万分の1地形図、20万分の1地勢図等戦前版が数多く所蔵されて来た。その分はどうやら今回の目録には合わせて掲載されている様に思われる。

この「外邦図目録」には「資源研から購入した地



浅井辰郎先生（2003年11月）

図」を中心に、女高師時代に収集した地図、関係者から寄贈された地図を含む16,886図幅を収録したとある²⁾。併し筆者在籍中（1959～1992年の33年間）の記憶にある外邦図の中に、目録から洩れているものが他にもある様にも思われる。それは綴じられていない一枚々々の単葉の地図であり、消耗品扱いとされて来た類いである。

在籍当時、大学では一般的に地形図は、図書同様の扱いとして購入され、図書館の捺印を受けるが、資料として保存用となる以外の、調査研究用や学習作業用の地図は消耗品として扱われ、教官や学生個人の使用に供された。つまり単葉の地図は備品に登録されて保存されるものと作業用に使用され消耗品扱いになるものとの2種類に区別された。こうした扱いは地図利用に伴う宿命でもあったし、女高師からお茶大へ継承された地図の取扱いのルールでもあった。

その内の女高師時代の作業用地形図が約1,000枚程単葉の形で、地理学教室製図室の地図棚に保管されていた。主にかつて旧領域であった朝鮮半島であり、陸地測量部製の5万分の1地形図である。作業用と判断した根拠は、土地利用別の色分け作業途中の図や学生の名前が記された図が数10図葉も含まれていたからである。これらが今回の目録に収録されたか否かは、作業過程に携わっていない為明らかとは言えなかったが、当原稿執筆中（2007年11月上旬）に手にすることが出来た「お茶の水地理 第47

号」に掲載された宮澤 仁准教授らの論考³⁾によって、この分が含まれていることが明白になった。尚今回の外邦図目録中にある日本の地形図などを除いた本来の外邦図の総計は12,909図幅とされた。更に製図室地図棚に保管されていた単葉の地図の外邦図は合計1,276枚、内朝鮮半島分は665枚の現存することが、宮澤准教授の調査によりこの度明らかにされた⁴⁾。

2. お茶の水女子大学の外邦図と浅井辰郎教授の着任

歴史の古い学校には思い掛けない所に資料が寝かされていることがある。昭和60(1985)年、当時地理学科主任の井内 昇教授から附属高校の桜井孝行教頭宛に出された文書⁵⁾によると、大陸地形図(朝鮮、満州)2.5万分の1、5万分の1、10万分の1の計338枚と海図70枚の寄贈を受けたとする内容であった。この文書は高校(又は個人)から大学への寄贈に関する確認と礼状なのであるが、備品の所管換えではなく、消耗品的扱いの物品資料の委譲と思われる。これらの地図が地理学教室の中で、その後どのように保管処理されたかは筆者の記憶には定かではないが、「資源研の地図」とは異なったルートで、外邦図が教室内にある程度の量蓄積されて来た別の事例となろう。

お茶の水女子大学は1975年以降から現在は博士課程が設置された大学院大学となっているが、1949年新制大学として発足してから暫くは学科目制3学部の小規模大学であった。1963年以降学部ごとに研究科(修士課程)を設置する機運が生じ、1966年には人文科学研究科ができて、全学が修士課程を持つ講座制大学へと移行した。地理学科においても翌昭和42(1967)年4月、浅井辰郎教授をお迎えして陣容を整えることになった。即ち人文地理学、自然地理学の2学科目制から人文地理学、自然地理学、地誌学の3講座制となった。人文地理学講座は松井 勇教授・正井泰夫助教授、自然地理学講座は浅井辰郎教授、浅海重夫助教授、地誌学講座は渡辺 光教授・式 正英助教授、貝山久子助手で構成された。

浅井辰郎教授は気候学を専門とされる既に著名な地理学者で法政大学教授であられたが、渡辺教授か

らの徳憑もあって国立大学であるお茶の水女子大学に転出された。浅井教授は京都大学地理学の御出身であり、大学卒業後、満洲の建国大学に赴任されたが、兵役に就かれ戦後2年間のシベリア抑留を体験された後帰国され、1947年12月直ちに資源科学研究所に勤務された。そこで外邦図(東半球大縮尺図)と出合い、その整理や管理を担当されることになった。法政大学に転出後も資源科学研究所研究員を兼務され、お茶の水女子大学に来られてからも、非常勤研究員を同研究所解散時の1971年3月まで兼務されていた。

昭和45(1970)年、財団法人資源科学研究所が解散される事がきまり、その所蔵する地図を処分したいとの意向が浅井教授を介してお茶大地理学教室にも伝えられて来た。丁度その時期の1970年3月、やや長期にわたり教室主任であられた渡辺 光教授が定年御退官を迎えられて、松井 勇教授が主任になられた。浅井教授は上述した関係から資源科学研究所の要請に応えるべく「東半球大縮尺図(「東半球詳細地図」とも表現される)」を、貴重資料の散逸を防ぐ為にお茶の水女子大学で購入するよう事務局に熱心に働きかけられた。

その努力の甲斐があつて、年間の大学の経常経費とは別枠の国の予算として、購入経費220万円を獲得できたことにより、この願いは解決された。文部省に折衝に当られた当事者は萬波 教氏(東大国文卒)であり、市古宙三文教育学部長(東洋史)、波多野完治学長(心理学)の時代である。国費による上記地図購入の成果は、当時折衝に当られた大学スタッフの理解と好意を得られたことが大きく働き、又戦中に開所された資源科学研究所は当初は文部省に所属していたと言う利点もあつたであろう。資源科学研究所としては解散に直面し職員の退職金の元資にあてる必要性があつたと浅井教授が説明されている⁶⁾。また同教授御自身は東半球大縮尺図を齎すことは、お茶大への「転勤土産」と意識されていた⁷⁾。

3. お茶の水女子大学での外邦図の管理

この様な経過を経て一括購入された「東半球大縮尺図」は、1971年1月お茶の水女子大学本館1階の

浅井研究室に搬入された。架台3基に吊り下げられた地図集の形であり、全部で191冊分あった。1972年3月、既に建築中であった文教育学部棟の新築完成に伴い、同年6月地理学教室は新学部棟7階に全部が移転し、上記地図は計測室(704室)に移された。又1970年度中に浅井教授の科学研究費によってM2型マイクロフィルム撮影機も購入された。この器材は建物移転後、新棟7階南西角の浅井研究室(701室)の中に設置された。この教室の移転の時期は、筆者にとっては偶々欧米での1年間の長期在外研究中にあたり、何の助力も出来ずに終わってしまい、申し訳なく思っている。

浅井辰郎教授のお茶大在籍中は、最も活発に「東半球大縮尺図」である外邦図を利用されていたと思われる。当該地図資料に関してはすべて浅井教授の管理下にあったので、他大学へのコピー供与の事例等について、他の教室員に知らされることはなかった様に思う。マイクロフィルム撮影機と外邦図のお茶大への購入を、殆んど同時に進められ首尾よく成功されたことには、かなり御満足の様子であった。御退官の折の述懐に、お茶大在勤中「欲しい器械や資料は大体叶えられた」⁸⁾と記されている。このたびの一連の外邦図研究ニューズレター等⁹⁾によって、浅井教授在勤当時の外邦図をめぐる他大学等との交流の詳細を、当時の教室員であった筆者も初めて知り得た次第である。つまり「東半球大縮尺図」に関しては、浅井教授在任中進んで御自身が管理にあたられており、教室会議等でも複製配布の一切の業務の報告はなされなかったと覚えている。

松井 勇教授は1973年3月定年退官され、浅井教授は1975年4月から1979年3月まで附属高校校長に併任せられて後、1980年3月に定年退官を迎えられた。1980年4月以降は「東半球大縮尺図」の管理、複写などは他の教室関連事項と同様、教室主任の主宰する教室会議事項として処理されることになり、図書・地図の整理や貸出し収納等の実務は定期的に助手が勤めてきた。

1981年6月、筆者が教室主任を担当している折、出版社の株式会社「学生社」より教室に接触があり、鶴岡正巳社長より教室所蔵地図の借用願が提出された。浅井教授退官後も東京都立大学東洋史研究室よ

り外邦図閲覧の希望があり、そうした要請や依頼にはなるべく応じていたが、その内コピーだけを目的とする貸出し要請があつて対応に苦慮した経過があつたかと記憶する。即ち備品としての貴重資料はそれなりに慎重に扱われて然るべきとの観点に立つ必要があつた。消耗品なら滅失しても致し方ないで済むが、備品となればそうした扱いでは済まない筈である。「東半球大縮尺図」は購入の経緯から貴重資料の備品であつた。

文献「琉球諸島地形図集成解題」(柏書房)に記載された浅井教授の所論によれば「第47、48冊は台湾、第49～55冊は朝鮮の各5万分1地形図で、これは1981(昭和56)年に学生社が復刻、出版した」とある¹⁰⁾。この記述は浅井教授が御退官後のことを想像で書かれたもので実情とは異なっている。上記の様に鶴岡社長よりの要請があり、これに対応する為に、主に消耗品扱いの女高師以来蓄積されて来た朝鮮の地形図を暫時貸与することにしたのである。

そもそも鶴岡氏は飯本信之名誉教授¹¹⁾の御子息と同窓で同教授とも親しく、同氏よりの依頼は本学が外邦図を保持しているとの情報を得た上であつた。

「この度小社では朝鮮半島5万分の1地図集成の刊行企画にあたり、小社は原地図を各方面で蒐集し、全地域715図のうち425図を手に入れました。つきましては不足の290図について、貴地理学教室所蔵の同図を借用致したくお願い申し上げます」と必要な図幅を明示した索引図付きの文書で申し出られた。つまり学生社が独自に蒐集努力して来たが、不足分をお茶大の所蔵地図で補いたいが、借用させて貰えるであろうかとの問い合わせと依頼であつた。それに対し、教室側としては消耗品扱いの女高師伝来の該当の地形図を貸与し、それでも不足する10数枚を「東半球大縮尺図」からの貸与に応じたと覚えている。貴重備品である「東半球大縮尺図」を、できるだけ保護するために採った処置である。決して安易に朝鮮、台湾の地図集全体の貸出しに応じた事実は無いのである。御退官後も巨細を御報告できていたとすれば、より正確な御理解を戴けたのではないかと思うと、いささか残念な思いが残る。

小規模の教室に貴重資料が保管される場合、その円滑な利用に関しては問題が起りやすい。利用者が

純粋な学術的研究目的で訪れる場合には、いつもなるべく円滑に対応できて来たと思うし、利用者にも満足して頂けたと思う。大規模な貸出しや複写要請に応ずるのは殆んど困難と考えられる。利用意図も選別せざるを得ないことも起り得る。出版を意図した複製目的を含めて、たとえ研究用としても取り敢えずの大量の複製依頼には、資料の所在移転による資料価値低減の問題も起り得るから、諸種の事情が充分考慮され対応されてよい筈である。

所在情報の目録化は貴重資料利用への道を開く第一歩である。研究教育が大学の目的である以上、一般へのサービスは余力があれば応じられる範囲となるのは止むを得ない事柄であろう。関係者により地図資料のデータベース化等より利用し易い環境を構築する方向で模索推移することが望まれる。

注

- 1) 浅井辰郎(1972)：東半球大縮尺図のことも お茶の水地理 13号 pp. 48-49。
浅井辰郎(1971)：プラスマイナスの当り年 お茶の水地理 12号 pp. 53-54。
- 2) 大浦瑞代、高槻幸枝、宮澤 仁(2007)：お茶の水女子大学所蔵の外邦図について 『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』 pp. 3-4, お茶の水女子大学文教育学部地理学教室。
- 3) 宮澤 仁・高槻幸枝・大浦瑞代・田宮兵衛・水野 勲(2007)：お茶の水女子大学所蔵外邦図コレクションの全体像 お茶の水地理 47号 pp. 1-14。
- 4) 宮澤 仁准教授より筆者当てに送られた通信(2007年11月13日)による。同准教授の調査によると「韓国及び北朝鮮 665枚(内5万分1 599枚)、満洲・関東州 70枚、海図298枚、航空気象図87枚、等(以

下略)計1,276枚」の数字である。

- 5) 昭和60年3月31日、地理学科主任 井内 昇より桜井孝行宛てに発行された文書。「いずれも現在では手に入れにくい貴重なもので、教室としては保管に留意し、教育や研究に利用させて頂きたい」と記されている。「大陸地形図、朝鮮5万分の1 176枚、満洲 10万分の1 101枚、5万分の1 24枚、2万5千分の1 37枚、海図 日本総部及び付近諸海 70枚、合計408枚」の内容である。
- 6) 浅井辰郎(1999)：琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか 『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』 解題 pp. 23-26, 柏書房。
- 7) 上記浅井辰郎(1999)の所論中にもある。又『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録(2007)』に掲載の「浅井辰郎(2000)：資源科学研究所の地図の行方—多田文男先生の英断」の中にも記載がある。
- 8) 浅井辰郎(1980)：お茶大十三年、その感謝と希望 お茶の水地理 21号 pp. 3-4。
- 9) 久武哲也(2003)：旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学・研究施設等所蔵の外邦図との系譜関係 外邦図研究ニューズレター No.1 pp. 15-20。
小林 茂(2005)：「外邦図」へのアプローチ 地図情報 Vol.25 No.3 pp. 4~6。
久武哲也(2005)：日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係 地図情報 Vol.25 No.3 pp. 7-11。
- 10) 注6)の文献のp.25にこの記載がある。
- 11) 飯本信之名誉教授(1895~1989)は東京女高師教授からお茶の水女子大学教授、初代文教育学部長を勤められ、地理学科の創設に当られた方である。

浅井辰郎先生（1914-2006）と外邦図

久武哲也（故人、甲南大）・小林 茂（大阪大）

お茶の水女子大学所蔵の外邦図目録を考えるに際して、その収蔵・保存に努力された浅井辰郎先生の役割はきわめて大きく、先生のご努力のおかげで、私たちは現在のようなかたちで外邦図と接することができるといってもよい。大学所蔵の外邦図の来歴をみると、多数の方々がこの保存や整理に関与されていることがわかる（金窪, 2004; 三井, 2004; 中野, 2004）。浅井先生は、このなかで資源科学研究所旧蔵の外邦図を系統的に分類整理し、重複分をいくつものセットとするだけでなく、それを全国の主要大学に配分された（浅井, 1999; 2007; 久武, 2005）。多くの大学に現存する外邦図コレクションの骨格をつくられたわけである。以下では、浅井先生が情熱をかたむけてこのような外邦図の分類整理にあられた背景を簡単に検討し、先生のお仕事の意義を考えてみたい。

浅井辰郎先生と外邦図との関係を考えるに際して、先生と多田文男氏（1910-1978）との関係をまず考慮する必要がある。多田氏は、第二次世界大戦末期に大本営参謀であった渡辺正氏が組織した「兵要地理調査研究会」の中心メンバーであり（久武, 2005）、その関係から、終戦直後の参謀本部からの学術研究を目的とする外邦図の持ち出しに大きく関与し、さらにその保存、整理まで重要な役割をはたした。多田氏が駒澤大学に寄贈した大量の外邦図（大槻, 2005）も、上記のような経緯の中で入手したものであろう。

さて、浅井先生の父である浅井治平氏（1891-1974）は、1921～1924年東京大学地理学教室に在学し、多田氏と交友関係を持った。これが、浅井先生と多田氏との関係のはじまりをつくったと考えてよいであろう。治平氏が30歳になって東京大学に入学したのは、小学校の代用教員・準教員をへて1912年に静岡師範学校を卒業し、教員生活を続けながら、1914年に東京高等師範学校に進学し、これを卒業して（1918年）、師範学校・中学の教師に就任してのちも、さらに地理学研究を志していたからと考えられる（「浅井



写真1 浅井辰郎先生（2003年11月）

治平・やえ等の年譜」、浅井編, 1981, pp. 217-228.)。東大地理学教室在学中の治平氏について、多田氏はつぎのように書いている。

浅井さんは私より九つ上なものですから、親爺のようなもんでした。……[治平氏が]葱状構造という地形を発見されまして、それを当時おえら方の雑誌である地質学雑誌に学生のうちに発表されたという状態でした、私は浅井さんからいつでも地理学を習っていたという状態でございます。それと浅井さんには特に我々学生の意見を先生に取継いでもらうことをお願いしていました。……（多田, 1981）

治平氏が若い学生から兄のようにしたわれていたことがうかがえる。

浅井先生が1939年に京都大学文学部を卒業し、大

学院に進学後、1940年に満州建国大学の助手に就任してから、1942年に多田文男氏（当時東大助教授）が副団長をつとめる「山西学術調査」に陸軍嘱託として参加したことは、こうした治平氏を通じた関係が一定の意義をもったと考えられる。多田氏は1933年の「熱河調査」以来、数度にわたる中国大陸での調査に参加し（久武，2005；佐藤，2005）、「山西学術調査」では、当時陸軍士官学校教授であった渡辺光氏（1904-1984）とともに、計画の推進者であった。浅井先生は、この「山西学術調査」後半の五台山の調査では、気象班として独立した活動をおこなった（山本編，1943，pp. 252-261）。

浅井先生が1947年11月にソ連抑留から復員したあと、12月に資源科学研究所員に就任し、さらに1948年に法政大学の教員として職をえたことも、親子2代にわたる多田氏との縁とは無関係とは考えられない。資源科学研究所は、文部省に設置された資源科学諸科学連盟（1941-1942）を発展させたもので、1942年11月に開所した。地理部門には多田文男（東大助教授）・小笠原義勝（1914-1964）・坂啓道が所属した（佐藤，2005）。第二次大戦後民間にうつされて1971年まで存続し、研究成果として『資源科学研究所彙報』を刊行している（三井，2004）。第二次大戦終結後、中野尊正・三井嘉都夫氏らによって参謀本部から持ち出された外邦図は、各地を転々としたあと、この資源科学研究所（当時は新宿区百人町の陸軍技術研究所あと）に保管されることになった。そこで浅井先生は外邦図と出会うことになったわけである。当時を回想して、浅井先生はつぎのように書いている。

資源科学研究所に運び込まれた膨大な地図は、筆者が勤め始めた1948（昭和23）年には、一部は2階の廊下にある天井まで届く大戸棚に詰まっていたが、大部分は半地下室に埃をかぶっていた。半地下室には直径1メートルくらいのダクトが何本も縦横に走り、1、2階の元軍用実験室の有毒ガスを吸引していた模様で、地図はこのダクトの間にうず高く積み上げられていた。四方の壁には高さ、幅とも1メートルくらい窓が所々にあったが、ガラスは何枚か割れたままで、そこからロームの土埃が容赦なく吹き込み、

地図を厚く覆っていた（浅井，1999）。

雨露はかからないにしても、放置状態だったわけである。

こうした外邦図の整理は、「サンフランシスコ平和条約が締結されたので[1951年]、もうそろそろ動かしてもよいでしょう」という多田氏の意見からはじまったという。初期は整理費用もなく、なかなか作業が進まなかったが、立教大学による外邦図の買い上げにより資金ができ、整理が進行することとなった。浅井先生は学生アルバイトを指揮して一枚一枚の図を国別、縮尺別、図番号順にあつめ、図がもつともそろったAセットからTセットまで計20組をつくることになった（浅井，1999）。1967年に浅井先生はお茶の水女子大学に転勤し、上記のように整理された外邦図のもつとも充実したAセットをその所蔵とした。すでに久武（2005）が示しているように、浅井先生の整理・分類された外邦図のセットは、東京大学地理学教室、京都大学地理学教室、同東南アジア研究センター、立教大学、広島大学、筑波大学などに配分されているが、その量（約1万7千種類）からしてもお茶大の所蔵資料の重要性は明らかである。

つぎに外邦図の利用をみてみよう。浅井先生が関東の出身でありながら京都大学地理学教室に学び、また今西錦司などフィールド科学で活躍した研究者に接したことは、外邦図の利用を西日本の研究者にも拡大した。浅井先生は、内モン草原調査隊（木原均隊長、1938年8～10月）に参加するほか、建国大学着任後もミクロネシアのポナペ島調査（今西錦司隊長、1941年7～9月）に参加している。この隊員の一人であった梅棹忠夫氏は、ポナペ島への航海中のこととして、つぎのように書いている。

……時間がくると、（隊員たちの）当番は中甲板へおりて気象観測に従事した。観測は、地理学者としてこのような遠征隊の経験をつんでいる浅井辰郎さんの指導のもとにおこなわれた。種目は、海洋気象観測の型どおりに、気温、アスマン通風寒暖計による湿度、風向、風力、雲形、雲量、うねり、水色、海水温度、気圧、ポリメーターによる湿度などのほかに、自記温度計が一基うごいていた（梅棹，1990，p. 122）。

この調査の学生隊員には、梅棹氏のほか、中尾佐助氏、川喜田二郎氏、吉良竜夫氏などがいた。こうした人々とのネットワークを通じて、外邦図の利用がひろがることとなった（浅井，2007）。

この時期の浅井先生に関連してもうひとつ重要なのは、先生が小牧実繁京大教授の組織した通称「吉田の会」（総合地理研究会）の初期の活動に参加したことである。小牧教授らは当時、陸軍の高級将校、高嶋辰彦を通じて財界からの資金をうけ、地政学方面の研究と報告書の作成をすすめていた（久武ほか，2007）。このメンバーには、やはり京大地理学教室の卒業生である米倉二郎氏や別枝篤彦氏のような、のちに外邦図の利用者になる研究者がいた。

ところで、この時期の京都のフィールド科学研究者のあいだでは、今西グループと小牧グループが対立していたとする見方が表明されている（山野，1999；水内，2001）。とくに梅棹氏の小牧氏に対する批判（「探検と地政学」、1943年）をヒントに展開されたこの見方について、浅井先生にお尋ねしたところ、そのような対立は感じられなかったことを強調された。筆者は、やはり京大地理学教室の卒業生である川喜田二郎氏からも、こうした対立はなかったことを聞いており、この見方が強調する対立の構図は、浅井先生が述べられているように（小林茂・久武哲也・山野正彦・水内俊雄あて書簡、2002年4月5日）、後世の見方を過去に投影したものと考えられる。

浅井先生の外邦図に関する遺稿（浅井，2007）には、上記の研究者をふくめ、多彩な外邦図の利用者が示されている。浅井先生はこうした人々への閲覧・複写サービスを通じて、第二次大戦後に再開された、アジア太平洋地域における日本の学術調査や地域研究に貢献されることとなった。アジア太平洋地域には、現在もなお地形図など大縮尺図の入手が困難な地域もあり、手数のかかる外邦図の分類・整理作業の成果をふまえたこのサービスの意義は大きかったと考えられる。

また、お茶大の外邦図は、『朝鮮半島五万分の一地図集成』（1981年、学生社）や『台湾五万分の一地図集成』（1982年、学生社）、『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』（1999年、柏書房）といったリプリントのものになるだけでなく、『中国本土地図目録』（布目・

松田，1987）の作製にも利用された。後者に際し、マイクロ撮影された外邦図のプリントは、大阪大学東洋史学教室が利用しており、筆者（小林）もお世話になった。いずれも浅井先生がお茶大を退職したあとのものとなるが、先生が指揮された分類・整理作業がなければ、実現しなかったであろう。

ところで、筆者（小林）が外邦図研究の必要性を痛感したのは、お茶大コレクションに含まれている地図を中心に企画された上記『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』刊行の際に、浅井先生よりその由来をご教示いただいたことによる。先生は筆者のあまりに無知な質問に対して、的確に外邦図の性格とお茶大への収蔵の経過を教えて下さった。私たちの外邦図に関する作業は、浅井先生のお仕事の継承であることを、現在もつよく感じている。また筆者ら（久武・小林）がお宅にうかがい、戦前戦後のお話をうかがった時（2002年3月30日）には、芳江夫人とともに暖かく迎えて下さったことも忘れられない。あらためて浅井先生に感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたい。

なお、本稿のファースト・オーサーである久武は、胃ガンとの闘病1年半ののち、2007年7月27日自宅にて逝去した。享年60歳であった。本稿のもとになった、2007年2月17日の発表用パワーポイントについては、事前に原稿を病室に持参して相談したことを付記しておきたい。また本稿は、『季刊地理学』59（1），pp. 57（2007）に掲載されたこの発表の要旨に大幅に加筆したものである。



写真2 浅井先生と芳江夫人

文献

- 浅井辰郎編 (1981)『浅井のサガ：治平・やえの年忌に想う』浅井辰郎・浅井芳江.
- 浅井辰郎 (1999)「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」清水靖夫・浅井辰郎・小林茂・安里進『大正・昭和 琉球諸島地形図集成 解題』柏書房, 23-26.
- 浅井辰郎 (2007)「資源科学研究所の地図の行方：多田文男先生の英断」宮澤仁・高槻幸枝・大浦瑞代・内田忠賢編『御茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』御茶の水女子大学文教育学部地理学教室, 5-9.
- 梅棹忠夫 (1990)『梅棹忠夫著作集、第1巻、探検の時代』中央公論社.
- 大槻 涼 (2005)「駒澤大学所蔵外邦図の整理状況について」『外邦図研究ニューズレター』3, 121-124.
- 金窪敏知 (2004)「終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、および陸地測量部から地理調査所への改組について」『外邦図研究ニューズレター』2, 39-45.
- 佐藤 久 (2005)「地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後」『外邦図研究ニューズレター』3, 61-71.
- 多田文男 (1981)「オヤジ」浅井辰郎編 (1981)『浅井のサガ：治平・やえの年忌に想う』浅井辰郎・浅井良江, 38-40.
- 中野尊正 (2004)「外邦図と私とのかかわり」『外邦図研究ニューズレター』2, 50-53.
- 布目潮颯・松田孝一 (1987)『中国本土地図目録』東方書店.
- 久武哲也 (2005)「『兵要地理調査研究会』について」渡辺正氏所蔵資料編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 5-19.
- 久武哲也 (2005)「日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係」『地図情報』25 (3), 7-11.
- 久武哲也・鳴海邦匡・石橋諭・小林茂 (2007)「総合地理研究会と皇戦会：初期地政学グループの活動」『2007年人文地理学会発表要旨』58-59.
- 水内俊雄 (2001)「通称『吉田の会』による地政学関連史料解題」『空間・社会・地理思想』6, 59-63.
- 三井嘉都夫 (2004)「私と外邦図」『外邦図研究ニューズレター』2, 46-49.
- 山野正彦 (1999)「探検と地政学：大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向」『人文研究』(大阪市立大学文学部) 59 (第9分冊), 1-32.
- 山本地榮編 (1943)『山西学術探検記』朝日新聞社.

浅井辰郎先生の地図配布のお手伝い

松田孝一（大阪国際大）

筆者が 1988 年まで助手として勤務した大阪大学文学部東洋史研究室では、中国の歴史地図作成のための基本地図として、参謀本部の残した中国本土地図に大きな関心が向けられ、収集活動が行われていた。それらの収集を始められたのは、1970 年代のことで、布目潮瀧教授（当時：教養部）、斯波義信助教授（当時：文学部、現名誉教授）、本田治助手（現立命館大学教授）が中心となられた。まず、東大総合研究資料館所蔵資料をマイクロフィルムに撮影させていただき、その資料の目録を作成し、1976 年に大阪大学アジア史研究会から刊行した（布目潮瀧・本田治 1976）。そのマイクロフィルムやプリントは現在も大阪大学大学院文学研究科の東洋史研究室に所蔵され、研究の用に供されている。筆者の記憶が正しければ、このフィルムは関西大学と仏教大学の要請で、東大総合研究資料館の御許可を受けてそれぞれ複製が作られている。

その後、筆者は、研究室助手として、布目潮瀧教授の命を受け、新目録（布目潮瀧・松田孝一 1987）作成のお手伝いをした。新目録は、前目録に既刊の国会図書館・東洋文庫所蔵資料目録（西村庚 1967）、国立国会図書館所蔵資料の目録（同図書館 1982）の所載データに、お茶の水女子大学、京都大学人文科学研究所・同文学部地理学研究室・同東南アジア研究センター所蔵資料の調査データを加えたものである。

新目録に入れた資料のデータ調査に関しては、以下のように進められた。まず、お茶の水女子大学所蔵資料については、1978 年から、昭和 53・54 年度科研（代表者：布目潮瀧）により実施された。斯波義信教授がお茶の水女子大学に浅井辰郎先生をお訪ねして、調査とマイクロフィルム撮影の御許可をいただき、その後、本田助手、水野正明氏（当時：大学院、現駿台予備学校漢文科講師）が調査を行ない、東大総合研究資料館未収資料を中心として、全体の 3 分の 2 を撮影させていただいた。そのマイクロフィルムと焼きつけたプリントもやはり、現在も大阪

大学大学院文学研究科東洋史研究室に所蔵されている。

その後、布目潮瀧教授は、京都大学の各部局に所蔵されている関係資料の調査について、折衝され、所蔵地図の目録用データ（図名、測量、製版、発行年など）の収集作業を行った。筆者のお手伝いは、その折衝に随行することから始まった。1982 年の 2 月に地理学研究室、3 月に人文科学研究所、4 月に東南アジア研究センターを訪問して、各部局の多くの先生方や大学院生の協力を得て、作業を進めた。収集したデータと従来目録データを合わせて、整理作成された新目録は、1987 年 3 月に『中国本土地図目録（増補版）』として東方書店より刊行した。



写真1 『中国本土地図目録』表紙
（左が 1987 年刊行の増補版、右が 1976 年刊行）

新目録刊行後の翌月 87 年 4 月 15 日付で浅井辰郎先生から布目先生と筆者にお手紙をいただいた。そこには、それまで浅井先生が、多田文男先生と行った外邦図配布の経緯と、同氏宅に、資料の残部がなおあり、それらを希望者へ配布したいが、御自身には、アイスランド研究のため時間がなく、多田先生のご遺志に沿うために筆者のところで中国の分だけでも預かり、全国、外国の頒布希望者に配布できないかのご要望が認めておられた。

先生のお手紙で筆者は、刊行した目録が、実は多田・浅井両先生の地図配布先の一部の所蔵リスト

だということを知ることになった。そして筆者らの目録の対象とはならなかった収蔵機関がまだ他にもあったのだということも知った。

先生のお手紙には、それまでの配布先として立教大学東南アジアセンター、広島大学地理学教室、中国研究所、京都大学地理学研究室、ドイツ Bochum 大学、京都大学東南アジア研究センター、筑波大学、京都大学人文科学研究所、大阪大学アジア史研究会（複写が主体）、筑波大学と書かれていた。

筆者は、浅井先生からのご連絡があったのも何かのご縁と考え、先生の委託をお受けすることとし、11月10日に先生宅を訪問してお話を詳しく承った。同月13日に先生から6,040枚の地図が送付された。うち「満州」の地図約1,200枚のうち半数は両端が切除されたものであった。ただちに、それらの目録を作成し、中国本土、中国東北（旧満州）の2区分各12セットに整理し、写真全紙大印画紙用の緑色の函に納めた。同じ図幅で10数枚あるものもあれば、1枚しかないものもあり、セットNo.1が枚数が多く、順次枚数は減り、No.12が最も少なくなる。

No.1, 3, 5, 7の比較的枚数の多いものは、すぐに浅井先生へお返しした。先生のお話しでは、No.1は地図関係の博物館が実現した際にそこへ収蔵されることのであった。2007年2月17日の外邦図研究会で、博物館が実現していないこと、そして緑の紙函に納められた地図は浅井先生のもとに残され、現在は筑波大学研究室で整理中の地図遺品の中にあることを承った。

残りのNo.2, 4, 6, 8, 9, 10, 11, 12は2000年までに大阪大学文学部東洋史、関西大学、仏教大学、奈良大学、大阪国際大学などの機関及び研究者へ配布した。残余を筆者の研究室に保管していたところ、思いがけず、『日本経済新聞』（2004年1月31日）の記事（「日本軍の地図大量に現存」）により小林茂教授が旧参謀本部作成の地図の現存状況を総合的に調査されていることを知り、御連絡を取らせていただき、寄贈さ

せていただくことをお願いして快諾していただいた。同年3月3日に大阪大学文学部地理学研究室にて小林教授にお渡しし、浅井先生から委託されていた6,040枚すべての配布を完了した。

配布を完了した旨、寄贈先リストを付して、すぐに浅井辰郎先生に書面で報告したところ先生から折り返しお電話をいただいた。1987年に先生宅を訪問した折りに、先生がそれまでの寄贈先などをびっしりと細かな字で書かれた分厚いノートをお開きになっていたことを記憶しているが、このたびの電話では、先生が筆者に地図を委託したことについては、すでにご記憶になっておられなかった。ただ、お話しているうちにことの経緯は御理解していただけた。

以上が筆者が関わった外邦図、特に中国本土地図の目録作成と浅井先生の地図配布事業との関わりである。中国本土地図は、近年の中国の開発の進展で姿を変えて行く中国の景観を記録するものとして極めて貴重な歴史資料でもあり、また筆者の研究している13世紀～14世紀の中国の景観すら中国本土地図の上に読み取ることができることも多く、拙論で何度か活用できた。今、それらがデータベースとして知的財産として共有されつつあることに喜びを感じるものであり、多田文男、浅井辰郎両先生がその保存と利用の道を開かれたお心を多とするものである。

文献目録

- 西村庚 1967：同（編）『中国本土地図目録：国立国会図書館及び東洋文庫所蔵資料』極東書店
- 布目潮颯・本田治 1976：同（編）『中国本土地図目録：東京大学総合研究資料館所蔵資料』大阪大学アジア史研究会
- 国立国会図書館 1982：同（編）『国立国会図書館所蔵 地図目録 外国地図の部(1)』
- 布目潮颯・松田孝一 1987：同（編）『中国本土地図目録増補版』東方書店、第2版（1990）

お茶の水女子大学が所蔵する外邦図の特徴

宮澤 仁（お茶の水女子大）・高槻幸枝（お茶の水女子大・院）

本発表では、お茶の水女子大学が所蔵する外邦図の目録（お茶の水女子大学地理学教室、2007）の編集作業からみえてきた、その全貌と特徴について報告する。なお、本目録は、既刊の『東北大学所蔵外邦図目録』（東北大学大学院理学研究科地理学教室、2003）から一部情報を転用したこともあり（両大学が共に所蔵する地図の情報など）、東北大学の目録にほぼ準拠して作成されている。ゆえに、同じく東北大学の目録を参考に作成された『京都大学総合博物館収蔵外邦図目録』（京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室、2005）もあわせると、3大学間で地図一点一点を対象とした所蔵状況の確認が可能となる。

現在、お茶の水女子大学の外邦図コレクションは、文教育学部地理学教室の地図室に収蔵されており、①資源科学研究所より購入した地図、②本学の前身である東京女子高等師範学校時代に収集した地図、③教室関係者から寄贈された地図や来歴不明の地図から構成される。①の地図が全体の95%を占めるが、日本本土の戦前の地形図や戦後発行の地図も含まれている。外邦図の範疇から明らかに外れる地図を除くと、所蔵数は図幅数にして約13,000点である。地形図のみならず、航空図や海図、地質図も存在し、アジア・太平洋地域を中心に東はアラスカから西はヨーロッパまでの広範囲をカバーしている。国内の大学機関におけるコレクションとしては最大規模のものである。

そこで、目録の情報に基づき、東北大学ならびに京都大学総合博物館のコレクションと比較したところ、お茶の水女子大学だけに存在する地図がおよそ3,800点あることが判明した。特に、旧領土（朝鮮半島、台湾）や旧満州、インドネシア・スマトラ島の地形図、ならびに航空図や航空気象図、海図に該当する地図が多くみられる。その中には、『朝鮮半島五万分の一地図集成』（学生社、1981）に未収録の地図も存在し、各種の複製地図集に収録されていない地図の存在を調査する必要がある。

さらに、お茶の水女子大学の外邦図コレクションの特徴として、多数の兵要地誌図類の存在が指摘される。兵要地誌図は、既製の地形図等の上に、軍事行動にかかわる様々な地誌的情報を記載した地図である。お茶の水女子大学には、1943年（昭和18年）以降作製の南方地域の地図を中心に、73点が存在する。特に、ニューギニアとインドネシアを対象とした1943年作製の地図、フィリピンと南洋群島を対象とした1944年作製の地図が多く、当時の戦線の推移と参謀本部における対応との関連が示唆される（資源科学研究所より購入した地図は、もともと終戦時に東京・市ヶ谷の参謀本部より持ち出されたものである）。

また、戦場の部隊が実際の作戦用に作製した要図と思しき地図も存在する。例えばコレクションの中には、東部ニューギニアにおいて、ラバウル駐留の剛部隊（第8方面軍）写真印刷班が作製した地図が存在する。備考には、参謀本部の兵要地誌資料に加えて、現地部隊による空中偵察や実調査、宣教師と土民（原文ママ）の諜報により作製されたと明記されている。波集団（第23軍）司令部が1943年8月に作製した「広東省水路網図」も存在し、50万分の1の地図を14枚つなぎ合わせたものである。作製時期は大陸打通作戦の立案時期に一致するが、渡河にかかわる情報や河口部の状況が詳細に書き込まれている。

最後に外邦図の所蔵機関としての課題を述べておく。まず1点目に、コレクションの特徴および位置づけをより明確にすることが必要である。国内の大学が所蔵する外邦図は主に終戦直後参謀本部より持ち出されたものであることから、他のルートにより残されたコレクションとの比較が重要となる。2点目の課題は、外邦図の保管・管理・公開に関する問題への対応である。ただし、金銭的・人力的な制約が近年ますます強まっている。現実的な対応としては、今回の目録完成により明らかになったお茶の水女子大学だけが所蔵する約3,800点の地図を対象に、重点的な保管対策を講じたり、東北大学が公開して

いる外邦図デジタルアーカイブにデジタル化した地図画像を収録することが考えられる。特にデジタルアーカイブへの収録は、大学間における権利関係の調整も必要だが、外邦図の保護と公開・利用促進を両立させるための有効な手段として期待される。その予備作業のために、お茶の水女子大学地理学教室では大判のスキヤナを今年度購入し、準備を始めている。

文献

- お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 (2007) : お茶の水女子大学所蔵外邦図目録. お茶の水女子大学文教育学部地理学教室.
- 学生社 (1981) : 朝鮮半島五万分の一地図集成. 学生社.
- 京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室 (2005) : 京都大学総合博物館収蔵外邦図目録. 京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室.
- 東北大学大学院理学研究科地理学教室 (2003) : 東北大学所蔵外邦図目録. 東北大学大学院理学研究科地理学教室

白頭山一帯の近世韓国地図仮製版本の地形図に関して

南 榮佑（高麗大）・李 虎相（筑波大・院）

1. はじめに

最近、お茶の水女子大学にある外邦図の目録から白頭山一帯の5万分の1の地形図が10枚発見された。この10枚の地形図は、北朝鮮と中国の国境地域である豆満江という川の南側地域の地図である。これらは朝鮮総督府の臨時土地調査局が製作した地形図の一部であり、一般地形図の性格を持っているものである。

この10枚の地形図は、すでに韓国でもその存在を知られており、民需用の地図を軍需用として提供するために、既存の地形測量によって製作した原図を

仮製本したものである。ゆえにこの地形図は、日本軍の間諜隊が隠密で迅速に測量した迅速目測図である略図よりも後に製作された地形図であると考えられ、三角測量によって作られたものである。また本地形図の測量年度は大正5年と注記されているが、これは軍用秘図である略図が最後に印刷された時期にあたることから、朝鮮略図とは関係がないと思われる。

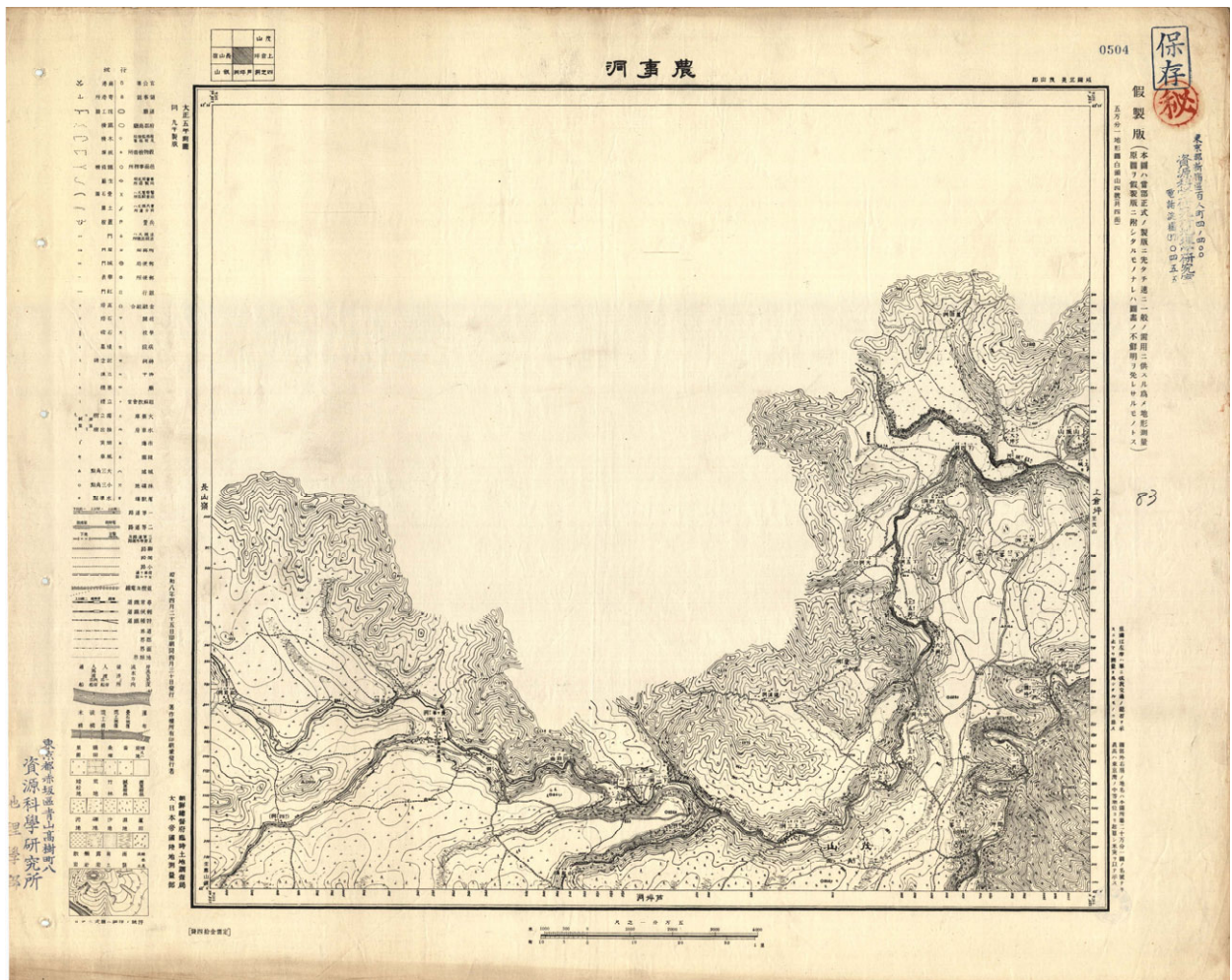


図1 「農事洞」5万分1地形図白頭山4号（仮製版）
（大正5年測図・大正9年製版、お茶の水女子大学地理学教室蔵）

2. 測量および製版年度

この10枚の地図の測量年度は、すべて大正5年と6年である。これは韓日合併（明治43年）が行われた後で、すでに朝鮮総督府が設置されており、したがってこれらの地図の著作権も参謀本部の陸地測量部ではなく、朝鮮総督部にこの地図の著作権があった。さらに、この時期は朝鮮総督部によって韓半島（朝鮮半島）の土地調査事業も行われた。これは参謀本部の陸地測量部が朝鮮略図を隠密で測量した状況と朝鮮総督部が地形図を作った状況とは全く違ったことを意味する。

これらの製版時期は大正8年(1919年)と大正9年(1920年)が大部分であり、「四芝洞 サジドン」と「上倉坪 サンチャンピョン」の地形図は、製版年度が不明である。そのうち、四芝洞の地図の場合は昭和13年(1938年)に修正された測量を適用し、上倉坪は大正9年に製版されたものと推定される。

これらの10枚の地形図のうち、四芝洞の地図を除いた9枚の地形図は、すべて昭和8年(1933年)に発行されている。また昭和15年(1940年)に発行された四芝洞は正式製版であるが、残り9枚はすべて仮製版本として発行された。

3. 地形図の性格

本地形図の性格は、地図の右側上端に押されている青色の「保存」と赤色の「秘」という印章から推測することができる。すなわち、陸地測量部(1921)の『陸地測量沿革誌』によると、日本政府は1910年に地形図を保存用と公開用で区分して臨時に公開した事があり、「秘」はその時に捺印したものと推定される。

それは「農事洞 ノンサドン」の地形図を推定の根拠とする。農事洞の地図の場合、測量年度は等しいが、発行時期は今回発見された昭和8年のもののほかに大正15年に発行されたものも存在する。このうち、大正15年の地形図には「秘」が押されており、昭和8年のものは「秘」と「保存用」がともに押されている。このような事実から「保存用」の印章が押されたのは、両年度の間と考えられる。

そして、この10枚の地図が秘密になることは、この地域の軍事的意味と関係があると思われる。この

地域は、朝鮮独立軍と日本軍間の軍事的衝突が多かった地域である。したがって、最初民需用として地図を製作したが、軍事的に重要な地域の地形図は、「秘」が押されたと推定される。

「保存用」の捺印を行ったことは、当時の東京・新宿区にあった資源科学研究所の地理学研究室、あるいは赤坂区にあった資源科学研究所の地理学部という二つの機関のうちのいずれかであると考えられる。そして、大正15年に発行された農事洞の地形図は、お茶の水女子大学の前身、東京女子高等師範学校の地理学室で保管されていたものである。一方、朝鮮略図の場合は、地形図の右側上端に「軍事機密」または「略図」と捺印されたものおよび何も表示されていないものの三つの種類がある。

また本地形図は、地図の定価が印刷されていることから、販売用であったと推定される。一方、軍用秘図である略図の場合、販売用ではないために定価が策定されていないだけでなく、地形図の下端に縮尺がメートル・朝鮮里・日本里の三つの種類が併記されている。

5万分の1の縮尺の韓国地形図は、明治期・大正期・昭和期の3次にわたって発行されたが、今回発見された10枚の地形図は、そのうち第3次の地形図だといえる。これまでに明らかにされているように、第1次の地形図である朝鮮略図は、明治27年(1894年)から明治39年(1906年)の間に測量され、第2次の地形図は大正3年(1914年)に測量を開始し、大正7年(1918年)に発行が完了された。なお、第3次の地形図は昭和の初期に何回かにわたって修正作業が行われており、図葉別の発行年度を把握することはできなかった。

軍用秘図である朝鮮略図は、日本軍の間諜隊が隠密で迅速に測量したものであるため、正確さでは劣っているが、第3次の地形図は朝鮮総督部によって何回も修正作業を行われたものなので、その正確さは高いといえる。しかし、1980年代まで、韓国では、日本帝国が1917年を前後として製作した5万の1の地形図を韓国の最初の近代的な地図とされてきた。この地図が実は第3次の地形図であり、すでに韓国でもその地図については知られてきた（南榮佑，1996）。

4. むすび

お茶の水女子大学の外邦図の目録から発見された10枚の白頭山一帯の地形図は、迅速目測図である略図が製作された以後の地図であり、朝鮮略図とは関係がないと考えられる。これは地図の測度年度、地図の右側上端に押されている「保存」と「秘」という印章、地図の定価が印刷されていることなどの事実から判断することができる。

つまり、今回のお茶の水女子大学の外邦図の目録

から発見された10枚の地形図は、韓日合併以後に発行された第3次の地形図の計722枚中の一部だといえる。

文献

景仁文化社編(1990) 近世韓国五萬分之一地形圖. 景仁文化社.

南榮佑(1996) 舊韓末 韓半島 地形図. 外邦図研究ニューズレター、4、89-108.

南榮佑(1997) 舊韓末韓半島地形圖. 成地文化社.

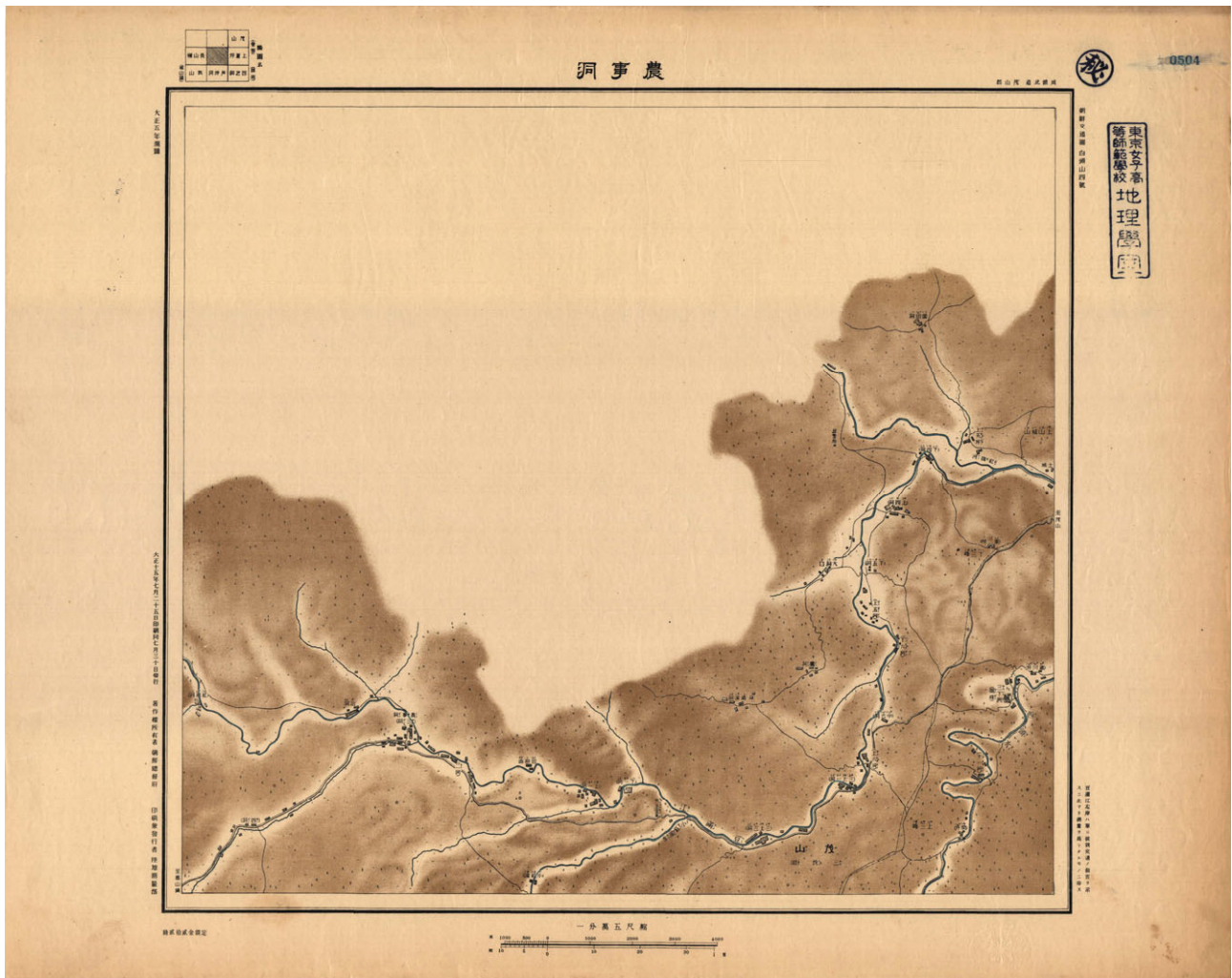


図2 「農事洞」朝鮮交通図白頭山4号

(5万分1、大正5年測図・大正15年印刷・発行、お茶の水女子大学地理学教室蔵)

お茶の水女子大学所蔵の台湾五万分の一旧地形図について

郭 俊麟（台湾中央研究院人文社会科学センター）

1. はじめに

お茶の水女子大学所蔵外邦図目録が刊行され、その中に台湾五万分の一地形図合計 108 枚が判明した。このコレクションは、要塞近傍図を全て収録しており、中央山脈の一部を除くほぼ台湾全島をカバーする貴重な地形図セットである。本稿では、まず、日本統治時代の台湾地形図の測量史における各時期の五万分の一地形図の性格を説明する。次に、お茶の水女子大所蔵の昭和期発行の台湾五万分の一地形図の意義とその位置付けをしたうえで、学生社復刻出版の『台湾五万分の一地図集成』の利用に関する注意点について述べる。最後に、お茶の水女子大目録に未収録の地形図に関して、台湾中央研究院の調査結果とその地形図の入手経緯を紹介する。

2. 殖民地時代の台湾の五万分の一地形図

殖民地時代における台湾地形図の性格は、日本の国勢の拡張や戦争の事態変化とともに、「殖民地征服」、「土地調査」、「内地延長」、「太平洋戦争」の四つの時期に分けられる。

「殖民地征服」時期に作製された台湾五万分の一地形図（迅速図）は、近代台湾における最初の五万分の一地形図であり、19 世紀後半清末の地表景観を記録した史料である。明治から大正にかけての「土地調査」時期には、台湾の中央山脈の山岳地帯と東海岸を対象にした「五万分の一蕃地地形図」が、台湾総督府警察本署・番務本署により作製された。この地形図セットは、当時の原住民集落を初めて地図化した。一部調査困難の山岳地帯には空白にしたものもあった。台湾が内地とされた「内地延長」時期には、日本全国の基本地形図の一環として台湾全島における「五万分の一地形図」が出版された。これは、殖民地時代において最も普及した地形図といわれる。1941（昭和 16）年以降の台湾は、太平洋戦争に巻き込まれ、軍事目的で、「台湾五万分の一編纂地形図」が終戦直前の 1944（昭和 19）年に製版されていた。一方、アメリカ陸軍製図局も同時に五色印

刷の台湾地形図を作製した。お茶の水女子大学所蔵の台湾五万分の一地形図は「内地延長」時期に発行された地形図であり、昭和期の日本国内で発行する内邦図と同じ性格を持っている。

3. お茶の水女子大所蔵の台湾五万分の一地形図の意義と位置付け

昭和年間に続々発行された台湾二万五千分の一地形図と台湾五万分の一地形図は、参謀本部・陸地測量部により、日本本土と同じ調査・測量手法で作製された近代的な地形図である。これらは、殖民後半期における台湾の近代化に関する地表景観を反映した貴重な史料であり、台湾地形図発展史においても欠かせないものである。台湾二万五千分の一地形図は、台湾の三分の一の面積を占める西海岸を中心に整備されたが、中央山脈の山岳地帯と東台湾は収録されていない。一方、五万分の一地形図は、ほぼ台湾全島について地上写真測量を併用した画期的な地形図セットと考えられる。

昭和以降に発行された台湾五万分の一地形図は、大正期の蕃地地形図と同じ縮尺で作製されたものだが、より精密な測量で殖民後半期の地表景観を記録した。特に、日本の政治力が浸透した台湾東部と中央山脈では、少数民族の集落や開墾のため日本からの移住者による移民村も読み取れる。

1982 年学生社の復刻出版による『台湾五万分の一地図集成』は、研究者の大きな関心を集めている。これは、1902（明治 35）年から 1939（昭和 14）年にわたって発行された、主に蕃地地形図と昭和期五万分の一地形図を組み合わせた地図集である。旧地形図収集の意義は大きい。上記のとおり本来異なる地形図セットを用いたものであり、その違いを踏まえた慎重な利用が求められる。

4. お茶の水女子大未収録の地形図に関して

お茶の水女子大所蔵の 108 枚の台湾五万分の一地形図は、ほぼ台湾全島を被っているが、澎湖列島と

一部山岳地帯の図幅は未収録である。筆者は 2002 年台湾中央研究院の委託で日本の防衛研究所史料閲覧室の台湾旧地形図を調査したが、防衛研究所の台湾五万分の一地形図の目録は、お茶の水女子大の所蔵とほぼ一致し、同じ未収録の図幅があった。これら未収録地形図は、台湾国内の大学や研究機関においても見つからず、「内地延長時期」に正式製版されていなかったか、あるいは 1937 (昭和 12) 年日中戦争開戦による測量作業の遅れによると推測できる。

一方、台湾中央研究院の調査によると、1944 (昭和 19) 年発行の「台湾五万分の一編纂地形図」は、上記の未収録図幅を含む台湾全域について、アメリカ国会図書館地図部に保管されている。この地形図セットは、太平洋戦争の準備のために編纂されたものであるが、継続していた台湾の五万分の一地形図の測量事業の一部と考えられる。たとえば、「出雲山」は、お茶の水女子大目録にない中央山岳地帯の図幅であり、昭和 19 年 (1944) 製版の五万分の一地形図である。この地形図は、未完成のように見えるが、地上写真測量を用いて蕃地地形図を修正したもので

ある。また、地図の下端に「Library of Congress Jul 28 1949」の印が認められる。日本敗戦後に連合軍またはアメリカ軍の接收を経て、アメリカ国会図書館に所蔵されるに至ったと考えられる。

5. 終わりに

本稿は、殖民地時代の台湾五万分の一地形図セットに関する比較をふまえて、お茶の水女子大目録にある昭和期台湾五万分の一地形図を中心に検討した。終戦直前に発行した台湾五万分の一編纂地形図と同年アメリカが作製した五万分の一地形図に関する議論は、今後の課題として残っている。お茶の水女子大外邦図目録完成によって、デジタルアーカイブの公開、『台湾五万分の一地図集成』の修正や本格的な出版が期待される。

謝辞 本稿の作成にあたり、台湾中央研究院計算機センターの廖法銘先生、歴史語言研究所研究員 (人文社会科学センター・GIS センター長) の范毅軍先生からご助言をいただきました。心より感謝します。

航空気象図について

田宮兵衛（お茶の水女子大）

1. はじめに

お茶の水女子大学の所謂「外邦図」コレクションに含まれていた「航空気象図」の概要を説明するとともに、本図に基づくなお必要な調査について整理する。

航空気象図は中央气象台によって作成され、B2サイズの用紙に25°S~60°N、70°E~150°Wの範囲が印刷されている。月別の、①地上風、②~⑧500m~6,000m上層風、⑨視界、⑩天気、⑪雷雨・雪の11種の図幅から構成されている。ただし、本コレクションでは、4月、8月、9月、12月の全種、1月の「雷雨・雪」図が欠落している。

全図幅がそろえば131枚あったと推定され、1月は昭和18(1943)年8月、以下順次毎月製版されているので、12月が製版されたのは、昭和19(1944)年7月と推定される。

2. 掲載内容の概略

①「地上風」には、気圧(2 mm Hg 毎)・風(主要地点風配図)・顕著低気圧経路、②~⑧「上層風」には、500m・1,000m・2,000m・3,000m・4,000m・5,000m・6,000m各高度面における等圧線(2 mm Hg 毎)・流線・推算気温の等値線(2.5°C間隔)が示されている。⑨「視界」には、霧日数・黄沙(風塵)日数・視程4 軒以下の日数・文献による特定地点の霧の特性等、⑩「天気」には、降水日数・雲量・文献による特定地点の天気の特性等、⑪「雷雨・雪」には、雷雨日数・降雪日数・地上等温線が示されている。

ここで、航空気象図の主要情報となるべき各高度面の気圧は、気温減率に0.5°/100mを仮定し海面気圧及び気温よりラプラスの公式(測高公式)により算出している。したがって、高層観測値のない空域においては、情報量は全高度同一になる。

3. 裏面について

裏面は、左右2段組で、解説、主要50地点の略気候表、主要20地点の上層風配図(地上~6,000米)及び大東亜の気候、主要航空路の気象概況(飛行例付)、航空気象に関する解説(着氷、雲、雪、天気、高層気象観測機械、飛行機雲、上層天気図、空中電気、

高層気象線図、地球磁気)等が掲載されている。

4. 航空気象図に関し今後調査すべきこと

①気象学史的価値:終戦直前羽田及び横浜(磯子)航空気象測候所長であった山田(2006)によれば、現場で本図を見た記憶は無いとのことであった。また、前記「大東亜の気候」の執筆は、福井英一郎・関口武という戦後日本地理学界の気候学者が担当し、各種解説の執筆者は地球物理学界の気象学者である。両者の住み分けは如何になされたのであろうか。

②軍事史的価値:昭和18年8月登戸研究所に「ふ号」作戦命令が出され、気象部門の中心は荒川秀俊技師(朝倉2007、吉野2000)であった。吉野(2000)によれば、風船爆弾飛行高度の太平洋中緯度高層気流図は、昭和19年2月に完成とあるが、本図との関係は今のところ不明である。

③月平均気温減率を0.5°/100mに仮定することの妥当性の確認に必要な気候学的調査は、少なくとも近年は行われていない。この調査は地球温暖化問題との関係でも必要と考えられる。

文献等

朝倉正(2007):personal communication.

山田直勝(2006):personal communication

吉野興一(2000):風船爆弾 純国産兵器「ふ号」の記録. 朝日新聞社.

コメント 航空気象図について

谷治正孝(帝京大)

コメントを求められたので、気象庁図書館で確認したところ、同館にも本図は保管されていた。ただし、同館では8月、9月、12月が欠けていた。また、本図の前身に相当する日本本土付近を対象とした航空気象図も存在する。

Meteorological Monograph. vol. 1. No. 1. 掲載のJacobsによる“WARTIME DEVELOPMENT in Applied Climatology”に風船爆弾へのアメリカ気象学界の対応が報告されている。アメリカが入手していた高層データの量は、流跡線解析が可能なレベルに達していた。

外邦図デジタルアーカイブの公開と課題

村山良之（東北大）・照内弘通（東北大情報部）・
山本健太（東北大・院）・宮澤 仁（お茶の水女子大）

発表者らは、2004年度までに、外邦図目録の修正作業、外邦図のスキャニング実験に基づく画像データ精度等の検討（宮澤他，2004）および業者による試験的画像取得（250枚）によって、デジタルアーカイブの実現可能性を確信し、2005年度、外邦図研究会デジタルアーカイブ作成委員会による本格的アーカイブ作成作業を開始した。

画像データは、360dpi、フルカラー、フラットベッドスキャナによって取得し、無圧縮 TIFF 画像を保存用として蓄積した。それをもとに JPEG 画像を以下の3種類作成した。すなわち、①ピクセル数を落とさずにデータ量を軽くした画像閲覧用、②縦または横の長い方を2,000ピクセルに縮小したネット公開用、③同じく480ピクセルにして書誌情報とともに示すサムネイル用、である（村山他，2005）。画像データの保管については、上記4種類全てを4セットすなわち4台のHDDに蓄積し、これを東北大（2箇所）の他、お茶の水女子大、京都大にも保管していただき、リスク分散を図っている。

上記のうち、後二者の画像データと目録の書誌情報を組み合わせ、これに検索システムを独自に構築して、2005年12月インターネット公開を開始した。そして、2005年度に取得した5,189枚の画像も加えて、本格的公開を開始した。

本アーカイブでは、インデクスマップ検索、キーワード検索、地域別データリスト検索という複数の検索の入り口を用意し、ここから書誌情報と地図画像サムネイルを同時に表示する画面、さらに地図画像に至る。このうち、中心となるのがインデクスマップ検索である。インデクスマップは、当初岐阜県図書館から許可を得てこれを用いていたが、目録の経緯度データ（一部岐阜県図書館のもの）を利用して新たにインデクスマップを作成した。WEBGISによる検索システム構築がいまや一般的とも考えられるが、システムが重くなること（または専用の高性能サーバが必要になること）、ユーザのPCやブラウザ依存を完全には避けられないことから、あえてクリックルなインデクスマップ画像を用いることとした。この静的インデクスマップと、LAMP（Linux、Apache、MySQL、PHP）による動的情報検索手法の組合せが、本検索システムの特徴である。結果として、ネット上からもひじょうに軽い検索が可能になった。

最後に、本アーカイブに残された課題を整理しておきたい。①未入力画像がまだ膨大にあり、東北大だけで約4,000枚、この他に現段階で確認できるだけで京大とお茶大で約7,300枚ある。②本アーカイブでは、中国本土、朝鮮半島、ビルマの地図画像を非公開として設定してある。中国本土の外邦図がもともと多いこともあり、現在取得済みの約5,400枚のうち、東南アジア等の約1,500枚のみの公開となっている。これについては検討を継続していきたい。③目録のとくに経緯度データ整備が必要である。上記のとおりインデクスマップ作成のためにはこれが必須であり、未入力（非掲載）図幅についての作業が求められる。④上記の検索システムとしたため、とくにインデクスマップに関わる更新作業が煩雑になることが避けられない。全体の検索システムを含めて、維持、更新作業が簡便になるよう工夫しているところである。⑤本アーカイブでは、他機関の協力を得てその所蔵状況を示している。岐阜県図書館



外邦図デジタルアーカイブ トップページ
(<http://dbs.library.tohoku.ac.jp/gaihozu/>)

とお茶の水女子大の情報はほぼ完全で、国会図書館とも協議中である。ユーザの便と外邦図の全容把握のため、マッチング作業にもとづくこの情報の整備も継続しなければならない。

文献

- 宮澤仁・村山良之・上田元 (2004) : 「外邦図」のデジタル画像化とアーカイブ構築に向けてー東北大学における試行作業からー. 季刊地理学、56、163-168.
- 村山良之・宮澤仁・渡辺信孝 (2005) : 外邦図目録の作成からデジタルアーカイブ構築まで. 地図情報、25(3)、12-15.

コメント 外邦図デジタルアーカイブの公開と課題

鈴木純子 (元国立国会図書館)

外邦図の所在確認、目録作成を出発点とした外邦図研究会の活動の到達点として貴重な成果と考える。索引図による地図の検索から書誌データ、地図画像へという目的達成への流れが非常に軽快で、利用しやすい。

地図の検索、特に地形図のようなシリーズの切図中から必要とする地図を見出すためには、索引図によって収録範囲を確認できることの意義が決定的に大きい。筆者の僅かな体験から推して、システム開発の費用負担が気にかかったが、自己開発のシステムだということであり、担当者の力量と努力に負うものであることが明らかにされた。維持・発展のた

めの後進、関係機関への技術移転は可能であろうか。広く検討される必要がある。

検索画面については、地域概念図、詳細な索引図、目録情報が1画面上で見られることは、やや込み入った印象ながら使いやすい。ただ、欲をいえば詳細な索引図には地域の特定を可能にするための背景情報(水系など)がもう少し加わるとありがたい。同一地域が縮尺の異なる別シリーズでカバーされるようなケースはどのように処理されているのだろうか(この部分は当日質問できなかった)。

複数のサーバの分散配置などデータの保存についての配慮も十分と見受けられる。しかし、目前の運用だけに特定される一般のシステムと異なり、蓄積された資料の利用という永続を目指すデジタルアーカイブのシステムであるだけに、索引図への追加情報の書き込み、将来的なハード、ソフトの進化に対応するデータの更新、維持の体制確保が大きな課題である。追加情報という点では、このシステムに組み込まれている、他の外邦図所蔵諸機関の情報も総合的に表示できる枠組みは心強く、将来が楽しみである。

こうしたシステムが実現できたのも、目録情報の整備というこれまでの地道な作業の蓄積があつてこそのものである。研究会にとっても、ここまで築いてきた外邦図の保存・利用環境の維持・発展の継承は課題である。

なお、当日コメントでは追加情報として、国立国会図書館地図室の小林雪美、高野佳代両氏から、国立国会図書館OPACに最近収載された、同館所蔵外邦図の書誌データについての紹介も行われた。

3. 第9回外邦図研究会

日 時：2007年10月27日（土）～28日（日）

会 場：大阪大学

第9回外邦図研究会は、2日間にわたって大阪大学・中庭会議室で開催された。31名の参加者があり、計6件の報告・コメントと参加者による総合討論がおこなわれた。それらのうち、以下には岡本次郎・北海道教育大学名誉教授の講演要旨と魏 徳文氏（南天書局、台北）のプレゼンテーション資料、高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の目録を掲載する。

外邦図の東北大学への搬入経緯をめぐって

岡本次郎（北海道教育大学名誉教授）

終戦直後に参謀本部などから受領して保存された外邦図の主要なルートは、一つは東北帝国大学理学部地理学教室に送られたものであり、他の一つは資源科学研究所に送られたものであった（久武 2003）。終戦の年に東北帝国大学理学部に地理学講座が創設され、私はその最初の学生の一人であって、教授の田中館秀三先生のご指示で東北大学への搬出に関わったので、その経緯について私の知ることを記し、若干の判断を述べたい。

関係者の記録

東北帝大への搬入の経過については、筆者も以前記述したことがあり（岡本 1995）、地図受領業務を指揮した土井喜久一さんが記した当時の回想もある（土井 1975）。私の記述は『東北大学理学部地理学教室創立五十周年記念誌』に寄稿したもので、入学後に経験した多彩な一年間を述べた一文で、参謀本部からの地図搬出は、その中の一つのエピソードに過ぎず、また専ら記憶によって書いたもので、事実関係を充分検証したわけではない。いつのことであったかの記述も明確ではなく、地図の運び出しを承認してくれた参謀の名も記していない。また、土井さんの『田中館秀三業績と追憶一』に記された回想には、明らかな誤りも含まれ、不可解と思われることも示されている。

先般、小林茂先生からご依頼があり、2007年10月27日開催の「第9回外邦図研究会」で、表題の演題でお話しする機会を与えられた。そこで、第一には、限られた条件の中ではあるが、出来るだけ正確な経過を明らかにすることを期し、第二に、このような搬入が出来たことについては、田中館秀三先生のお人柄、渡辺正参謀の見識、土井喜久一さんの行動力という条件があって、はじめて実現できたことと考えていることを示したかった。

東北帝大への搬入の経緯を示すとなれば、その作業の中核を担った土井さんの記述の当否を問題にせざるを得ない。土井さんは、『田中館秀三業績と追

憶一』の中の一文「田中館先生の思い出」で、地図搬出の経緯を次のように記している。

「初めて先生にお会いしたのは終戦後間もない、九月上旬、豪雨の最中の世田谷区成城のお宅であった。（中略）辻村太郎先生の紹介をいただいで初対面であった。東北大学地理学教室の助手としての採用を即決していただき、先生が陸軍参謀本部から貰うように話をつけておられた大量の地図を仙台の教室へ送るよう命ぜられた。」

「それにしても近々米軍がやってくるという追い立てられるような状況で大量の地図を計画的に運び出すのは仲々の仕事であった。多田文男先生と御相談して資源科学研究所と共同とし、研究所からは中野尊正さんほか、東北大側からは第一回学生の岡本次郎、福井英夫、三田亮一などの諸君と（陸軍）気象部の元軍属の女子など合わせて十名足らずで、同一種ごとに十枚を数えて抜き出す作業に、ほとんど休息もなしで約一週間働いた。仙台へ送った地図は鉄道貨車一両に近く、資源研には同じ量をトラック二回で運んだと記憶する。」

このような経過であれば、外邦図搬出のルートは、東北大へのものも、資源研へのものも基本的には同一ということになる。ところが、土井さんの記述は、私の記憶している状況とは、かなり異なっている。資源科学研究所のスタッフと私たち東北大の学生とが共同して作業を行ったということは全くなく、私たちが一緒に作業したのは、元陸軍気象部の軍属で、男子が2名、女子が2～3名であった。土井さんは終戦時陸軍大尉で、陸軍気象部に勤務し、この人たちはすべて土井さんの部下として働いていた人達であった。

この書籍の刊行は、1975年であり、30年前のことを思い起こしての記述であるから、錯誤が生ずるのはむしろ当然で、福井英夫君はこの作業には全く参加しておらず、また、田中館先生が成城に住まわれたのは後のことで、終戦後の半年くらいは、目白におられた。このような誤りは本筋としては、どうで

もよいことだが、東北大ルート of の担い手であった土井さんと、資源研ルート of の担い手であった中野さんが共同で作業をしたのか否かは、外邦図搬出の主要な二つのルート of の性格に関わる問題となる。

中野尊正さんは外邦図 of の搬出について、このニューズレター No. 2 に、かなり詳細に示しており、「(復員後) 帰京したのは 9 月末か 10 月はじめ。翌朝、帰任のあいさつと今後の仕事の指示を仰ぐため、多田先生のお宅に伺った。多田先生は、参謀本部 of の渡辺少佐のところに出向いて、地図 of の運び出しをしてくれと指示された。(一部省略)」と記し、参謀本部、明治大学 (参謀本部兵要地誌班 of の分室が置かれていたらしい) で地図 of の抜き取りをして、各 10 面を大妻学園に搬入した経緯を述べている (中野 2004)。

中野さんは、終戦後久留米で復員したが、枕崎台風¹⁾ などの影響で帰京が遅れたことを記し、帰京の時期については、9 月末か 10 月はじめとしている。これは重要な経験であるから、恐らく間違いのないことであろう。となれば、土井さんが参謀本部で地図受領のための作業を行ったのは 9 月中旬頃であろうから、土井さんの記述にも拘わらず、この時期には、中野さんは東京にはいなかったことになる。

筆者の行動

土井さんらによる作業時期を確認する上からも、ここで、私自身の作業への関わりとその前後の行動を記しておきたい。終戦直後の 8 月 20 日から数日、浅虫の臨海実験所で、そこの常駐責任者小久保清治

助教授ほか of の集中講義があり、学生 4 名が受講し、終了後もなお宿舎に滞在して、夏休みを楽しんでいた。8 月末頃²⁾、田中館先生が来られ、翌日大湊の海軍要港部に行かれて、多量の資材を貰い受けられた。この資材は学生の手で取りあえず実験所へ運び、その中の邦文タイプライターは、理学部の事務室が困っているから仙台に届けるように、また、参謀本部から地図を貰い受けようと思っているので、東京に家のある学生は上京するようにとのご指示があった。

大湊からの資材搬出は実験所の徳井利信助手の協力も得て、4 名の学生が、客車に運び込んで持ち帰ったもので、3 日間を要したと思われる。そのあと、仙台に寄って上京した。先生に伴われて参謀本部を訪れ、三田亮一君、石光亨君とともに陸軍少佐渡邊正参謀にお会いしたのは、これらの経過から推して、早ければ 9 月 7 日、遅ければ 10 日頃であったと思われる。既に多くの軍人軍属が職場を離れ、この部屋も広い事務室に、渡邊参謀とその部下 (中尉) が執務しているだけであった。地図については、先生は「リヤカー十杯ほど」を貰い受けたい旨申し出て、参謀は快諾し、好きなだけ持ち出してよいという意味の言葉があったという印象がある。

私が育ったのは神田三崎町で、父は製本工場を営み、私達は小規模工場としてはごく普通の階下が工場と倉庫、二階が住居という構造の家屋に住んでいた。私が東北帝大に入学して間もない 1945 年 5 月 25 日の空襲で罹災したが、類焼であったため、ある



図 1 硫黄島の空中写真 (一部)

程度の荷物を持ち出すことも出来、父たちは、300メートル余り離れた西神田の店舗付き住宅を借りて住んでいた。リヤカーも無事で、地図搬出にはこのリヤカーを使った。

田中館先生は、神田神保町1丁目、スズラン通り商店街の南裏にあった貸事務所の2階を借りて、「事務所」と称しておられた。ここへ地図を運び込んだのだが、参謀本部からこの事務所までは、約4キロメートル、西神田の仮寓となっていた建物も、両者を結ぶ線からあまり離れていなかった。石光君はその後殆ど参加せず、三田君と二人で作業に当たった。

田中館先生からは、あとで整理して他大学等に分けるため、一図幅10枚ずつを抜き出すように指示されていた。地図の選定には格別なご指示はなかったように思う。実際に収集した地図は、二十万分の一帝国図、一万分の一地形図東京近傍・横浜近傍、五万分の一集成図³⁾など陸地測量部作成の地図と、二百五十万分一ソ連邦地図、ヨーロッパなどの百万分一地図など各種の編輯地図、航空図などと白地図が多く、五万分一の普通の地形図は参謀本部にはなかった⁴⁾。外国の官製地図を復刻編集した大縮尺地図は非常に多くの種類に上るので、とても手に負えず、空中写真測量などで日本軍が作った応急測量による五万分一地図の一部などと共に、見本として少数を持ってきた。先生もこのような大縮尺地図が、アラスカ、ハワイ、東南アジア、印度に及ぶ広大な範囲に亘って作成され在庫していることは、はっきりとは認識されてはいなかったようで、これらをお目にかけて、「人を雇って作業をやらせよう」と言われた。

一日に何回くらい運び出したかは記憶にないが、「学生気分」での仕事の進め方であったから、1日2回くらいであったのだろう。土井さんは、作業を開始する前に、この事務室を訪れており、この時点で専ら私達学生の手による作業は終了した訳で、最終的に「事務所」の一隅に積み上げられた地図の量は印象に残っている。自転車の後ろに付けるリヤカーは大きなものではないから、それこそ10杯以上にはなっていたかと思う。即ち、5~6日くらいの運搬量であろうか。それならば「事務所」への運搬は9月13日から15日くらいの間に終わっていた可能性が

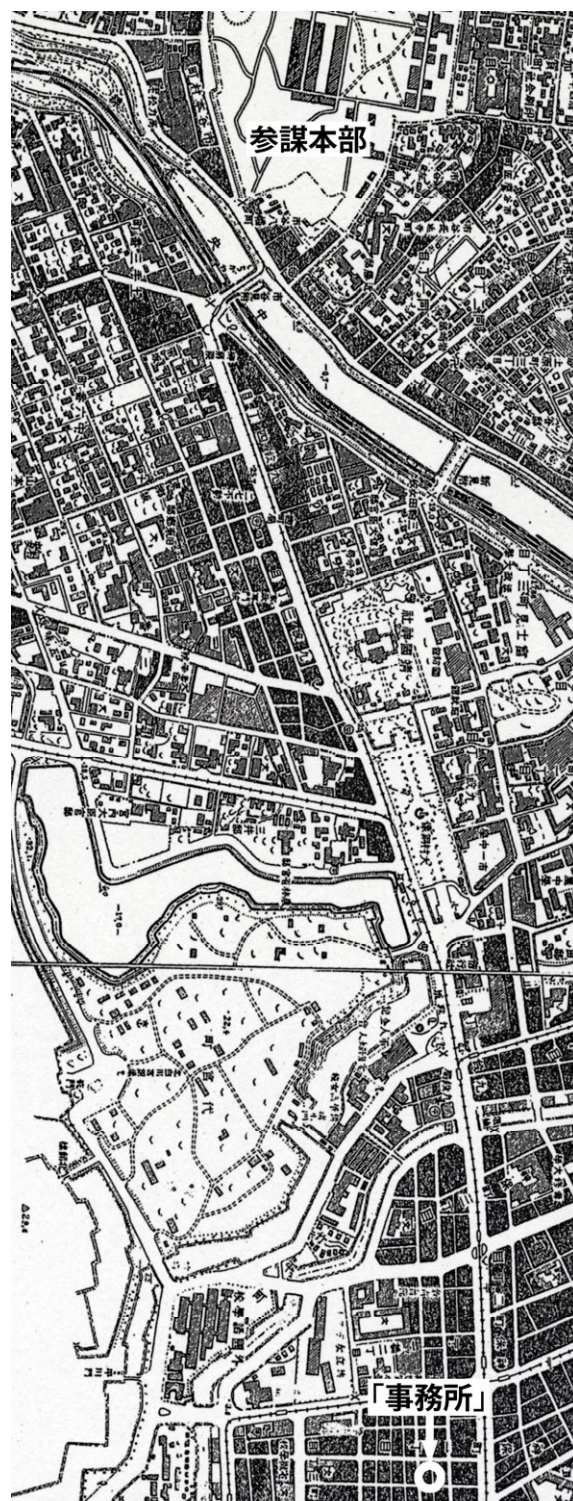


図2 参謀本部から「事務所」への経路

(一万分一地形圖東京近傍十九号「日本橋」[1930年測図・1937年修正測図・1939年発行]の一部、および、一万分一地形圖東京近傍二十七号「四谷」[1909年測図・1939年第4回修正測図・発行年不明]の一部、右側が北である)

大きいと言える⁵⁾。土井さんの指揮による作業は、多分その翌日から始まった筈である。

土井さんの活動

田中館先生からは「リヤカー十杯と言ったのは、あまり欲張るとくれないかも知れないと思ったからで、戦果拡大は君らがやり給え」と伺ったことがあったが、大縮尺外邦図の見本をご覧になった段階で、全面的な収集をお考えになったのだと思っている。恐らく、土井さんへは「リヤカー十杯」の話はなさらずに、全面的な収集を指示されたのだろう。そうでなければ、直ちに4~5名の人を呼び集めて、組織的な作業を始めるというわけにはいかなかった筈である。なお、当時は復員者は巷に溢れ、定職に就ける人は限られていたから、日当を払うとなれば、人集めには苦労はなかった時期であった。

土井さんが作業を始めると、状況は一変した、作業者の分担が定められ、筒状に丸められた地図は不要な地図で梱包され、図幅の区分などが記され、運び出されることなく床に山積みされていった。地図のリストアップは土井さん自身が担当し、男子の要員の一人が代わることもあった。三田君と私は自主的に作業に協力はしたが、定時に出勤するというような携わり方ではなかった。

この作業は、多分一週間を要せずに終わったのではなかっただろうか。そうすると、作業の終了は9月20日から22日あたりということになる。地図の梱包を山積みしたトラック（何台目かは確認してない）が出て行った後、渡邊参謀の部下の中尉が、地図の送付先とリストとを提出するように求めてきた。これは私が書いて提出したが、地図の送り先は東北帝大だけである。

27日には天皇がGHQにマッカーサーを訪問し、その時の写真を掲載した新聞を内務省が発禁処分にしたため、翌朝の新聞が配達されなかったことがあった。私はこの日まだ東京にいたが、10月からは授業が始まるので、ほどなく仙台に発った。

地理専攻学生のための教室と学生控室とは、入学時には臨時教員養成所（数学）の一教室を間仕切りして使っていたが、7月10日の仙台空襲で数学教室が被災したため、私が仙台にはいなかった時だが、

この教室は終戦後間もない時期に数学教室に返され、地理の部屋は地質教室の標本室の一室が当てられていた⁶⁾。9月末か10月はじめのことになるが、私が初めてこの新しい地理の部屋を訪れたとき、既に、物置然とした部屋の一角には、地学標本の運搬箱を整理しておく棚に囲まれて、梱包されたままの地図が高く高く積まれていた。当時教室には、労務を担当する青年が1~2名いたので、この地図についての労役には、学生は携わる必要はなかった。

後日、土井さんから伺ったところでは、地図が到着したとき、発送リストと現物との照合をしたわけではなく、日本の五万分一地形図、二十万分一地勢図など、早期に整理すべきものは取りのけ、その他は分類せずに積み上げた。従って、発送したものが全部届いたかどうかはわからないということであった。

色々検証してみると、土井さんが指揮した外邦図搬出の東北大ルートと中野尊正さんが奮闘した資源研ルートは時期的に重ならないと判断されたが、作業担当者については、土井さんの記述と中野さんの記述とは大きく相違し、納得できない問題として残っていた。

土井さんのメモ

「第9回外邦図研究会」の後2ヶ月ほど経った2007年年末に、私宅の書庫の一部を片付けたところ、偶然一冊のファイルが見つかった。その中に十数枚の外邦図インデックスや、土井さんの手になるメモなどがあった。土井さんのメモは、参謀本部などからの地図搬入の経過、その後の整理状況を記したもので、東北帝國大学の縦書き罫紙を使って横書きしてある。土井さんは「カナモジカイ」の会員で、この文書も漢字交じりのカタカナで記述し、分ち書きがなされている。以下にその全文を掲げる。

地図ニ就テ

1. 参謀本部 ヨリ 受領シタ 地図ハ 現在 第一復員省 復員官 元 陸軍少佐 渡辺 正 氏 (兵要 地誌 班) ヨリ、田中館 教授ガ 受領サレタ モノデアッテ、最初ハ 学生 岡本、三田 両君ガ 作業ヲ ヤリ、後 土井ガ 引ツイデ、旧陸軍氣象部 軍属 4

名ヲ使用シ約半月ノ作業デヌキトリ、荷造、発送ヲ行ツタ。又、同部ヨリトラックヲ2日間無料デ借用シタ。又、コノ作業ハ資源科学研究所中野 尊正、入江 達夫 両氏以下数名モ協同シタ。内地五万 分ノ一ハ参本ニナイノデ第一総軍ヨリ受領シタ。

其ノ後明大分室ニアッタ地図デ補足スルモノヲ探シテ受領シタ。コレハ主トシテ航空図、印度、ビルマ方面5万、内地2万5千デアッタガ、輸送中一部紛失シタ疑ガ大デアル。作業ハ資源研ノ人ニ依頼シ、コチラカラハ旧軍属1名ガ出タ。

2. 図ノ内容ノ詳細目録ハ未完成デ原稿ハ資源研ニ送ッテアルガ、両方デ整理シ、目録ヲ完成シタラ不足ノ地図ヲ相互交換スル約束デアッタ。

記憶ニヨッテ書イタ概要ノ目録ハ別紙ノ通りデアアルガ、此ノ外広範囲ノマトメタ地

図(例200万アジア大陸図)モカナリアリ教育上便利ナモノモアルト思ハレル。又、白地図モ相当アッテ作業ニ利用シ得ルデアラウ。

3. 内地ノ5万ハ相当欠ガアリ、特ニ関東ハ殆ドナイ。之ノ代リニ輯製5万ヲ貰ッタ筈ノモノガ紛失シテ居テ出テコナイ。整理ハ北海道ヲ除キ本州以南ヲ3組作り、1組ハ仮綴シ他ノ2組ノ内1組ノ北東日本ノ分ノミ岩石教室ニ渡シタ。残りハ1-23ノ箱ニアル。
4. 満州ノ10万ハーツニ集メタガ目録ノ図ガナクテソノママ。他ハ大抵目録図ガアルカラ、コレデ整理スル予定デアッタ。

貸出ハ浅虫ノ小久保 助教授ト中央气象台大和田出張所ガ外ニ出テイル分デ、他ハ学生ニ少数(貸出簿)出テイル。代用板式ノ整理ガ便利ノ様デアル。

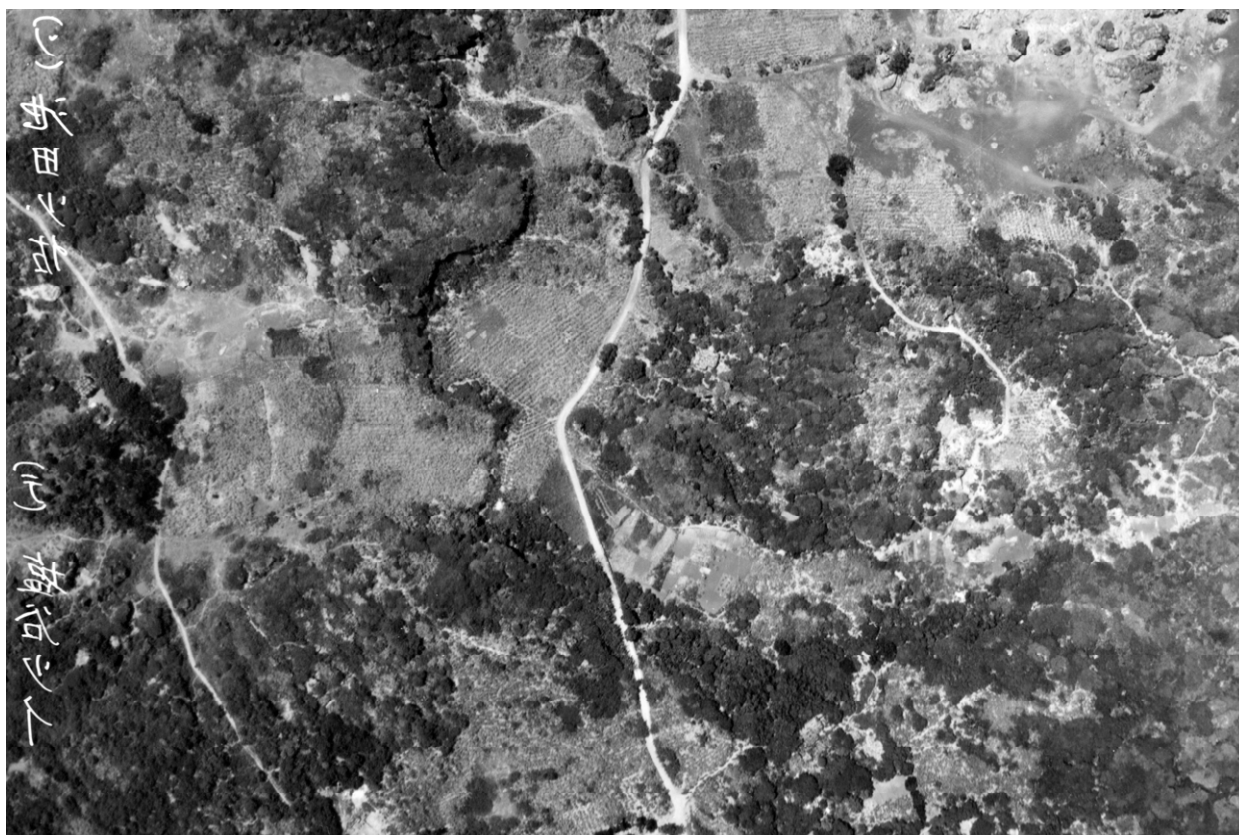


図3 硫黄島の空中写真(一部)

左側は、操縦者(ソ)と偵察者(テ)の氏名。

このメモは、土井さんが退職にあつたって、私に残されたものであろうと思われ、このメモと一緒に出てきた 12 枚のインデックス図は土井さんから受け取ったものか、後述する廃棄物の中から私が拾い出したものかは分からないが、後者の可能性が大きい。なお、土井メモ中にある「概要ノ目録」は見あたらない。

土井さんの退任は 46 年 11 月頃であつたから、地図搬出から 1 年あまりの時期であり、作業の様子などは前出の資料より正しく書かれている。しかし、ここでも資源科学研究所の中野尊正、入江達夫（入江敏夫か？）両氏以下数名も協同した旨が示されている。30 年前のことを記したのならば、ほかの話との混同が生じたということもあろうが、1 年ほど前のことを記したのであれば、全然無関係なこととの混同とは考えにくい。

まず、ここに示されている所では、参謀本部で作業を行ったのは、土井さんのもとで作業をした陸軍気象部の元軍属 4 名であり、資源研職員数名は協同したと表現されていて、必ずしも一緒に仕事をしたということではないようである。

次に、トラックを 2 日間借りたということだが、参謀本部からの積み出しに 2 日間が必要だったとは考えにくい。東北大へ運ばれた地図の量を考えると、トラックに 1 台では積みきれないだろうから、2 度に分けて運んだものと思われるが、2 日にわたって運んだとは考えられない。ここに「二日間」とあるのは、参謀本部からと明大分室からとで 2 日間だったのか、9 月と 10 月とに 1 日ずつで 2 日間だったのではないだろうか。

明大分室での作業には、私たち学生は全く関わっていない。土井さんが受領したのは、「其ノ後」とあるから、参謀本部での作業に引き続いて、明大分室での作業が行われたのではなく、日を改めて行われたものと思われる。事実、参謀本部から仙台に送った地図の受け入れのためにも、任官にあつたの手続きのためにも、また住まいを定めるためにも、土井さんは参謀本部から地図を発送した後、ひとまず仙台に赴かなければならなかったはずであり、その後、東京の住いを引き払うこととなろう。それならば、「其ノ後」というのは、恐らく 9 月末か 10 月に

入ってからのことであろうから、その時期に「多田文男先生と御相談して資源科学研究所と共同とし、研究所からは中野尊正さんほか」の人と協同する機会があつたというのなら、よく理解できる話となる。

土井さんが記されたことには二つの時期の作業に関して混同があり、中野さんの場合は、古い記憶の想起であるから、特に印象に残っていた「孤独な作業」「腕力の発揮」が前面に出て、土井さんその他の人との協力については思い出されなかったのであろうと、私は推測している。即ち、参謀本部からの地図搬出は、東北大ルートは 9 月中旬、あるいは 20 日前後あたりに、資源研ルートは 10 月上旬あたりに、それぞれ別個の作業で行われ、明大分室からは 10 月上旬あたりに、両者の連携を伴って行われたのではあるまいか。

いずれにせよ、東北大、資源研の両者の整理が進めば、不足地図を相互に交換することが約束されているくらいだから、作業の共同は部分的であつたにせよ、作業時点から連絡連携が取られていたことは明瞭であろう。

なお、参謀本部における作業期間は「約半月」と記されているが、そのように長期に亘るものではなかった。既に街には進駐軍将兵が闊歩するようになっている時期に、いつになるのか不明だが、ともかく進駐軍に接収されるまでという時間的な制約を感じながらの慌ただしい作業であつて、後年記されたように、たかだか 1 週間というのが真相であつたに相違ない。土井さんの指揮による参謀本部での作業開始から、前述の推定による明大分室での作業終了までならば、半月以上の期間に亘った筈で、「半月」とされたのは、9 月の参謀本部における作業開始と、10 月上旬の明大での作業終了とのご記憶をもとに記されたものではあるまいか。

東北大へ運ばれた地図のうち、参謀本部測図の五万分一地図などは早期に整理された。その年の演習の時間に、学生各自が地図をそれぞれ手元に置いて、辻村太郎著『日本地形誌』の読み合わせをしたことも思い出される。田中館先生は 1946 年 3 月停年退職され、土井さんは 1946 年秋、愛知県で療養中の奥さんを気遣って退任された。もし土井さんがその後引き続き東北大に勤務されていたならば、恐らく外邦図

の多くも順次整理されていったと思われるが、実際には土井さんのメモにあるような段階で整理は中断し、長期の放置を見たのであった。

廃棄物の中から

以上、粗筋を述べたが、このほかに私が参謀本部内で収集した資料が若干ある。それはある一室が廃棄物の集積場所になっていて、「米軍に見られたくない」と判断したものがあつたら、ここに捨てて置いてくれ、あとで焼却する」と聞いていた。

作業の合間に、捨てられているものを見ると、大変貴重と思われるものがあつた。その一つは硫黄島の空中写真(82枚セット)、それから作ったと思われる一万分一地図、この空中写真撮影時に撮られた硫黄島の空中からの俯瞰写真12枚(昭和19年8月19日撮影)であつて、地図は、今の用紙規格で言えば、ほぼA0版にあたる大きさの用紙に印刷され、「軍事極秘 戦地ニ限り極秘」と示されていた。これらは焼却してしまうのはいかにも勿体ないと思つたが、米軍進駐後間もない時期で、軍機保護法の廃止も聞

いていなかったのもので、了解を得て貰い受けることはできないと思ひ、無断で持ち出した。今にして思えば、ここは宝の山で、貴重な資料となるべきものが沢山あつたのではないかと思うが、無断持ち出しの気重さもあり、一二度短時間探索しただけだつたように思う。

ここから持ち出したものには、上記の硫黄島関係のほか、少なくとも次のものがあつた。

- 「戦用地図配布(総軍ヨリ各軍へ) 状況一覧 昭和十九年三月 南方軍總司令部」の綴り
- 五万分一地形図「横須賀」など要塞地帯の地図(軍事極秘) 若干
- 「大東京鳥瞰写真地図」 これはオフセット印刷 一万分一空中写真地図(日本空中作業合資会 社撮影、博文館発行、発行日不詳、官公庁以外非売品) 48面の綴りである。
- 「南洋委任統治領秘密地図一覧図(昭和十九年製版)」などの索引図若干

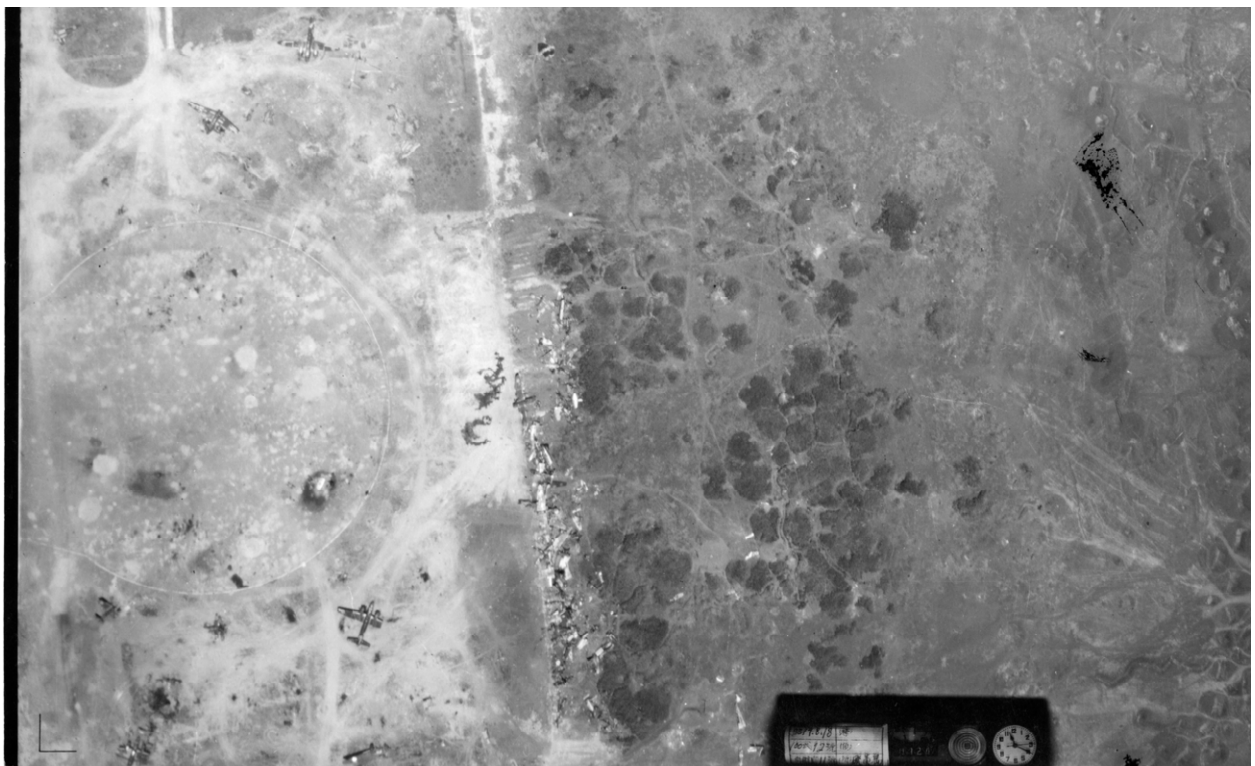


図4 硫黄島の空中写真(一部)
破壊された飛行機がみえる。

外邦図の大量搬出ができた条件

終戦直後の時期に、参謀本部から地図を貰うというようなことは、誰もが発想できるものではなかったことであろう。当時の状況のもとでは、この発想は大変大胆なものであったと思われる。東京周辺在住の地理学者には「兵要地理調査研究会」などを通じて交流があって、参謀本部兵要地誌班の渡邊参謀とは旧知であった方も少なくない筈だが、これらの方々も、直接参謀本部を訪ねて、組織的に多量の地図を貰い受けるようなことはされていない⁷⁾。多田先生も地図搬出の措置を取られたが、先に述べたように、土井さんが多田先生を訪ねたのは、参謀本部や第一総軍からの地図を仙台に送った後と思われ、土井さんの報告を受けて、貴重な地図の受領ができることを知られた上で取られた措置であったと思われる。

田中館先生は大変自由闊達な発想をされる方で、見通しの良さは定評があり、行動力と即決は真骨頂であった⁸⁾。終戦の”玉音放送”を聞いた直後に、祝賀会をやると言い出されたり、その席で、予め予定はされていたものの、いつ開かれるとも決まっていなかった海洋学の集中講義を来週開いて貰うからと、浅虫臨海実験所での受講を指示された。戦争終結という事態に即刻対応された訳である。終戦直後という時期に、高松宮から猪苗代湖畔のご別邸の土地の一部を貰い受けて、そこに臨湖実験所を建てるという構想を抱き、大湊の海軍要港部から建物の解体資材その他を貰い、建築資金は日本発送電からという方針で、早くも活動されていた⁹⁾。

田中館先生は、ひとたび使命感を帯びると、利害得失に拘泥せず、何事を置いても目標に邁進するご性格で、外邦図に関しても、今後の学術調査にかけがえのない資料となることを感じられると、直ちにその保全を志されたものに相違ない。

作業者に対する手当、運搬費、「事務所」の維持費などは、どこからも支出される筈もなく、これらはすべて田中館先生が私費で賄われたものであった¹⁰⁾。ここにも利害得失に拘泥せず、為すべきことは為すという先生の気質の現れがみられる。

他方、渡邊少佐は、終戦時に参謀本部陸地測量部を改組して、内務省所管の地理調査所に改組するこ

とを提言し実現させた人であり、地形図等の焼却に反対した人であり、終戦時に管掌していた多くの資料を、自宅に保全された人であった。占領地や作戦地の貴重な地図を含む大きな地図コレクションを、大学という資料保存に好ましい施設に保全されることは、望むところであったのではなかろうか。参謀本部で外邦図などを所管された人が、渡邊少佐でなかったならば、地図の搬出を、あのように実現することはできなかったのではあるまいか。

そして、土井さんの実行力。この人がいなかったら、東北大への作業を組織的効率的に行うことはできなかった。田中館先生は、辻村太郎先生の紹介で訪ねてきた土井さんを、その場で助手に採用することに決め、直ちに地図の作業を指示された。土井さんは行動的な方で、この時は東京に在住しており、数週間前までの部下であった、きびきびと働く人達を呼び集めて作業を指揮した。この活動があって、初めて最大限の地図収集ができたものである。

資源研ルートについても、多田先生の渡邊参謀とのお付き合いは、「兵要地理研究会」設置準備以来のものであり、資料の重要性を感じ取られると、直ちに手配を尽くされ、中野さんという実行力ある方の行動を通じて、大量の資料搬出ができたものであった。

いま顧みると、外邦図が大量に保全されたのは、常にあり得るとは言えないような幾つかの条件が満たされて、はじめて実現されたことであったと言わざるを得ないのである。

注

- 1) 枕崎台風は、1945年9月17日鹿児島県枕崎付近に上陸、日本を縦走して、希有の被害をもたらした。
- 2) 8月28日に、米軍先遣隊のアイケルバーガー中将与日本側代表の有末中将与の間で、占領軍進駐に関する打ち合わせが、厚木飛行場の天幕内で行われた。通訳を務めたのは田中館先生で、写真入りの新聞を見せて下さった。浅虫に来られる前に、仙台に寄られており、奥さんが寄寓しておられた岩手県金田一村(現・二戸市)にも立ち寄って来られた可能性があるから、先生の浅虫到着は、早ければ8月30日、遅

くとも9月1日であろうと推定される。

- 3) 作戦用地図としては五万分の一図は範囲が狭いので、4面分を合わせた地図が作られ、1キロメートル間隔の方眼が加えてあった。
- 4) 参謀本部には五万分の一図は前記の集成地図が揃っていたが、通常の五万分の一図はなかった。三田君が第一総軍の地図室に行って、北海道から九州に至る5万分の一地図3部づつを貰ってきた。第一総軍の司令部は、参謀本部と同じ敷地にある別棟で、私も行ってみたら、地図室には若い軍属が一人おり、台湾の地図一式貰えないかと言ってみたら、明日までに揃えておくと気さくな返事があった。これらの地図は「事務所」にではなく、西神田の仮寓に運んだ。
- 5) この地図は、結局は東北大へは送られなかった。土井さんの指揮による作業が始まると、組織的な収集が行われたので、これらの地図は不要になり、西神田の仮寓に運び、その一部は現在も私が所蔵している。
- 6) 田中館先生は法文学部の講師をしておられたので、その研究室は法文学部の木造校舎にあったが、7月10日の仙台空襲で焼失した。
- 7) 田中館先生は、「兵要地誌研究会」のメンバーではなかったが、渡邊参謀とは、親密であり、戦争末期に、東北帝大理学部にて地理学講座を設置されるについては、「国防地理学」の研究を柱とすることが標榜されていて、渡邊参謀の後押しがあったことを、先生から伺ったことがある。
- 8) 『田中館秀三—業績と追憶—』には、20名の人による田中館先生の追憶が掲載されているが、変事に処して卓見を示し、ずば抜けた行動力を発揮するお人柄を活写したものに、元シンガポール博物館長E・J・H・コーナーによる『思い出の昭南博物館』がある。この書物のはじめの三分の一ほどは、昭南博物館と改名したシンガポールのラッフルズ博物館で、田中館先生が館長として活躍し、前館長コーナー氏らの協力を得て、文化施設の保護にあたった時期のことが書かれている。

田中館先生ご自身は戦時中に『南方文化施設の接収』なる一書を著しておられるが、それによれば、先生は東北帝大から燐灰石調査のため仏印に出張を

命ぜられ、昭和17年2月はじめ仏印に着き、同月11日南方軍司令部の高官と会談する機会を得、塚田参謀長に、占領地の図書資料の保全に努めるべきこと、特にラッフルズ博物館・図書館及び植物園を戦火から救出する必要を説いた。15日の南方軍囑託の辞令を受け、その日の夕刻シンガポールの英軍は降伏したが、翌16日空路シンガポールへ、17日市役所に豊田司政長官を訪ね、18日ラッフルズ博物館長コーナー氏を伴って博物館を接收、次いで植物園を接收したとある。

この日のことを、コーナーは生涯忘れられない日とし、次のように書いている。「それは一人の男の登場としてはじつに鮮やかであった。・・・任官辞令書も紹介状も持たず、突然シンガポールに姿を現した男が、一瞬のうちに自分で自分の存在を正当化し、占領直後の博物館長と植物園長として位置づけることに成功したのである。」そして、この日に「田中館教授がシンガポールに到着していなかったら、博物館や植物園はどうなっていたであろうか。自らを無報酬の博物館長にひそかに任命し、印を作り、軍の占拠する建物のなかに突入し、軍の貼紙を破り、自ら書いた掲示を貼るといふ無謀きわまりない冒険をしていなかったら、博物館と植物園を日本軍と掠奪の群盗の手から守ることはできなかったであろう。」と。翌年9月、徳川義親侯爵が館長に就任して、間もなく帰国されたが、この間の文化財保護とさまざまな事件処理に挺身し、英国人科学者を保護し、彼らと親交を重ねたことを、コーナーは克明に記している。

- 9) この企画は、皇室財産が国の管理になったため、当初の形では実現はしなかったが、数年後に東北帝大理学部附属「開発地理学研究施設」として結実した。
- 10) 先生は、整理を終わった地図は他大学などに分与し、費用の一部は、いずれは回収できるとお考えだったかと思うが、短時日のうちに整理が完了する見通しがある訳ではない。現実には、全く先生個人のご負担に終わった。

文献

岡本次郎(1995):地理学教室創立の年。『東北大学理

学部地理学講座開設 50 周年記念誌』, 64-74
E・J・H・コーナー著 石井美樹子訳 (1982) : 『思い出
の昭南博物館』 中公新書
田中館秀三 (1944) : 『南方文化施設の接收』 時代社
田中館秀三業績刊行会編 (1975) : 『田中館秀三一業績
と追憶一』 世界文庫
土井喜久一 (1975) : 田中館先生の思い出, 『田中館秀
三一業績と追憶一』 世界文庫, 第三編 追憶 25-26

中野尊正 (2004) : 外邦図と私とのかかわり, 外邦図研
究ニューズレター No. 2, 50-53
久武哲也 (2003) : 旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日
本の大学・研究施設等所蔵の外邦図との系譜関係,
外邦図研究ニューズレター No. 1, 15-20
渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編 (2005) : 『終戦前後
の参謀本部と陸地測量部 一渡辺正氏所蔵資料集
一』 大阪大学文学研究科人文地理学教室



図5 硫黄島の空中写真 (一部)

〈第9回外邦圖研究會〉

清末から日本統治初期の台湾 関する地図

魏徳文 主講

1

1684年、台湾が清国の版図に組み込まれる

- (1) 福建水師提督の施琅（1621－1696）率いる清国軍が1683年に台湾の鄭克塽を破る。
- (2) 1684年、台湾は清国の版図に組み込まれる。以降1895年まで212年の統治を受ける。
- (3) 1689年（康熙28年）、清国とロシア間で領土紛争が起こり、ネルチンスク条約締結。宣教師による土地測量が行なわれる。

2

康熙帝がイエズス会宣教師に測量を命じる 〈皇輿全覽圖〉

1	1708年先測北直隸省
2	1709-1710年測東北
3	1711年分兩隊：山東與長城到新疆及蒙古
4	1712年測河南，江浙與福建
5	1713年測江西與兩廣，另雲南、貴州、四川
6	1715年再去雲南、貴州、湖南、湖北
7	1717年由喇嘛入西藏，測出聖母峰，任務完成回北京

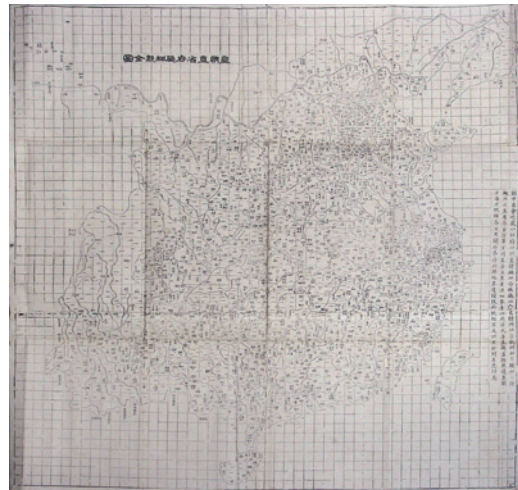


図2.1
〈皇朝直省府縣圖〉，1863，
計里畫方

3

〈福建省圖－台湾〉地圖の測量

- (1) 1714年、宣教師の馮秉正 (De Mailla)、雷孝思 (Regis)、德瑪諾 (Hindere) の三名が廈門（アモイ）から台湾へ渡航。
- (2) 4月18日から5月20日までの33日間で清国統治下の台湾の経緯度7地点を測量。

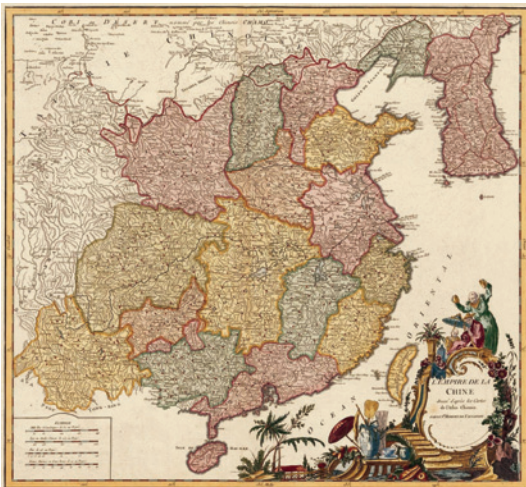


図2.2
L'Empire de la
China, 1780,
Paris, 経緯度



图 3.1 De Mailla, 《康熙命令測繪福爾摩沙島圖》, 1715, 書信集

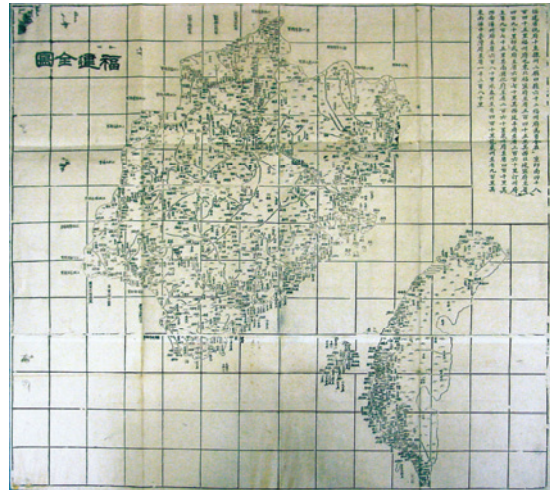


图 3.2 清刊行《福建省圖》, 1863, 計里畫方



图 3.3 J.B. du Halde, *Province de Fo-Kien*, 1735, 風水思想地圖



图 3.4 N. Bellin, *Isle Formose*, 1730

4

19世紀中葉台灣開港前の地圖

- ・ イギリスが清国との茶葉貿易で生まれた輸入超過を調整するべく、インドで栽培させたアヘンを清国に密輸出。
- ・ 林則徐がアヘンを厳しく取り締まり、イギリスが戦火を開く。
- ・ 1842年、南京条約締結。五港を開港。



图 4.1 J. de la Roche-Poncie, 《中華沿海-福爾摩沙海峽圖》, 1853



図4.2 Ackerman, 〈福爾摩沙島図〉, 1856, アメリカによる最初の台湾地図

(4) 1854年, アメリカ海軍提督ペリーが日本を開国させる。

(5) 基隆港と台湾全島の測量が行なわれる。

(6) 台湾に寄港した際、基隆周辺の炭坑の調査を実施。

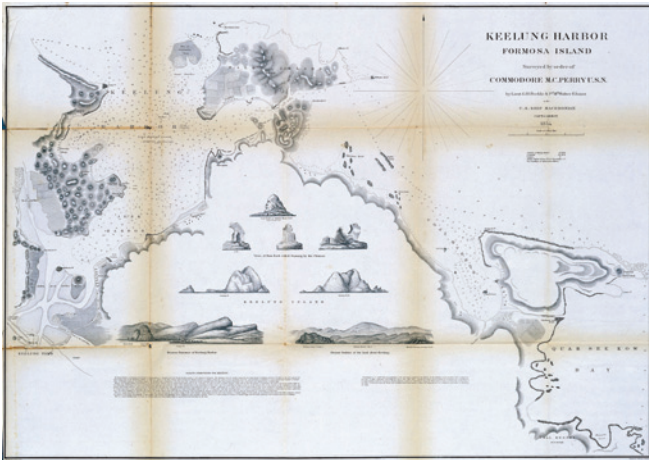


図4.3 C. Jones, 〈福爾摩沙島基隆港図〉, 1855

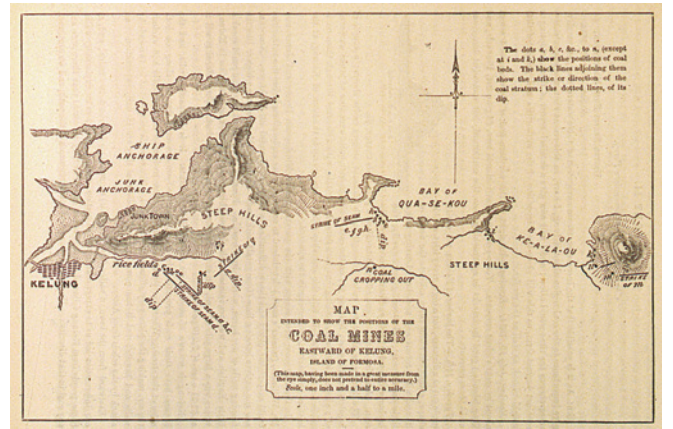


図4.4 C. Jones, 〈福爾摩沙島基隆東方石炭礦分布図〉, 1856

5

19世紀中葉の台湾開港後の地図

- (1) 天津条約によって台湾の港湾が開かれる。
- (2) 米国領事リゼンドル (Le Gendre) が1866-1872年、駐アモイアメリカ領事を務める。
- (3) ローバー号事件。琅王番頭目Tokitokiとの談判。1867年ローバー号が台湾南端部恒春半島亀仔角付近に漂着。乗組員が殺害される。ラジェンドラとピッカリングがパイワン族18集落の総頭目であるTokitokiと談判。
- (4) 政府による管理の行き届かない土地という判断から、アメリカは台湾東部への進出を画策。



8.4 李仙得與瑞德



図5.1 1867年、アメリカ戦艦Ashuelton号が琅(王爺)に報復



図5.2 Swinhoe, 〈福爾摩沙島地図〉, 1864

之姓嶋琴 圖港國 6 八瑤湾漂着後の関する地図

- (1) 八瑤湾漂着とその後の出兵。1871(明治4)年12月、琉球の貢納船が八瑤湾に漂着。54名の人士が高士佛集落の先住民によって斬殺される。外務卿副島種臣は清国と交渉。1873年、リゼンドルは外務省顧問となり、「化外之地」という清国の発言に基づき、出兵を提言。
- (2) リゼンドルの東亞文明灣, リゼンドルは「東亞文明灣」を近代アジアの主軸とする。



図6.1 リゼンドル〈中華福爾摩沙與漁翁島〉, 1870

之姓嶋琴 圖港國 3 「關鍵台湾命脈的一張地図」, 日本はリゼンドルを台湾方面のキーパーソンとして外務省准二等官とし, 後に顧問に。リゼンドルは南北にのびる「番界線」を境に非清国領ととらえた。十九世紀の台湾にとって最も深い関わりをもった西洋人となった。

- (4) 牡丹社事件前の台湾関する地図, 琉球船遭難事件の発生後、樺山資紀少佐司令官は三度にわたって台湾を視察。台湾出兵にも従軍。



図6.2 リゼンドル〈台湾南部生番地図〉, 1872, 内閣文庫



图6.3a 《台湾西南部屬清地》(台湾は清国領となっている), 年代不明



图6.3b 《台湾西南部屬清地》(台湾は清国領となっている), 年代不明

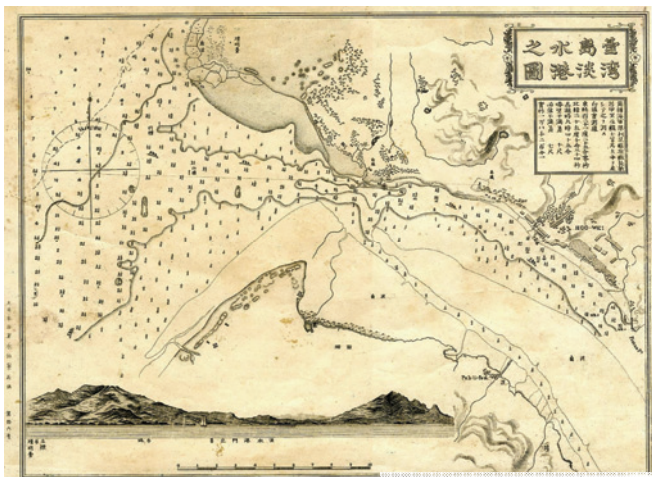


图6.4 《台湾島淡水港口之圖》, 1873



图6.5 《台湾嶼國姓港之圖》, 1873, イギリスからの翻訳版, 1855, 測量海図



图6.6 《台湾島多口港之圖》, 1873, イギリスからの翻訳版, 1865



图6.7 《台湾島噶嘮之圖》, 1873

7

台湾出兵—牡丹社事件

- (1) 西郷従道が遠征軍の総司令官。1874年4月に3658人の兵士を率いて出征。
- (2) 死亡者総数は561人。12名が戦死者で、その他は熱帯病による病死。大久保全権弁理大臣は清国と協議。
- (3) 清国の賠償金は50万両（テール）。軍隊は12月に撤収。日本は10倍の戦費を得たが、死亡者数は漂着して殺害された人々の10倍を数えた。
- (4) 樺山資紀少佐はこの交渉結果に失望感を抱いた。



图7.1 L. Imhauet-Huart, 日軍(王喬)進入牡丹社, 1893



图7.2 《台湾全島圖》, 自《台湾軍記》, 1874



图7.3 《恆春半島精測地圖》, 1874

LE NORD DE FORMOSE

8

清仏戦争、台湾戦役時の近代地図

1858年、フランス軍は安南（ベトナム北部）へ進出。清国との戦火は一〇数年におよび、福州や台湾まで飛び火した。1884年8月、フランスは台湾の基隆および淡水を攻略したが撃退される。しかし、翌年に澎湖を占領。4月6日に両国間で協議が行なわれ、澎湖からは撤収。

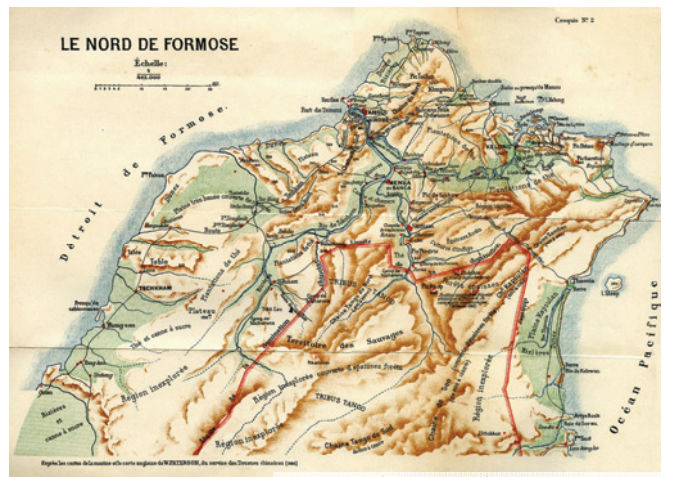


图8.1 卡諾特《北福爾摩沙地圖》, 1/46.3万, 1884測量



图8.2
卡諾特〈基隆港口
圖〉, 1/1万, 1884
測量

9

日本領台直前に関する地図

1895年4月17日に下関（馬關）条約締結。台湾および澎湖が日本に割譲される。

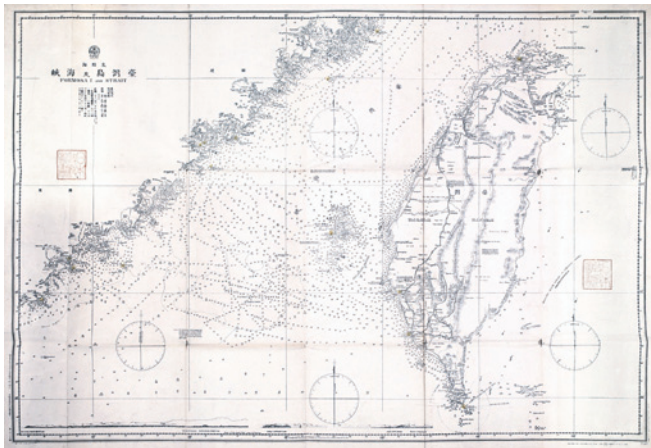


图9.1 〈台湾島及海峡〉, 1894, 内閣文庫

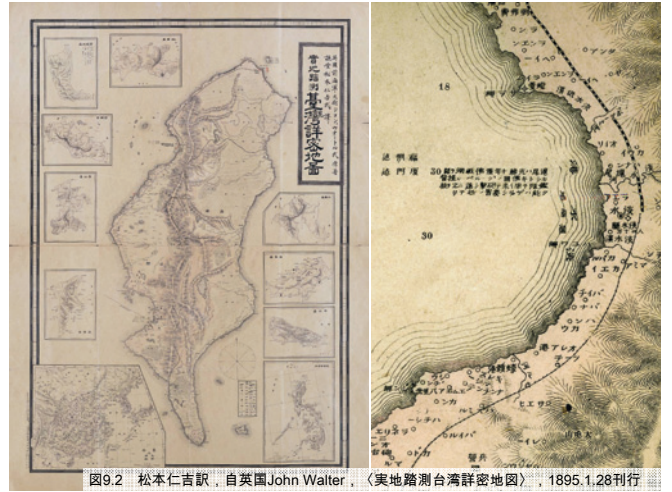


图9.2 松本仁吉訳, 自英国John Walter, 〈実地踏測台湾詳密地図〉, 1895.1.28刊行



图9.3
山吉盛義編, 〈台
湾諸島全圖〉,
1/80万, 1895.4.20
初版



图9.4
陸地測量部編, 〈台
湾島全圖〉, 1/50
万, 1894.12刊行

部領新本日大國帝

臺灣地圖

10

領台直後に刊行された台湾地図

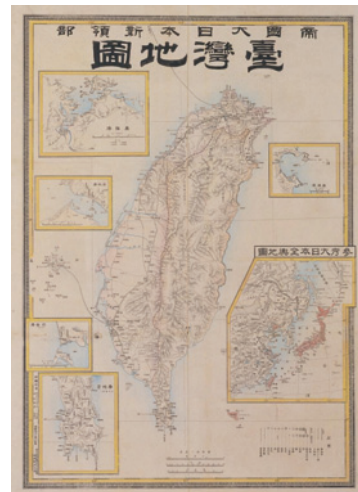


図10.1
嵯峨野彦太郎、〈帝國大日本新領部-台湾地圖〉、1/100万、1895.8



図10.2
長峰和兵衛、〈大日本帝國台湾新圖〉、1/100万、1895.11



図10.3
後藤常太郎、〈台湾詳密地圖〉、1/75万、1898.4



図10.4
台湾總督府製図部、〈台北、大稻埕、臺東略圖〉1/4千、1895.8.10測量

11

日本軍上陸時の迅速測量

1895年5月29日、日本軍が鹽寮に上陸。大縮尺の地形図を使用。

『日清戦史』地圖一覽表

比率尺	圖名	枚数
1/1萬	蕭壩街	1
1/2萬	瑞芳附近／安平鎮庄／新竹附近／大角湧及大料坎／大料坎附近／龍潭坡／橫坑仔附近／溝倍庄／彰化附近／樹仔腳庄附近／大莆林附近／斗六街附近／嘉義／杜仔頭附近／鐵線橋附近／基隆附近賊軍之配置圖	16
1/5萬	三貂灣上陸位置圖／基隆附近／蚵寮附近／第2師團枋寮附近上陸圖／曾文溪	5
1/20萬	近衛師團諸部隊之位置圖 (M28.9.22)／混成第4旅團之位置圖	2
1/30萬	台灣北部作戰地一覽圖／台灣南部作戰地一覽圖	2
1/40萬	台灣總督府指揮下諸部隊之位置圖 (M28.7.11)／台灣總督府指揮下諸部隊之位置圖 (M28.8.5)／台灣總督府指揮下諸部隊之位置圖	3
1/50萬	台灣北部守備配置	1

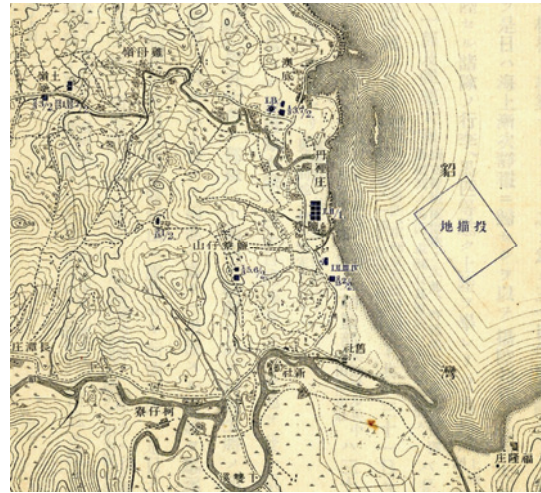


图11.1
陸地測量部臨時測図部，〈近衛師團三貂灣上陸諸部隊之位置圖〉，1/5萬，1895測得



图11.2
陸地測量部臨時測図部，〈基隆附近之戰圖〉，1/5萬，1895.6.3測得

12

日本統治時代初期の迅速測図および編輯図

2万分1迅速測圖

地域名	測量年	製版年	面数	備考
基隆要塞近傍	明治28・29年	明治29年	8	旧基隆西方を含む
基隆南部近傍	明治29年製図	明治29年	4	
台北東部近傍	明治28年	明治29年	3	
台北東方近傍	明治28年		1	
台北近傍	明治28年	明治28年	2	
台北南方近傍	明治28・29年	明治29年	2	

地域名	測量年	製版年	面数	備考
淡水予定要塞近傍		明治29年	5	
宜蘭近傍			9	旧淡水北方・淡水西方
蘇澳近傍	明治28年	明治29年	2	
彰化近傍	明治28年	明治29年	1	
台灣近傍	明治28年	明治29年	2	台中
台南及安平近傍	明治28年	明治29年	2	
打狗予定要塞近傍	明治28・29年	明治29年	3	鳳山
牛欄坑近傍			6	東勢角東方
澎湖鳴要塞近傍			21	
淡水予定要塞近傍			7	明治34年以前測量
台北予定要塞近傍			12	明治34年以前測量
基隆要塞近傍			11	明治34年以前測量



图12.2
陸地測量部臨時測図部，〈台灣[1/2萬]地形圖 - 台北〉，迅速測図，1895測量



图12.3a 陸地測量部臨時測
因部，〈台湾[1/2万]地形圖 -
台北〉，迅速測圖，1895測量



图12.3b 陸地測量部臨時測
因部，〈台湾[1/2万]地形圖 -
台北〉，迅速測圖，1895測量

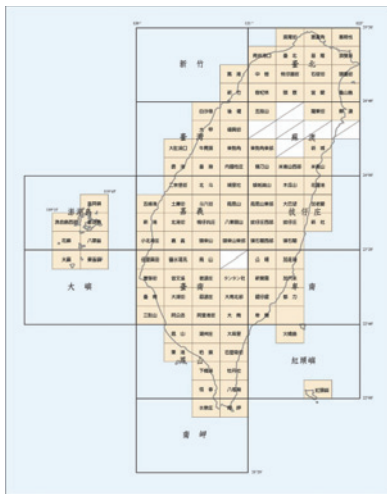


图12.4
〈台湾[1/5万]地形
圖〉範圍圖一覽表，
共103幅



图12.5 陸地測量部臨時測因部，〈台湾[1/5万]地形圖 - 台南〉，1895測因

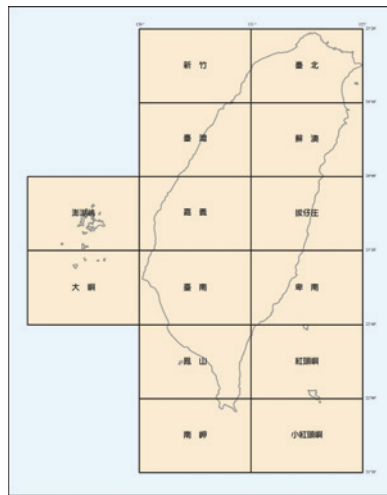


图12.6
〈台湾[1/20万]編製地
形圖〉，範圍圖一覽
表



图12.6
台湾總督對民政部殖
產課，〈台湾總督對
民政部殖產課地形圖〉，1/40万，
1900

結語—まとめ

1. 清国時代の地図は計理画法によるもので、地形や地勢への追究は乏しい。
2. 欧米諸国や日本の近代地図によって清国版図の地形や地理は知ることができた。
3. 近代国家はいずれも近代測量によって地図を製作してきた。そして、地図は国土の統治に寄与し、同時にその土地に暮らす人々を治めることにも寄与してきた。

高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の仮目録について

文：小林 茂
目録：金 美英

2007年の「明治古典会、七夕古書大入礼会」に出品される、多数の外邦図およびそれに関する資料が『平成19年 明治古典会七夕古書大入礼会目録』（河村慎一郎編、明治古典会刊、2007年7月）に掲載され、外邦図研究の立場から大きな関心を持つことになった。これらを目録記載順に簡単に示すとつぎのようになる。

- 1993 番 日清戦時 中国各地地図
- 1992 番 山東省ドイツ租界膠州・高密近傍膠州市街地図（ベルリン版）
- 1994 番 満州十万分一地形図 陸地測量部 昭和7・8・10年製等 270枚程
- 1996 番 二十五万分一ミャンマー地図州 陸地測量部 昭和16～18年刊 70数枚
- 1995 番 外邦図一覧図・目録・資料 陸軍・陸地測量部 手書及印刷図各種
- 2000 番 インドネシア、セレベス及モルッカ諸島図集 参謀本部 昭和15～18年刊 75枚
- 1997 番 仏領印度支那十万分一図 陸地測量部 昭和15～18年刊、100枚余
- 1998 番 十二万五千分一ミャンマー地図集 陸地測量部 昭和17～20年刊 100枚余
- 2001 番 ニュー・カレドニア島図、1936年、パリ版、2面
- 1999 番 インドネシア小スンダ列島図集 参謀本部刊 昭和17・18年製 45枚
- 2002 番 ニューギニア島及パプア諸島図 参謀本部及各種特別部隊 昭和17～19年製 約90枚
- 2003 番 海図、太平洋諸島図集 日本水路部刊 昭和14年小改正版 21枚

このように多量の外邦図関係資料が出品される背景について、外邦図研究関係者に問い合わせたところ、高木菊三郎の旧蔵品を主体にしていると考えられるとのことであった（上記目録、1856番の「陸地測量部

沿革誌終末編稿本等」も参照）。地図の多くは第二次世界大戦時に印刷されたものであり、東北大学や京都大学博物館、さらにお茶の水女子大学に収蔵されている可能性が高いと判断し、とくに手書き図をふくむ1995番について購入を検討することとした。

1995番については、上記につづき「臨時測図部・支那駐屯軍司令部十万分一整備用図（手書大番トレース紙16枚綴）等四冊。南方地図目録（内2枚コピー版補足）一冊。大々判一覧図9枚ほか。一括」と記され、主なものについては、その表紙写真が掲載されていた。外邦図研究にとって重要資料である、高木の『外邦兵要地図整備誌』（原本1941年12月、リプリントは藤原彰編・解説、不二出版、1992年）の記載内容からみて、そのもとになった資料と予想された。また、上記の紹介文にみえる4冊のうち3冊は、目録掲載の写真にみえるタイトルからとくに重要な意義をもつと考え、購入にふみきった。納品後、安全のためこれらの図像をスキャンするとともに、仮の目録を作成した。

以下に示す目録は上記3冊に含まれる図のタイトルを略記したものである。まず10万分の1図にかぎられること、旧満州については日清戦争から満州国の成立期（1932年）までを、仮製図については日露戦争後から満州国の成立後（1933年）までを対象とするのに対し、中国製の地図を「改造」した図については、満州事変前後から日中戦争の開始期（1930～1937年）に限られることなどが注目される。いずれも外邦図作製の画期を反映していると考えられ、くわしい検討が必要である。ここでは、とりいそぎ、この仮目録を示して、参考に供したい。今後は関連資料との照合の上、本格的な目録と解題を準備したい。

高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の仮目録

明治 27、8 年乃至昭和 7 年満州 10 万分 1 図整備要図

1. 自明治 37 年至昭和 7 年『満州 10 万 1 図』整備関係総合一覧図
2. 昭和 7 年ニ於ケル支那駐屯軍司令部修正測図区域一覧図
3. 大正 15 年（昭和元年）乃至昭和 4 年ニ於ケル支那駐屯軍司令部修正区域一覧図
4. 昭和 3 年ニ於ケル満州北部欠図部ノ支那製 10 万分 1 図ニ拠ル補填区域一覧図
5. 大正 12 年乃至 15 年関東軍司令部測図区域一覧図
6. 大正 11 年 13 年支那駐屯軍司令部、関東軍司令部臨時土地調査班ニ於ケル修正測図区域一覧図
7. 大正 10、11 年支那駐屯軍司令部ニ於ケル修正測図並ニ編纂区域一覧図
8. 大正 7 乃至 10 年鹵獲露版 8 万 4 千分 1 図ノ改造『満州 10 万分 1 図』ト之レカ入手ニ伴フ朝鮮駐劄軍司令部、臨時土地調査班、支那駐屯軍司令部、臨時第二測図部、特別測図班測図区域一覧図
9. 大正 7 年臨時土地調査班測図区域一覧図
10. 大正 5、6 年中関東都督府陸軍参謀部及支那駐屯軍司令部実施ノ修正測図区域一覧図
11. 大正元年乃至大正 4 年関東都督府陸軍参謀部測図及既成図修正区域一覧図
12. 明治 27、8 年以降明治 37 乃至 43 年『満州 5 万分 1 側図』ノ編製整理ニ係ル満州 10 万分 1 図及明治 41 年乃至同 43 年臨時測図部実施 10 万分 1 測図区域一覧図

明治 42 年以降臨時測図部、支那駐屯軍司令部 所測仮製 10 万分 1 図整備経過要図

1. 臨時測図部測図区域並経緯度測量実施関係要図
2. 明治 42 年以降臨時測図部所測 10 万分 1 外邦図測図年紀概見図
3. 自明治 42 年至昭和 4 年臨時測図部所測仮製 10 万分 1 図測図整備状況要図（昭和 8 年現在）
4. 昭和 4 年
5. 昭和 2 年
6. 大正 15 年、昭和元年
7. 大正 14 年
8. 大正 13 年
9. 大正 12 年
10. 大正 10 年
11. 大正 6 年
12. 大正 5 年
13. 大正 4 年

14. 大正 2 年
15. 明治 45 年、大正元年
16. 明治 43 年

**大正 11 年以降支那製 10 万分 1 図ニ依ル改造
『北支那 10 万分 1 図』及『南支那 10 万分 1 図』整備要図**

1. 北支那及南支那 10 万分 1 図編纂資料要図
2. 支那製 10 万分 1 編纂図改造集製要図
3. 大正 11 年以降支那製 10 万分 1 図ニ係ル改造整備要図
昭和 10、11 年
4. 昭和 8、9 年
5. 昭和 5、6 年
6. 昭和 11、12 年

4. 第10回外邦図研究会

日 時：2008年2月10日（日）

会 場：立正大学大崎キャンパス

第10回外邦図研究会は、立正大学大崎キャンパス・11号館8階・第6会議室で開催された。39名の参加者があり、計5件の報告とそれに対するコメント、そして参加者による総合討論がおこなわれた。それらのうち、以下には長岡正利氏（もと国土地理院）のプレゼンテーション資料、アメリカ議会図書館所蔵の日本軍による航空偵察写真一覧、大阪大学が所蔵する高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧を掲載する。

外邦図作成の歴史を記録に留める各種一覧図と 外邦図の『初刷』一覧

長岡正利 (国土地理院客員研究員/国土地理院OB)

今日のお話しの内容

- 外邦図作成の歴史を記録に留める「地図一覧図」
(索引図：Index map)
- 陸地測量部における外邦図初刷^(しよずり) — その行方と現状
- 外邦図初刷(約2.3万枚)の一覧 『国外地図目録』と『国外地図一覧図』
- 追補：外邦図の精度、ほか

【注】

1. 内容は、『ニューズレター』No.2の小稿内容を、図によって補完するものです。
2. " 前回の「コメント/高木菊三郎旧蔵図」の図版とも、一部重複があります。

今日のお話しの要旨 - 1/3

外邦図作成の記録としての「地図一覧図」(Index Maps)

昔の拙稿、「長岡(1993): 陸地測量部外邦図作成の記録・・・、地図31-4」に記述。
2003年時点の外邦図一覧図所在については、『外邦図研究ニューズレター』No.2に。

冊子体の、まとまったものとして:

- 『北方地区地図整備目録』(参謀本部、昭和18.5:17図業)
- 『南方地域地図整備目録』(参謀本部、昭和17.12:33図業)
- 『関東軍調製・陸軍秘密 地図一覧図』(関東軍司令部、昭和16.12:11図業)
- 『支那地域兵用地図整備目録』(大本営陸軍部、昭和19.6:25図業)
- 『支那製地図一覧図』(陸地測量部、昭和11.3:13図業)

ほかに、多数の一枚刷の一覧図もある。

外邦海図を含む海図一覧図は、『水路図誌目録』(昭和19年版と22年版)
ほかに、『航空図一覧表』(参謀本部、昭和18.7:9図業)

一覧図は業務用資料のため、系統的保存の対象とはされず。
国立国会図書館でも蔵書扱いはされない。「地図図式」「作業規程」なども同様。

今日のお話しの要旨 - 2/3

陸地測量部における外邦図「初刷」 — その行方と現状

「初刷」: 当時から、印刷した総ての地図の初版は、「初刷」として、その1枚を永久保存とする規定があった。修正改版の印刷図も同じ。

「外邦図初刷」のみ、接收を免れるために、疎開先の松本市から敗戦直後に高山市の関係者宅に移した。

昭和22年に密かに稲毛に移した。三宅坂を出て以来、ここまでは開梱せず。
— 公式には「存在しない」状態がその後も継続。

その後、整理して「初刷」1組を作った。各地から移されて来た地図もあった。

昭和33年に、防衛研究所戦史室経費で、その目録(4分冊)と一覧図(4分冊)を作成。

「初刷」は、昭和40年代初めに、「色々な面倒」をおそれて外部の組織に移管。

以後、そのままの状態推移。次記の『国外地図目録』に記されたと同じ、2.3万枚。
(これが、作成された外邦図の完全なセットに相当)

— 外邦図の製図原図と印刷原図については、『外邦図研究ニューズレター』No.2 ご参照。

今日のお話しの要旨 - 3/3

外邦図初刷(約2.3万枚)の一覧

『国外地図目録』と『国外地図一覧図』

『国外地図目録』

個別図業(図名)を各1行として、縮尺・作成年次などを付す。
所属『国外地図一覧図』との対象番号を記載。

『国外地図一覧図』

既製の一覧図(またはその写真複製)を台紙に貼って、各地図の有無を表示。
一覧図がないものは手書きで作って、そこに記入。

これらの作成の経緯

昭和32年度に、防衛庁防衛研究所戦史室から、資料整理用の経費を貰って作る。
目録(4冊)と一覧図(紙版4冊)のペア。正規は5セットを作る。

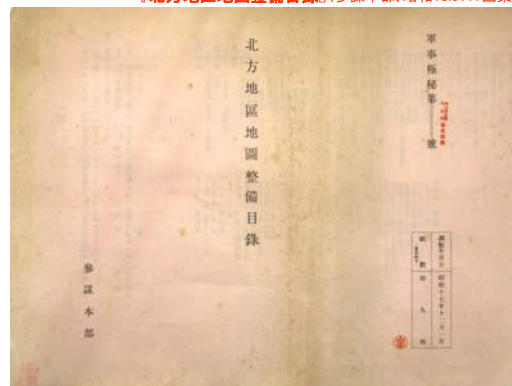
防衛研究所には1部を納めた(33年3月末)。その後、借交社にも渡った。

現在の「外邦図(初刷)」の所蔵もにもあり。

国立国会図書館地図室にも。(蔵書登録は無し:NDL-OPACの対象外。)

外邦図の「地図一覧図」: その一例

— 『北方地区地図整備目録』(参謀本部、昭和18.5:17図業)より



以下、『北方地区地図整備目録』からの抄録

目次

1	索引図(其一)	十萬分一地形圖
2	索引図(其二)	五萬分一地形圖
3	索引図(其三)	二萬五千分一地形圖
4	索引図(其四)	二萬分一地形圖
5	索引図(其五)	一萬五千分一地形圖
6	索引図(其六)	一萬分一地形圖
7	索引図(其七)	五千分一地形圖
8	索引図(其八)	二千五分一地形圖
9	索引図(其九)	一千五分一地形圖
10	索引図(其十)	一千分一地形圖
11	索引図(其十一)	五百分一地形圖
12	索引図(其十二)	二百五分一地形圖
13	索引図(其十三)	一百五分一地形圖
14	索引図(其十四)	七十五分一地形圖
15	索引図(其十五)	五十分一地形圖
16	索引図(其十六)	二十五分一地形圖
17	索引図(其十七)	十五分一地形圖
18	索引図(其十八)	十分一地形圖
19	索引図(其十九)	五分一地形圖
20	索引図(其二十)	二分五厘一地形圖
21	索引図(其二十一)	一分一地形圖
22	索引図(其二十二)	五分一地形圖
23	索引図(其二十三)	二分五厘一地形圖
24	索引図(其二十四)	一分一地形圖
25	索引図(其二十五)	五分一地形圖
26	索引図(其二十六)	二分五厘一地形圖
27	索引図(其二十七)	一分一地形圖
28	索引図(其二十八)	五分一地形圖
29	索引図(其二十九)	二分五厘一地形圖
30	索引図(其三十)	一分一地形圖

緒言

一、本書ハ參謀本部(陸海軍)及關東軍司令部(關東軍測量部)調製ニ係ル
北方地区既成地圖ノ現況ヲ明瞭ニシ其ノ利用ニ便スラシム

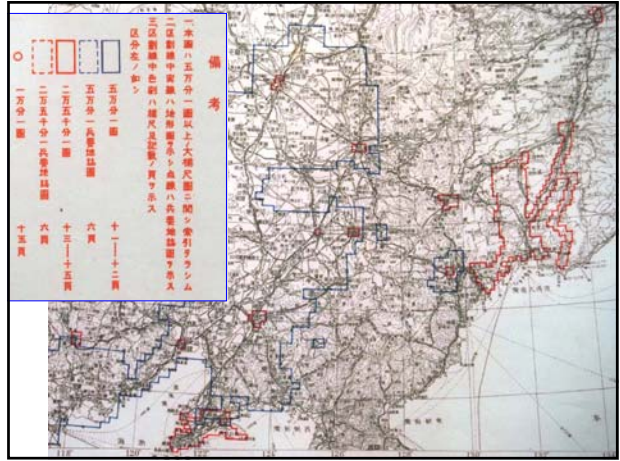
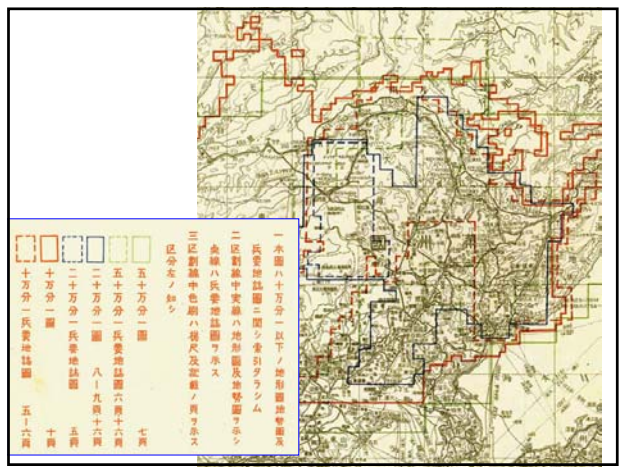
二、取捨區分及製圖年記ノ如シ

1、軍事秘密

2、圖名下方ノ數字ハ製圖年記(昭和)ヲ示ス括弧ヲ施セルモノハ大正或ハ明治トス

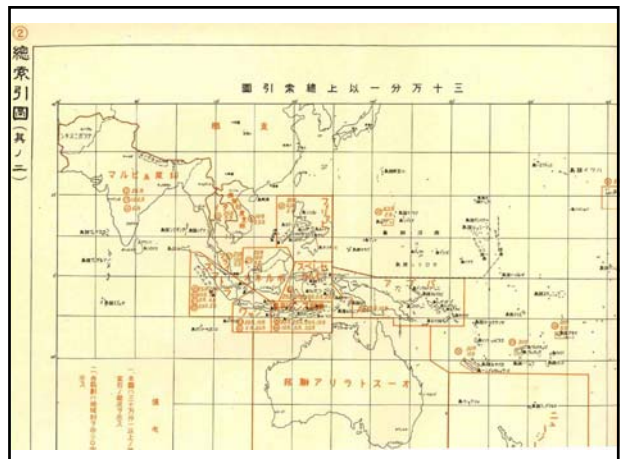
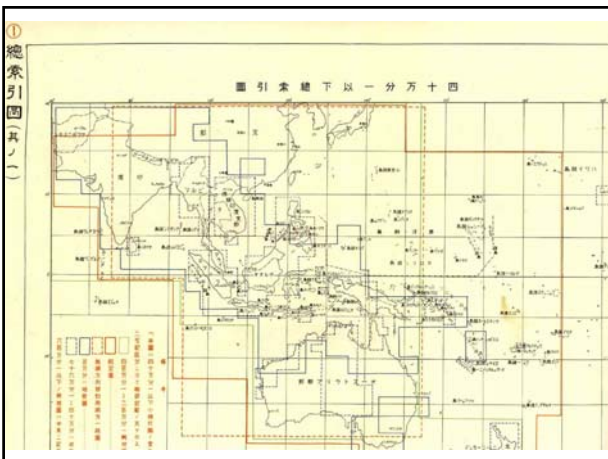
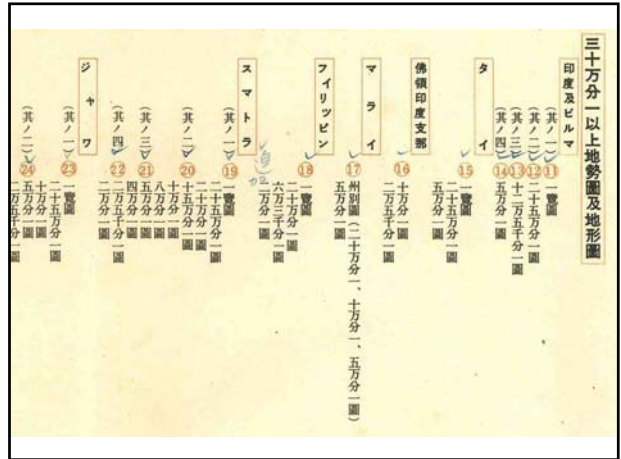
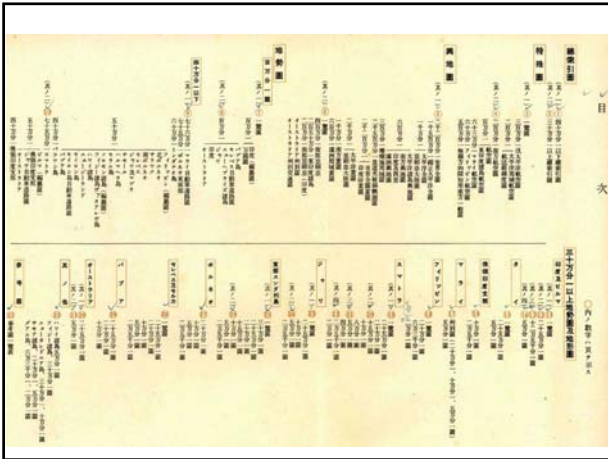
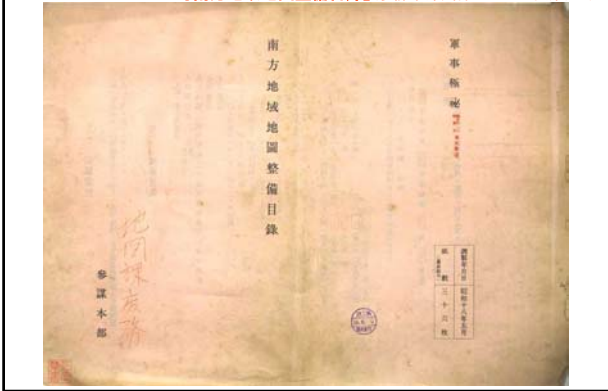
目次

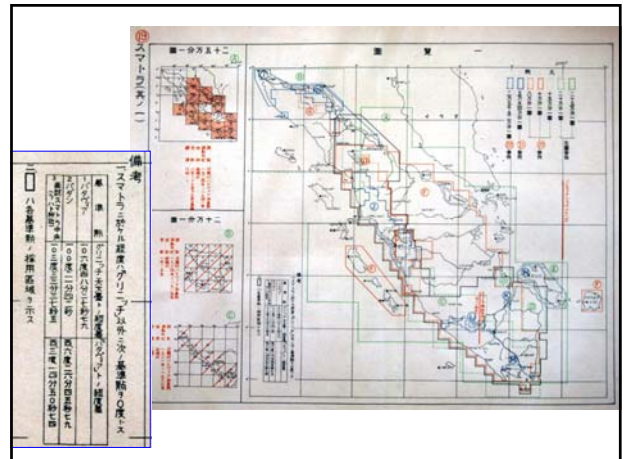
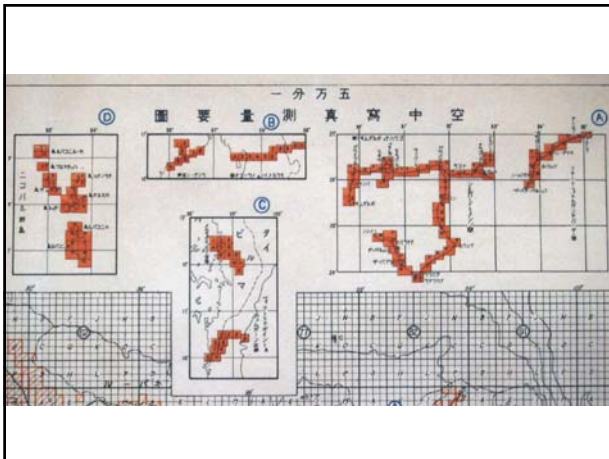
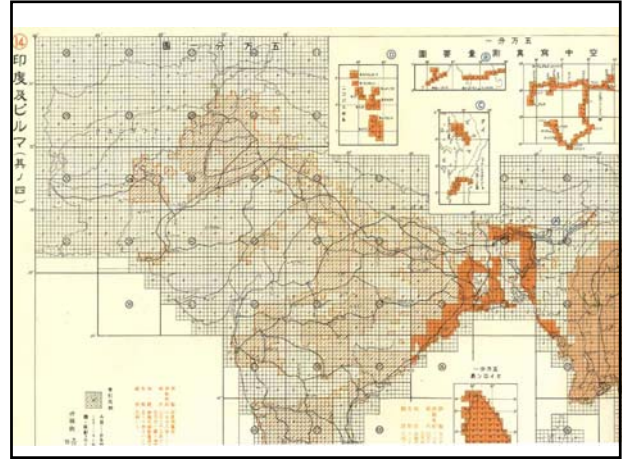
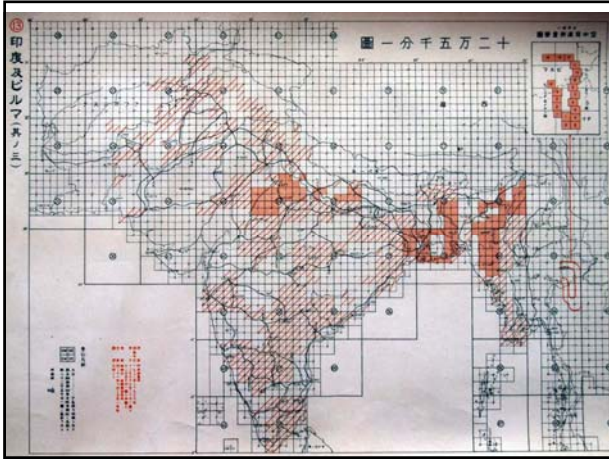
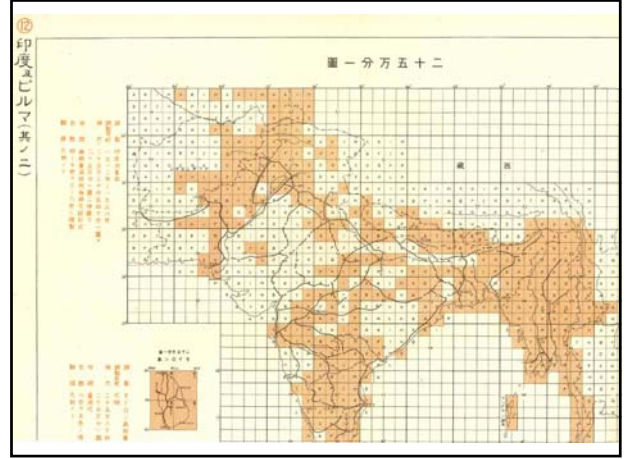
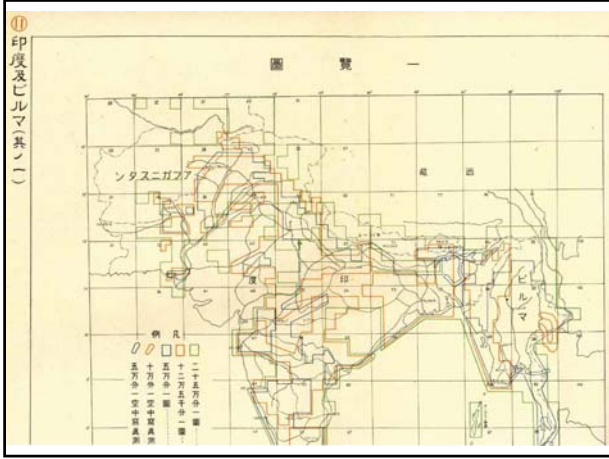
1	索引圖(其一)	十萬分一地形圖
2	索引圖(其二)	五萬分一地形圖
3	索引圖(其三)	二萬五千分一地形圖
4	索引圖(其四)	二萬分一地形圖
5	索引圖(其五)	一萬五千分一地形圖
6	索引圖(其六)	一萬分一地形圖
7	索引圖(其七)	五千分一地形圖
8	索引圖(其八)	二千五分一地形圖
9	索引圖(其九)	一千五分一地形圖
10	索引圖(其十)	一千分一地形圖
11	索引圖(其十一)	五百分一地形圖
12	索引圖(其十二)	二百五分一地形圖
13	索引圖(其十三)	一百五分一地形圖
14	索引圖(其十四)	七十五分一地形圖
15	索引圖(其十五)	五十分一地形圖
16	索引圖(其十六)	二十五分一地形圖
17	索引圖(其十七)	十五分一地形圖
18	索引圖(其十八)	十分一地形圖
19	索引圖(其十九)	五分一地形圖
20	索引圖(其二十)	二分五厘一地形圖
21	索引圖(其二十一)	一分一地形圖
22	索引圖(其二十二)	五分一地形圖
23	索引圖(其二十三)	二分五厘一地形圖
24	索引圖(其二十四)	一分一地形圖
25	索引圖(其二十五)	五分一地形圖
26	索引圖(其二十六)	二分五厘一地形圖
27	索引圖(其二十七)	一分一地形圖
28	索引圖(其二十八)	五分一地形圖
29	索引圖(其二十九)	二分五厘一地形圖
30	索引圖(其三十)	一分一地形圖

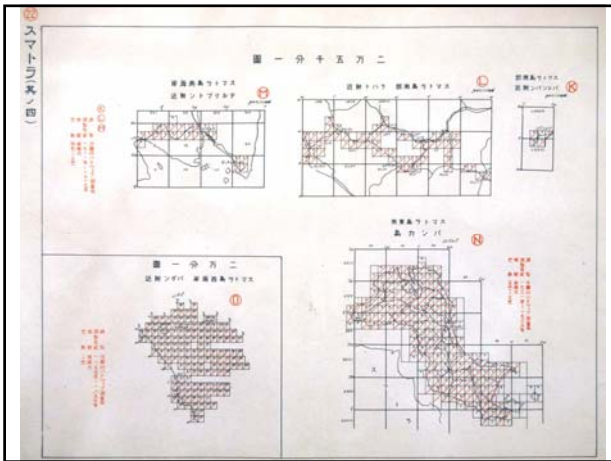
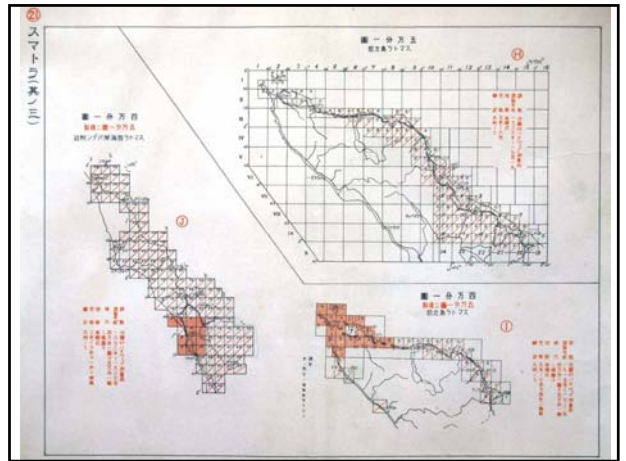
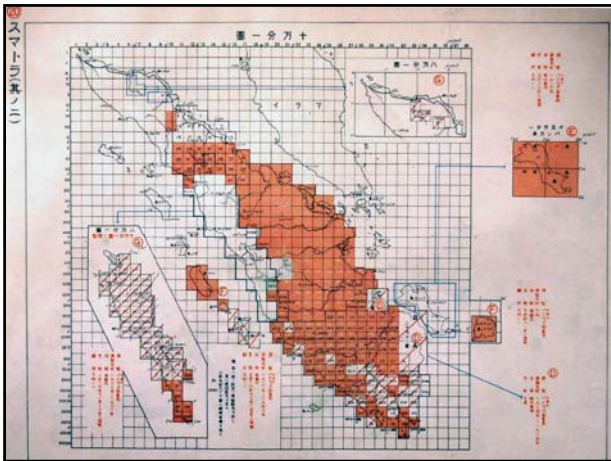


外邦図の「地図一覧図」：その一例

—『南方地域地図整備目録』(参謀本部、昭和17.12.33図業)より



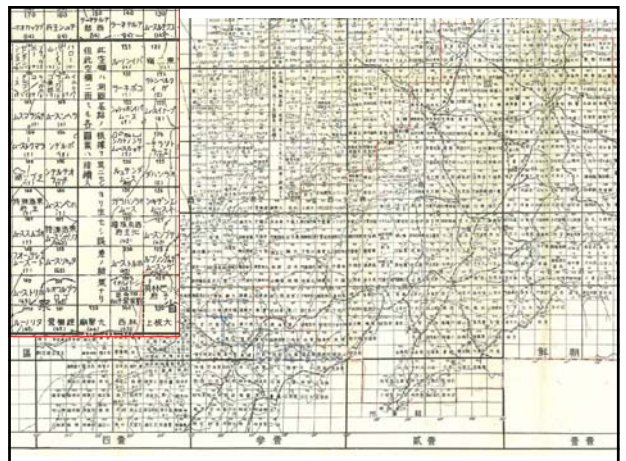
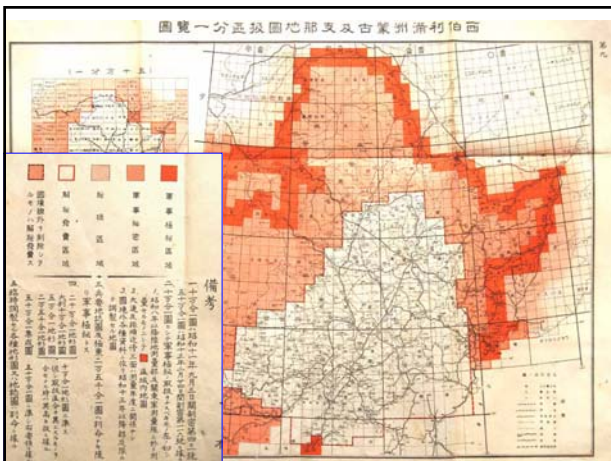




外邦図の「地図一覽図」：その一例

—『関東軍調査・地軍秘密 地図一覽図』(関東軍司令部、昭和16.12.11図業)より

第一	滿洲一覽圖
第二	五十分一圖一覽圖
第三	兵要二十萬分一圖一覽圖(一、二)
第四	十萬分一地形圖一覽圖
第五	大判十萬分一地形圖、地誌圖一覽圖(一、二)
第六	滿洲五十分一地形圖一覽圖
第七	二萬五千分一地形圖一覽圖
第八	特別圖一覽圖(集約圖、演習圖、市街圖)
第九	地圖取扱區分一覽圖
第十	地圖ノ圖部統一及訂正番號改訂要領
第十一	方眼系及利用要領
第十二	



東ソ領飛行場一覽圖	一
東ソ領飛行場二覽圖	二
▲五島支隊一覽圖	三
▲三島支隊一覽圖	四
▲三島支隊二覽圖	五
▲三島支隊三覽圖	六
▲三島支隊四覽圖	七
▲三島支隊五覽圖	八
▲三島支隊六覽圖	九
▲三島支隊七覽圖	一〇
▲三島支隊八覽圖	一一
▲三島支隊九覽圖	一二
▲三島支隊一〇覽圖	一三
▲三島支隊一一覽圖	一四
▲三島支隊一二覽圖	一五
▲三島支隊一三覽圖	一六
▲三島支隊一四覽圖	一七
▲三島支隊一五覽圖	一八
▲三島支隊一六覽圖	一九
▲三島支隊一七覽圖	二〇
▲三島支隊一八覽圖	二一
▲三島支隊一九覽圖	二二
▲三島支隊二〇覽圖	二三
▲三島支隊二一覽圖	二四
▲三島支隊二二覽圖	二五
▲三島支隊二三覽圖	二六
▲三島支隊二四覽圖	二七
▲三島支隊二五覽圖	二八
▲三島支隊二六覽圖	二九
▲三島支隊二七覽圖	三〇
▲三島支隊二八覽圖	三一
▲三島支隊二九覽圖	三二
▲三島支隊三〇覽圖	三三
▲三島支隊三一覽圖	三四
▲三島支隊三二覽圖	三五
▲三島支隊三三覽圖	三六
▲三島支隊三四覽圖	三七
▲三島支隊三五覽圖	三八
▲三島支隊三六覽圖	三九
▲三島支隊三七覽圖	四〇
▲三島支隊三八覽圖	四一
▲三島支隊三九覽圖	四二
▲三島支隊四〇覽圖	四三
▲三島支隊四一覽圖	四四
▲三島支隊四二覽圖	四五
▲三島支隊四三覽圖	四六
▲三島支隊四四覽圖	四七
▲三島支隊四五覽圖	四八
▲三島支隊四六覽圖	四九
▲三島支隊四七覽圖	五〇
▲三島支隊四八覽圖	五一
▲三島支隊四九覽圖	五二
▲三島支隊五〇覽圖	五三
▲三島支隊五一覽圖	五四
▲三島支隊五二覽圖	五五
▲三島支隊五三覽圖	五六
▲三島支隊五四覽圖	五七
▲三島支隊五五覽圖	五八
▲三島支隊五六覽圖	五九
▲三島支隊五七覽圖	六〇
▲三島支隊五八覽圖	六一
▲三島支隊五九覽圖	六二
▲三島支隊六〇覽圖	六三
▲三島支隊六一覽圖	六四
▲三島支隊六二覽圖	六五
▲三島支隊六三覽圖	六六
▲三島支隊六四覽圖	六七
▲三島支隊六五覽圖	六八
▲三島支隊六六覽圖	六九
▲三島支隊六七覽圖	七〇
▲三島支隊六八覽圖	七一
▲三島支隊六九覽圖	七二
▲三島支隊七〇覽圖	七三
▲三島支隊七一覽圖	七四
▲三島支隊七二覽圖	七五
▲三島支隊七三覽圖	七六
▲三島支隊七四覽圖	七七
▲三島支隊七五覽圖	七八
▲三島支隊七六覽圖	七九
▲三島支隊七七覽圖	八〇
▲三島支隊七八覽圖	八一
▲三島支隊七九覽圖	八二
▲三島支隊八〇覽圖	八三
▲三島支隊八一覽圖	八四
▲三島支隊八二覽圖	八五
▲三島支隊八三覽圖	八六
▲三島支隊八四覽圖	八七
▲三島支隊八五覽圖	八八
▲三島支隊八六覽圖	八九
▲三島支隊八七覽圖	九〇
▲三島支隊八八覽圖	九一
▲三島支隊八九覽圖	九二
▲三島支隊九〇覽圖	九三
▲三島支隊九一覽圖	九四
▲三島支隊九二覽圖	九五
▲三島支隊九三覽圖	九六
▲三島支隊九四覽圖	九七
▲三島支隊九五覽圖	九八
▲三島支隊九六覽圖	九九
▲三島支隊九七覽圖	一〇〇

東ソ領飛行場一覽圖	一
東ソ領飛行場二覽圖	二
▲五島支隊一覽圖	三
▲三島支隊一覽圖	四
▲三島支隊二覽圖	五
▲三島支隊三覽圖	六
▲三島支隊四覽圖	七
▲三島支隊五覽圖	八
▲三島支隊六覽圖	九
▲三島支隊七覽圖	一〇
▲三島支隊八覽圖	一一
▲三島支隊九覽圖	一二
▲三島支隊一〇覽圖	一三
▲三島支隊一一覽圖	一四
▲三島支隊一二覽圖	一五
▲三島支隊一三覽圖	一六
▲三島支隊一四覽圖	一七
▲三島支隊一五覽圖	一八
▲三島支隊一六覽圖	一九
▲三島支隊一七覽圖	二〇
▲三島支隊一八覽圖	二一
▲三島支隊一九覽圖	二二
▲三島支隊二〇覽圖	二三
▲三島支隊二一覽圖	二四
▲三島支隊二二覽圖	二五
▲三島支隊二三覽圖	二六
▲三島支隊二四覽圖	二七
▲三島支隊二五覽圖	二八
▲三島支隊二六覽圖	二九
▲三島支隊二七覽圖	三〇
▲三島支隊二八覽圖	三一
▲三島支隊二九覽圖	三二
▲三島支隊三〇覽圖	三三
▲三島支隊三一覽圖	三四
▲三島支隊三二覽圖	三五
▲三島支隊三三覽圖	三六
▲三島支隊三四覽圖	三七
▲三島支隊三五覽圖	三八
▲三島支隊三六覽圖	三九
▲三島支隊三七覽圖	四〇
▲三島支隊三八覽圖	四一
▲三島支隊三九覽圖	四二
▲三島支隊四〇覽圖	四三
▲三島支隊四一覽圖	四四
▲三島支隊四二覽圖	四五
▲三島支隊四三覽圖	四六
▲三島支隊四四覽圖	四七
▲三島支隊四五覽圖	四八
▲三島支隊四六覽圖	四九
▲三島支隊四七覽圖	五〇
▲三島支隊四八覽圖	五一
▲三島支隊四九覽圖	五二
▲三島支隊五〇覽圖	五三
▲三島支隊五一覽圖	五四
▲三島支隊五二覽圖	五五
▲三島支隊五三覽圖	五六
▲三島支隊五四覽圖	五七
▲三島支隊五五覽圖	五八
▲三島支隊五六覽圖	五九
▲三島支隊五七覽圖	六〇
▲三島支隊五八覽圖	六一
▲三島支隊五九覽圖	六二
▲三島支隊六〇覽圖	六三
▲三島支隊六一覽圖	六四
▲三島支隊六二覽圖	六五
▲三島支隊六三覽圖	六六
▲三島支隊六四覽圖	六七
▲三島支隊六五覽圖	六八
▲三島支隊六六覽圖	六九
▲三島支隊六七覽圖	七〇
▲三島支隊六八覽圖	七一
▲三島支隊六九覽圖	七二
▲三島支隊七〇覽圖	七三
▲三島支隊七一覽圖	七四
▲三島支隊七二覽圖	七五
▲三島支隊七三覽圖	七六
▲三島支隊七四覽圖	七七
▲三島支隊七五覽圖	七八
▲三島支隊七六覽圖	七九
▲三島支隊七七覽圖	八〇
▲三島支隊七八覽圖	八一
▲三島支隊七九覽圖	八二
▲三島支隊八〇覽圖	八三
▲三島支隊八一覽圖	八四
▲三島支隊八二覽圖	八五
▲三島支隊八三覽圖	八六
▲三島支隊八四覽圖	八七
▲三島支隊八五覽圖	八八
▲三島支隊八六覽圖	八九
▲三島支隊八七覽圖	九〇
▲三島支隊八八覽圖	九一
▲三島支隊八九覽圖	九二
▲三島支隊九〇覽圖	九三
▲三島支隊九一覽圖	九四
▲三島支隊九二覽圖	九五
▲三島支隊九三覽圖	九六
▲三島支隊九四覽圖	九七
▲三島支隊九五覽圖	九八
▲三島支隊九六覽圖	九九
▲三島支隊九七覽圖	一〇〇

東ソ領飛行場一覽圖	一
東ソ領飛行場二覽圖	二
▲五島支隊一覽圖	三
▲三島支隊一覽圖	四
▲三島支隊二覽圖	五
▲三島支隊三覽圖	六
▲三島支隊四覽圖	七
▲三島支隊五覽圖	八
▲三島支隊六覽圖	九
▲三島支隊七覽圖	一〇
▲三島支隊八覽圖	一一
▲三島支隊九覽圖	一二
▲三島支隊一〇覽圖	一三
▲三島支隊一一覽圖	一四
▲三島支隊一二覽圖	一五
▲三島支隊一三覽圖	一六
▲三島支隊一四覽圖	一七
▲三島支隊一五覽圖	一八
▲三島支隊一六覽圖	一九
▲三島支隊一七覽圖	二〇
▲三島支隊一八覽圖	二一
▲三島支隊一九覽圖	二二
▲三島支隊二〇覽圖	二三
▲三島支隊二一覽圖	二四
▲三島支隊二二覽圖	二五
▲三島支隊二三覽圖	二六
▲三島支隊二四覽圖	二七
▲三島支隊二五覽圖	二八
▲三島支隊二六覽圖	二九
▲三島支隊二七覽圖	三〇
▲三島支隊二八覽圖	三一
▲三島支隊二九覽圖	三二
▲三島支隊三〇覽圖	三三
▲三島支隊三一覽圖	三四
▲三島支隊三二覽圖	三五
▲三島支隊三三覽圖	三六
▲三島支隊三四覽圖	三七
▲三島支隊三五覽圖	三八
▲三島支隊三六覽圖	三九
▲三島支隊三七覽圖	四〇
▲三島支隊三八覽圖	四一
▲三島支隊三九覽圖	四二
▲三島支隊四〇覽圖	四三
▲三島支隊四一覽圖	四四
▲三島支隊四二覽圖	四五
▲三島支隊四三覽圖	四六
▲三島支隊四四覽圖	四七
▲三島支隊四五覽圖	四八
▲三島支隊四六覽圖	四九
▲三島支隊四七覽圖	五〇
▲三島支隊四八覽圖	五一
▲三島支隊四九覽圖	五二
▲三島支隊五〇覽圖	五三
▲三島支隊五一覽圖	五四
▲三島支隊五二覽圖	五五
▲三島支隊五三覽圖	五六
▲三島支隊五四覽圖	五七
▲三島支隊五五覽圖	五八
▲三島支隊五六覽圖	五九
▲三島支隊五七覽圖	六〇
▲三島支隊五八覽圖	六一
▲三島支隊五九覽圖	六二
▲三島支隊六〇覽圖	六三
▲三島支隊六一覽圖	六四
▲三島支隊六二覽圖	六五
▲三島支隊六三覽圖	六六
▲三島支隊六四覽圖	六七
▲三島支隊六五覽圖	六八
▲三島支隊六六覽圖	六九
▲三島支隊六七覽圖	七〇
▲三島支隊六八覽圖	七一
▲三島支隊六九覽圖	七二
▲三島支隊七〇覽圖	七三
▲三島支隊七一覽圖	七四
▲三島支隊七二覽圖	七五
▲三島支隊七三覽圖	七六
▲三島支隊七四覽圖	七七
▲三島支隊七五覽圖	七八
▲三島支隊七六覽圖	七九
▲三島支隊七七覽圖	八〇
▲三島支隊七八覽圖	八一
▲三島支隊七九覽圖	八二
▲三島支隊八〇覽圖	八三
▲三島支隊八一覽圖	八四
▲三島支隊八二覽圖	八五
▲三島支隊八三覽圖	八六
▲三島支隊八四覽圖	八七
▲三島支隊八五覽圖	八八
▲三島支隊八六覽圖	八九
▲三島支隊八七覽圖	九〇
▲三島支隊八八覽圖	九一
▲三島支隊八九覽圖	九二
▲三島支隊九〇覽圖	九三
▲三島支隊九一覽圖	九四
▲三島支隊九二覽圖	九五
▲三島支隊九三覽圖	九六
▲三島支隊九四覽圖	九七
▲三島支隊九五覽圖	九八
▲三島支隊九六覽圖	九九
▲三島支隊九七覽圖	一〇〇

今日のお話しーその2/3
陸地測量部における外邦図「初刷」ーその行方と現状

「初刷」：当時から、印刷した総ての地図の初版は、「初刷」として、その1枚を永久保存とする規定があった。修正改版の印刷図も同じ。

「外邦図初刷」のみ、接收を免れるために、疎開先の松本市から敗戦直後に高山市の関係者宅に移した。

昭和22年に密かに稲毛に移した。三宅坂を出て以来、ここまでは開梱せず。
ー公式には、「存在しない」状態がその後も継続。

その後、整理して「初刷」1組を作った。各地から移されて来た地図もあった。

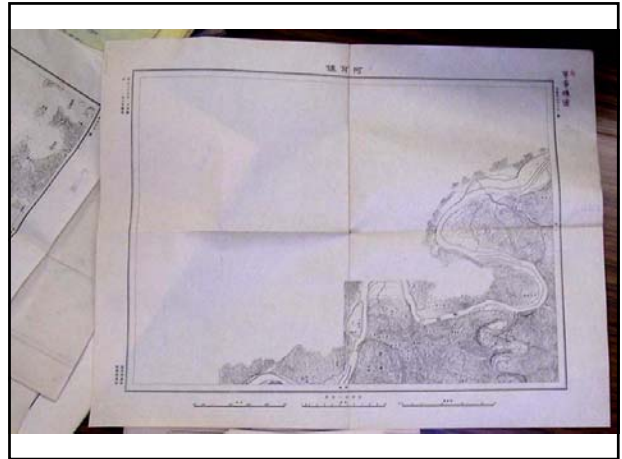
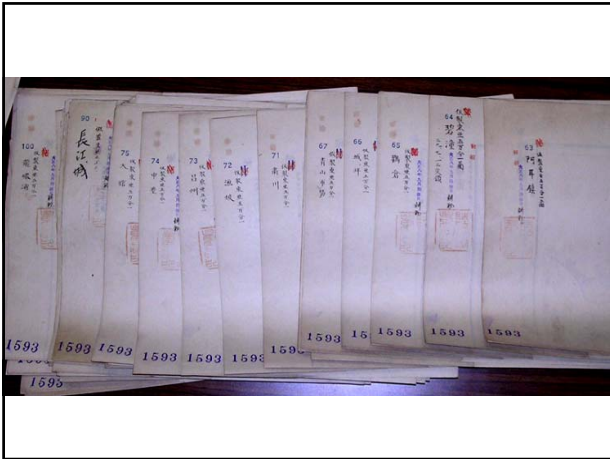
防衛研修所戦史室経費で、昭和33年にその目録(4分冊)と一覧図(4分冊)を作成。

「初刷」は、昭和40年代初期に、「色々な面倒」をおそれて **外部の組織に移管**。

以後、そのままの状態推移。次の『国外地図目録』に記されたと同じ、2.3万枚。
(これが、作成された外邦図の完全なセットに相当)

ー 外邦図の製図原図と印刷原図については、『外邦図研究ニューレター』№2 ご参照。





今日のお話し - その 3/3

外邦図初刷の一覧としての

『国外地図目録』と『国外地図一覧図』



『国外地図目録』と『国外地図一覧図』

— 各全4巻の地域別内容

『国外地図目録』・『国外地図一覧図』

全巻数 4巻
 調査年月日 昭和33年3月31日
 編者 地理院

種別	目録ページ	一覧図ページ	巻数
1. 南地帯	1~17	1	第一巻
2. 航空図	18~27	8~9	〃
3. 旧日本領	28~220	10~22	〃
イ. 南洋支	28~57	10~11	〃
ロ. 東南列島	58~86	12	〃
ハ. 朝鮮	87~226	13~15	〃
ニ. 小笠原諸島	228~232	16	〃
ホ. 沖縄諸島	233~245	17	〃
ヘ. 台湾	246~280	18	〃
ト. 南洋諸島	270~293	19~22	〃
4. 北方	284~727	23~45	第二巻
イ. シベリア	284~389	23~30	〃
ロ. 滿洲	390~727	31~45	〃
ア. 支那(外蒙古含む)	728~1176	46~64	第三巻
イ. 南方	1184~1314	65~69	第四巻
ロ. インド及びビルマ	1315~1327	70	〃
ハ. 仏印	1328~1342	69	〃
ニ. マライ	1343~1357	70	〃
ホ. フィリピン	1358~1387	71~72	〃
ヘ. スマタラ	1388~1414	73~75	〃
ト. ジャワ	1415~1461	76~77	〃
チ. 東部スダネ島	1462~1474	78~79	〃
リ. ボルネオ	1475~1500	80~81	〃
ヌ. スレスレ及びモルカ	1501~1513	82	〃
ル. ビア	1514~1543	83~85	〃
ヲ. オーストラリア	1544~1557	87~88	〃
ワ. 太平洋諸島	1573~1575	89	〃
カ. ハワイ	1588~1572	89	〃
ア. その他	1177~1183	90~91	〃
イ. アラスカ及びアリューシャン	1177~1181	91	〃
ロ. ユーロップ及びアメリカ	1182~1183	91	〃

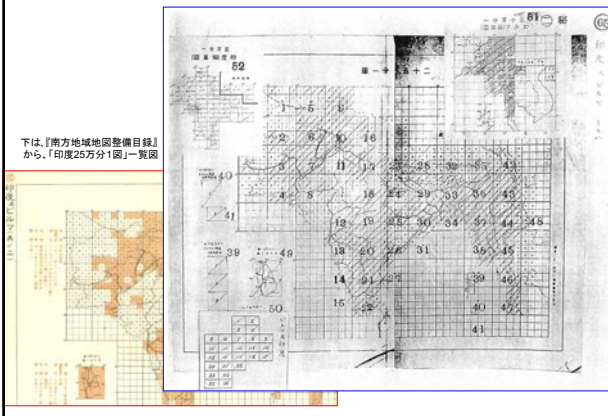
【この表は、小林先生による。】

『国外地図目録』 - 整理内容の一例 / 謄写印刷の用紙にカーボン複写手書き



図番号	図名	期間	年代	縮尺	種類	発行	巻数	備考	防衛庁	地図	対地番号
10000	東亞大陸図(自地)	昭和19年	1:1000000	500000	陸地	陸軍省	4	1	/	/	1
10001	五ノ(一)	?	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10002	五ノ(二)	?	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10003	五ノ(三)	?	?	?	?	?	5	?	/	/	?
10004	五ノ(四)	?	?	?	?	?	5	?	/	/	?
10005	五ノ(五)	?	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10006	太平洋全図(空白)	?	?	?	?	?	8	?	/	/	?
10007	縮太平洋全図	石	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10008	五ノ(六)	?	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10009	濠洲領域地図	昭和19年	?	?	?	?	2	?	/	/	?
10010	印度及西支	其ノ一	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10011	其ノ二	?	?	?	?	?	5	?	/	/	?
10012	南洋群島	石	18'	?	?	?	?	?	/	/	?
10013	珊瑚海領域	左	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10014	アシア大陸	昭和16年	?	?	?	?	1	?	/	/	2
10015	太平洋全図	?	?	?	?	?	?	?	/	/	?
10016	世界全図	石	?	?	?	?	?	?	/	/	?

『国外地図一覧図』 - 整理内容の一例



『国外地図目録』と『国外地図一覧図』



今日のお話し - 追補：外邦図の精度、ほか

満洲と支那本部を例として、外邦図の作成時期・方法による その精度

満洲

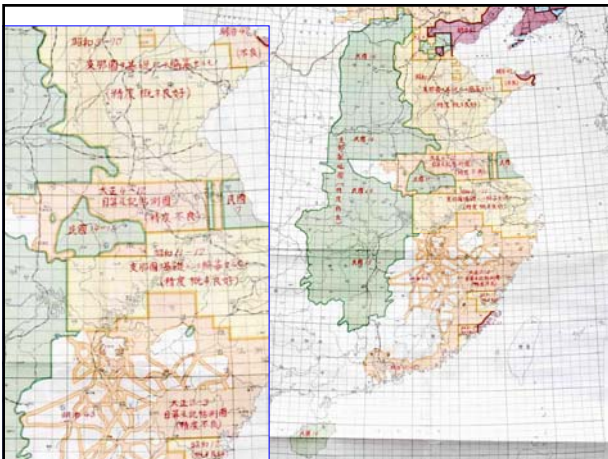
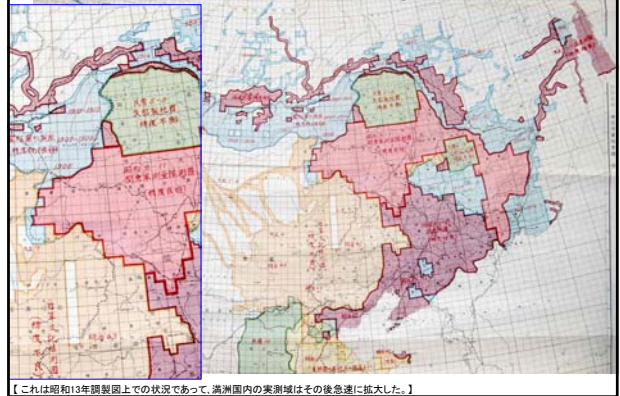
- 初期には、1800年代末～1910年代の、ロシア版の地図を翻刻利用。
(後のシベリア出兵時の占領地図、ほか。)
- 次に、中華民国製の地図(民国4～9(1915～20)年図が多い)を利用。
- 明治末～大正期:併行して、必要な地域に「迅速測図」
- " :地域によっては「目算及記帖測図」も。
- 昭和8年～関東軍測量隊による現地実測測図。
(周辺地域を除いて一般販売。)

支那本部

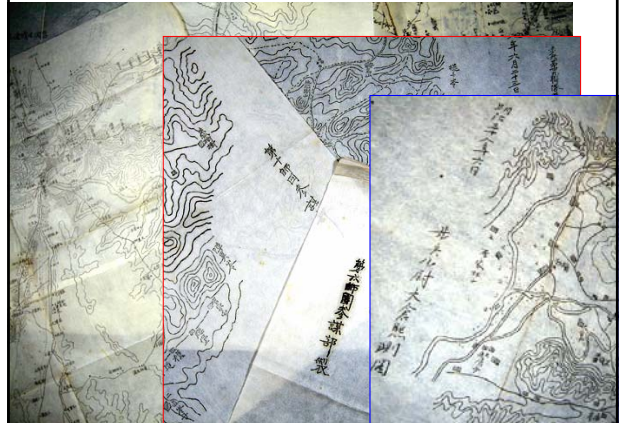
- 明治末～大正期:「目算及記帖測図」が主体
- 昭和9～12年 :東部では、民国5万図の利用(その編集による。)
- 奥地は、民国10万図(民国14～18(1925～30)年図が多い)を。

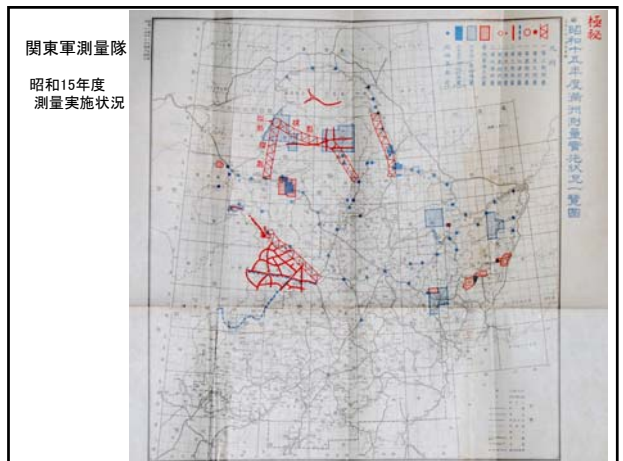
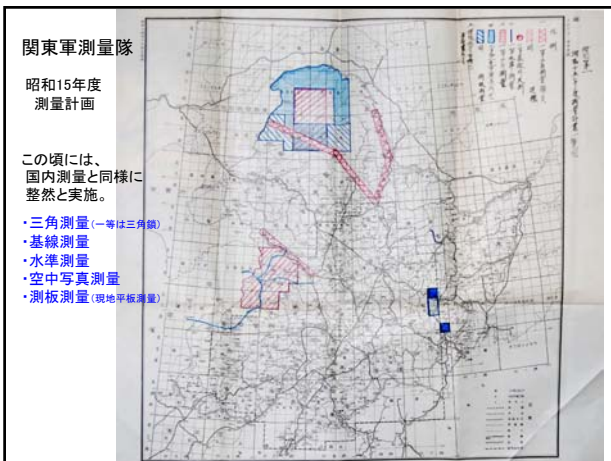
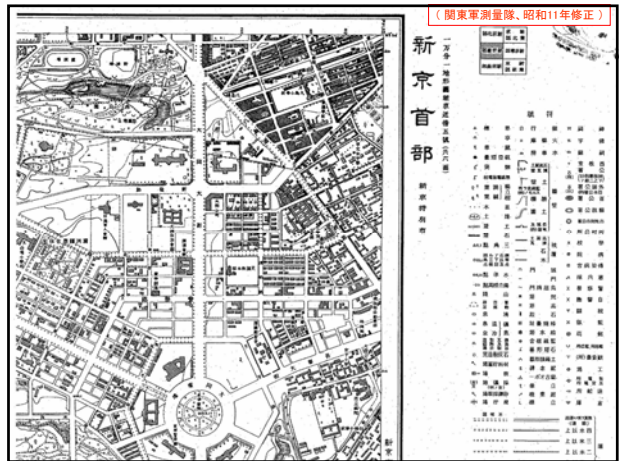
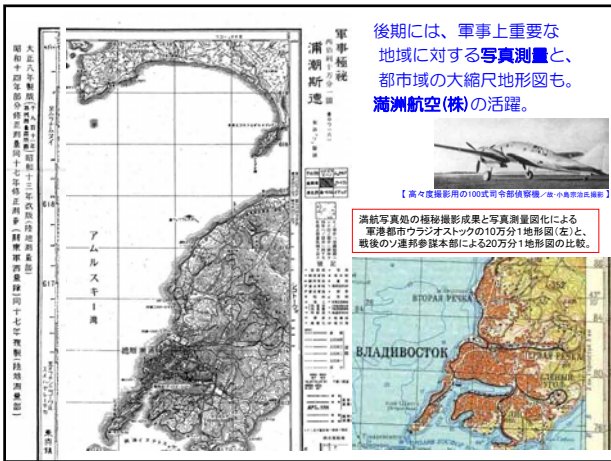
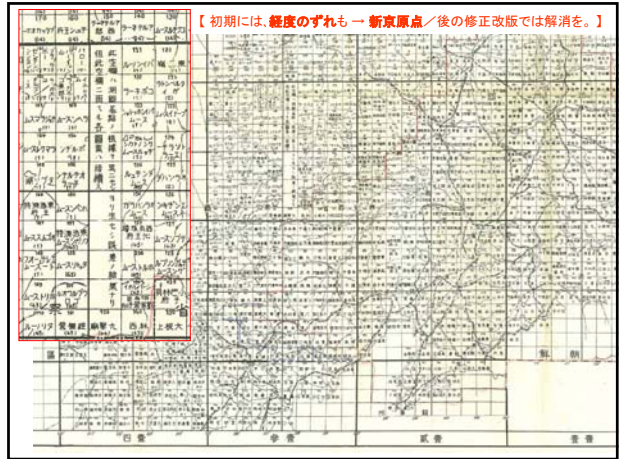
(以上、次図をご参照。)

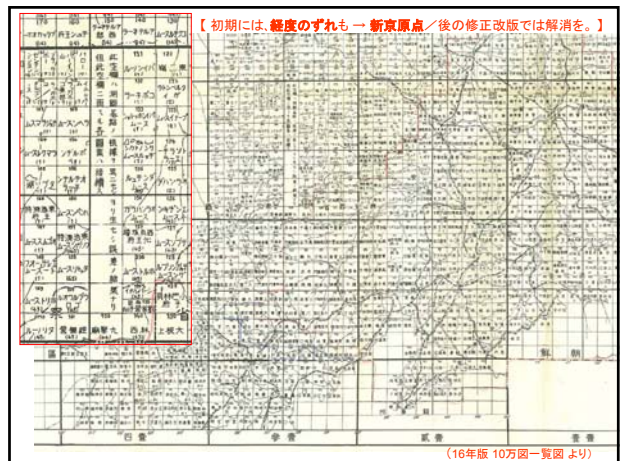
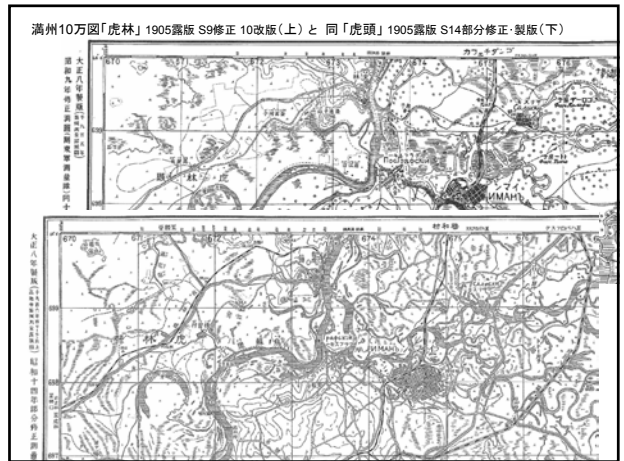
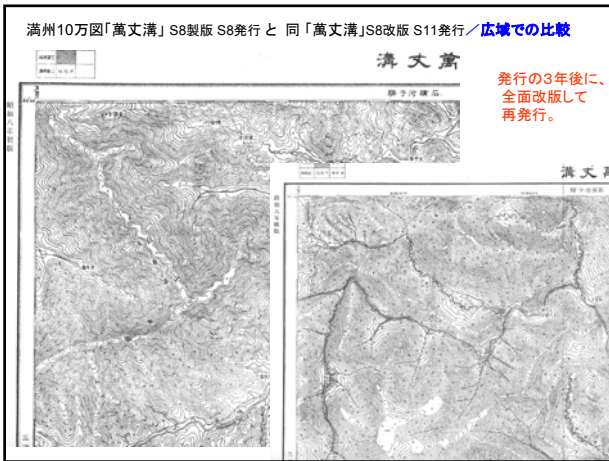
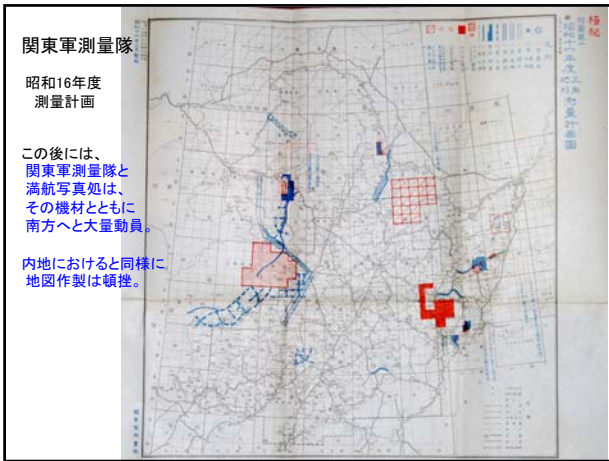
参謀本部も、外邦図の精度に大きな精粗があることを承知していた
図一覽度精圖一分万十邦外

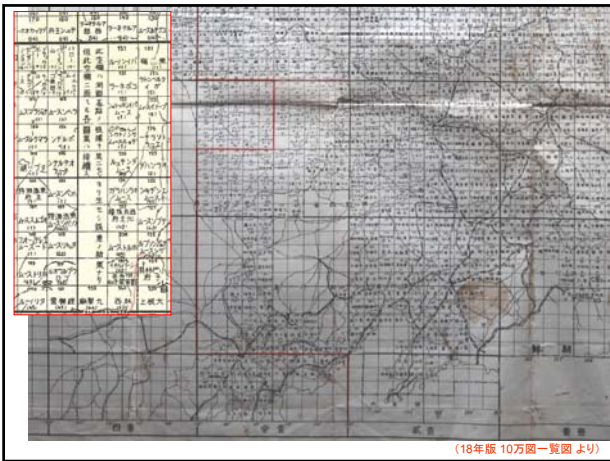


日露戦争時の秘密偵察測図の成果 (小林先生ご入手資料より)



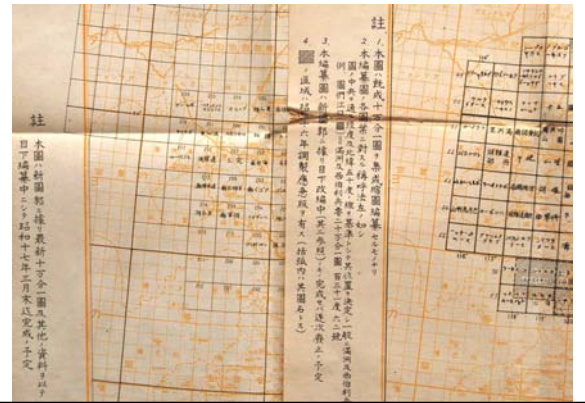






(18年版10万国一覽圖より)

満洲国の基本図、10万分1図は精粗の差が大きいため、全面更新を図り、20万国の調製も進めるが、途中で頓挫。



今日のお話し - 追加：「外邦図」にならなかった地図

<p style="text-align: center;">支那地圖目錄</p> <p style="text-align: center;">南滿洲鐵道株式會社 大連圖書館</p>	<p style="text-align: center;">凡例</p> <p>一、この目錄は、支那の歴史地理の調査研究の成果として編纂せられたものである。</p> <p>二、この目錄は、支那の歴史地理の調査研究の成果として編纂せられたものである。</p> <p>三、この目錄は、支那の歴史地理の調査研究の成果として編纂せられたものである。</p> <p>支那地圖目錄 大連圖書館</p>
---	---

【以下の図は、辻野氏蔵さん所蔵コピーより】

このような地図のほかに、清国・民国製の、5万・10万分1図も多い。次葉以下に、一例を。

支那地圖目錄

世界地圖

支那地圖

- 一、坤輿全圖
- 二、地球全圖
- 三、亞細亞東部輿地圖
- 四、皇朝直省全圖
- 五、皇朝直省全圖
- 六、支那全圖
- 七、支那全圖
- 八、支那全圖
- 九、支那全圖
- 十、支那全圖

萬直隸省地圖

(一萬分之二)

光緒三十一年五月廿五日

(京) 光緒三十一年六月八日

第一面 (五萬分之二) 民國六十八 一〇六枚

盤山集 三、平谷縣 三、上倉鎮 一、馬蘭子 二、順德園 一

潘莊鎮 一、馬伸橋 三、寶坻縣 一、大口屯 一

(熱河道) 一九枚

寬城 二、下板城 二、清河口 二、辛家屯 四、明水營門 一

城廠 一、傅家橋 二、龍關門 二、一團房 一、高家子 二

(津海道) 六八枚

遵化縣 四、喜峰口 二、灤河縣 二、平安城鎮 一、漢沽 一

馬蘭峪 三、興隆山 三、老營子 二、赤城灘 一、寧河縣 一

鹽山縣 二、牛心山 一、太平寨 二、板橋灣 一、抱樹樓 一

鹽州 二、十字平 一、義院口 二、界溝口 一、木頭樓 一

孤王廟 一、新集鎮 二、平安城鎮 二、王店子 二、永安堡 一

孤王廟 一、大泉嵐 一、岳丈子 一、三岔口 一、沙金溝 一

石白窩 一、老營子 一、牛心山 三、三屯營 二、乾溝鎮 一

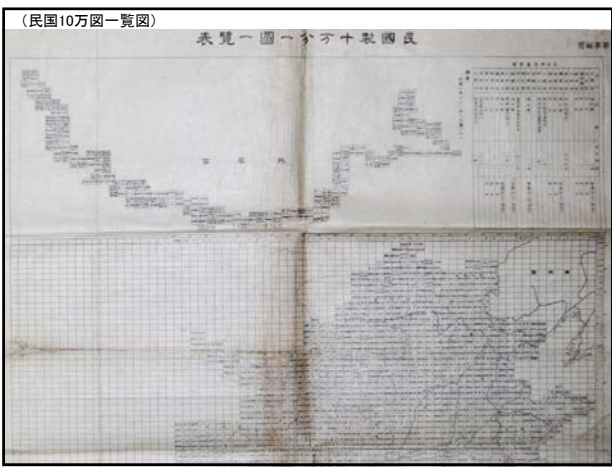
王田莊 一、沙溝河鎮 一、歡喜莊鎮 一、唐山鎮 一、王蘭莊鎮 一

玉田縣 一、小集鎮 一、墨洋河鎮 一、豐潤縣 一、廣濟鎮 一

張莊子 一、馬欄口 一

(以下、略)

<p>遼寧省(奉天省)</p> <p>奉天省明細全圖 (兵部軍務司督辦 上海 民國二) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百</p>	
奉天省	奉天省
遼寧省	遼寧省
...	...



第10回 外邦図研究会
2008年2月10日：立正大学(東京大崎)にて

今日は、ここまでです。

- 外邦図作成の経緯を記録に留める「地図一覽図」
- 陸地測量部における外邦図初刷(約2.3万枚) — その行方と現状
- 外邦図初刷(約2.3万枚)の一覽 『国外地圖目録』と『国外地圖一覽圖』
- 追補: 外邦図の精度、外邦図にならなかった地図

お聞き頂き、ありがとうございました。
この際、最後に2枚の地図を。



カラコルムでは、ここ1世紀、氷河の先端位置に変化の無いものがほとんど。: 図は、ナンガルバット南面、山頂直下の小規模な懸垂氷河

数10年前: 印度測量局図 (1934以前)による陸測外邦図 74年前: 独・5万図 1934 現代: グーグルアース画像

アメリカ議会図書館蔵日本軍航空偵察写真について

今里悟之（大阪教育大）・池中香絵（大阪大・院）・
岡本有希子（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）

1. 資料の調査と作業の経過

2007年9月に、今里と小林は、ワシントンのアメリカ議会図書館（Library of Congress）に所蔵されている日本軍の航空偵察写真の調査を行った。これに際しては、アメリカ議会図書館目録部（Cataloguing Division）、日本課（Japanese Section）の藤代真苗さんに終始お世話になった。

調査に際しては、パソコンとA4版のスキャナーを持参して、資料をスキャンし、日本に持ち帰った。大部分はサイズが大きく、分割してスキャンをおこなった。岡本がこれらの目録を作製し、さらに池中が目録のエクセルファイルを作成するとともに、撮影地点の特定も行った。撮影地点の特定には、Drazhnyuk A. A. et al. ed. (1999) *The World Atlas*. Moscow: Federal Service of Geodesy and Cartography of Russia を使用したが、写真に記入されている地名の多くはカタカナ表記であるため、それからローマ字による表記を推測し、*The World Atlas* の索引を検討した。ただしこれは、容易な作業ではなく、まだ地名の特定が出来ていないものが

多く残っている。

なお、2008年3月に小林がアメリカ議会図書館を再訪したときには、上記資料の不明な点を確認するとともに、新たに上記藤代真苗さんより紹介された資料について簡単な調査をおこなった。藤代さんは、2007年9月に私たちの関心を知り、類似の資料を集めて下さっていたのである。藤代さんのいきとどいたご配慮に感謝したい。

以下2007年9月に調査をおこなったものもふくめてまず関連資料の概要を示す。

2. 資料の概要

資料はすべてU21, 4261という番号を付され、複数の厚紙でつくられた箱に収められている。以下仮の記号をつけて順に述べる。

資料A：2007年9月に調査をおこなった資料で、内容は添付の目録に示している。「豪州西北部飛行場要覧」という表紙をもつ一連の台紙に貼られた写真にくわえ、他の地域に関する、やはり台紙に貼られた写真をとまう。

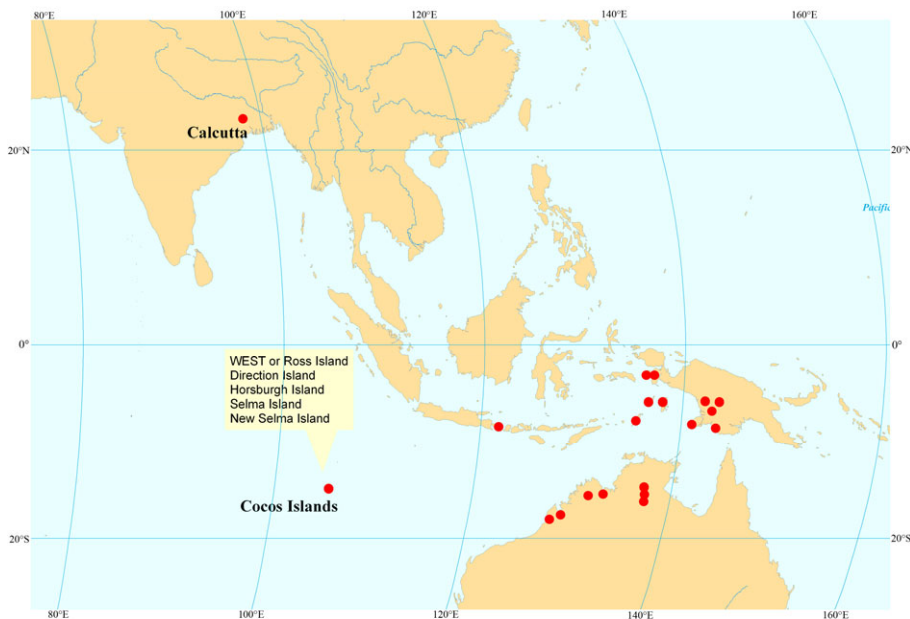


図1 撮影地点の分布

●：撮影地点

前者の表紙には中央に縦書きで「豪州西北部飛行場要覧」と記し、右には「昭和十八年二月」、左には「獨立飛行第七十中隊」と記す。32×50 cm 大の台紙の両面に写真を貼り付ける場合が多く、目録では表と裏を区別して示している。全部ではないが、表側の写真には括弧つきの番号を示している。この点から、表側と裏側では別々のシリーズの写真が貼り付けられた可能性がある。作製当初は、紐か糸で綴じられていたと考えられるが、現在はこれがなくなっており、写真が当初の順序を反映しているかどうかは、明確でない。また表紙にみえる昭和 18 (1943) 年 2 月以降に撮影されたものをかなりふくんでいるのも留意される。これらは、当初に綴じられていた「要覧」には含まれていなかったであろう。なお、撮影地点をみると、イリアンジャヤおよびその周辺の島嶼が多く、オーストラリア本土のものはすくない。この点は資料 D と比較するとあきらかである。今後は、つぎに述べる資料 B との関係性をさらに検討すべきであろう。

他方、後者はさまざまな地域の写真を台紙に貼り付けたもので、インドのカルカッタのものもふくまれる。また台紙のサイズもさまざまで、とくに Cocos 島に関するものは、「其一」、「其二」では 45×55 cm、これらの元図と考えられる 2 枚は、39.5×55 cm と大きい。また「コラカ鉱山」は、不整形で 45×40 cm である。これらのうち昭和 18 (1943) 年 2 月以降に撮影あるいは編集されたものも、のちにこのグループにくわえられたものであろう。

資料 B : 2008 年 3 月に調査したものである。やはり「豪州西北部飛行場要覧」というタイトルをもち、昭和 18 年 2 月、という日付や「獨立飛行第七十中隊」という記載も同様である。台紙に穴を空けて綴じてあるもの (ダーウィン飛行場から開始) とひもで括られているもの (カセリン飛行場から開始)、さらに綴じられていない台紙 7 枚と大型の台紙 2 枚 (ブルーム飛行場とホーランギャ飛行場の写真を貼り付ける) がある。

資料 A と資料 B との関係については、さらに資料 B の内容を精査する必要があるが、一方が他方の副本というよりは、両者は一体のもので可能性が高いと考えられる。

資料 C : 2008 年 3 月に調査したものである。やはり表紙に「豪州西北部飛行場要覧」と記し、左側に「獨立飛行第七十中隊」とあるが、右に「昭和十七年十月至十二月」とあり、資料 A や資料 B よりも早い時期のものと考えられる。最初に全 34 点の写真一覧があり、2 頁目と 3 頁目に折りたたんだ一覧図も添付している。これが納められた箱にはもうひとつ二つ折りの大型の紙があり、それにはカルカッタ (インド) の空中写真が貼られている。撮影者として渡辺中尉・阿倍中尉とあるのは、資料 A の「カルカッタ港付近」の場合 (目録参照) と同様である。

資料 D : 2008 年 3 月に調査したものである。やはり「豪州西北部飛行場要覧」というタイトルをもち、「獨立飛行第七十中隊」という記載も同様であるが、時期を「自昭和十八年十月至十二月」としている。この台紙に貼り付けられた写真の束は全部が綴じられており、最初に飛行場位置図、つぎに一覧表を載せる。全 34 枚あり、1 枚目はダーウィン飛行場、34 枚目はブルーム飛行場で、位置はいずれもオーストラリア領内と考えられる。資料 C、資料 D とともにさらに精査が必要であるが、写真の点数から、両者は基本的に同じ内容のものである可能性があるが、撮影時点も確認する必要がある。

資料 E : 2008 年 3 月に調査したものである。全 3 冊で、いずれも「ダーウィン附近爆撃目標」とタイトルを示し、「獨立飛行第七十中隊」と記すほか、昭和 18 年 2 月 20 日の日付を示す。うち 1 冊には「八部之内第四号」、もう一冊には「八部之内第七号」と記され、同じものが複数部つくられたものと考えられる。

以上、資料の概要について述べたが、資料 B ~ 資料 E については、十分な調査をしておらず、今後機会を見てさらに調査したい。なお、2008 年 2 月の第 10 回外邦図研究会で、資料 A について発表したところ、今井健三氏 (水路協会) より、海上保安庁海洋情報部図書館にも類似の航空偵察写真があるとのことで、この調査も必要である。

3. 資料 A の目録について

資料 A の写真目録をつぎのように作製した。①タイトル (軍が写真に記入しているもの)、②地名の英

語表記、③国または地域の名称、④緯度経度、⑤一致する空港名、⑥サイズ(縦×横cm)⑦撮影年月日、⑧縮尺、⑨操縦者名、⑩撮影者名、⑪高度(m)、⑫備考、である。②、③、④、⑤、については地名を特定した上で位置が判明したものについてこちらで付け加えたものである。⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫については、写真に記入されているものである。ただし、これらの情報については記入されていないものが多い。撮影年月日と操縦者・撮影者名はそろって記入されている場合が殆どであるが、半数以下しか記入されていない。

4. 撮影地点の分布と撮影の特徴

地点が特定されたものについて、地図を作製しその分布を示した。東南アジアを取り巻く形で東はニューギニア、オーストラリア、西はインドのカルカッタ、インド洋のココス諸島に偵察飛行していたことがわかる。情報が少ないため時期の特徴は捉えにくいだが、確認できる最も初期のものは昭和17年7月20日にココス諸島で撮られたものである。ココス諸島にはその後も昭和18年8月にも偵察飛行してお

り、関心の高さが伺える。

また、当時の戦況と照らし合わせると、昭和17年3月に日本軍はニューギニアに上陸し、ポートモレスビーを拠点とする連合軍と激戦状態にあった。同年7月から、ニューギニア西部のイリアンジャヤ地方および西部の諸島に中心的に偵察飛行したようである。

5. 今後の課題

以上、藤代さんのご配慮により、予想外に多くの偵察写真が現存することを知ることができた。今後は資料B～資料E、さらに海上保安庁海洋情報部図書館の類似資料を調査し、日本軍の航空偵察資料について理解を深めたい。またニューギニアにおける日本軍と連合軍の戦闘を調査中の田中宏巳先生(防衛大学校)からもご指導をいただきたい。

なお、2008年2月の外邦図研究会では、空中写真からわかる海岸の潮位から、温暖化による海面上昇についても検討が可能との示唆をいただいた。この方面からも検討の可能性をさぐりたい。

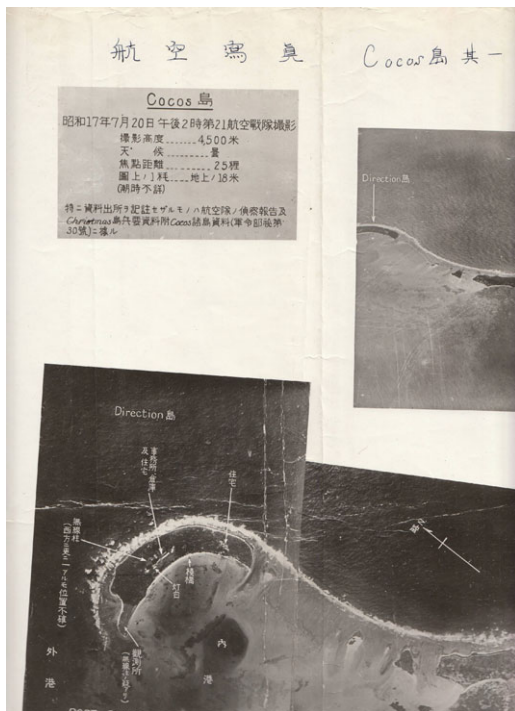


写真1 Cocos 島 其一 (左上部分)

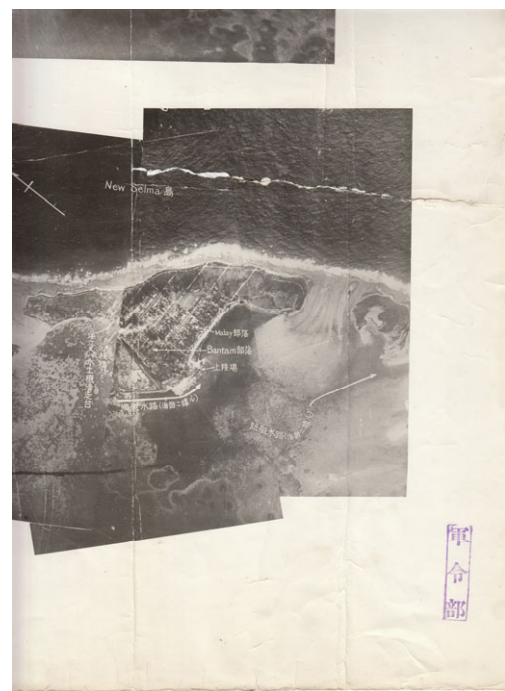


写真2 Cocos 島 其一 (右下部分)

表1 日本軍による航空偵察写真一覧

頁	裏/表	タイトル ※()内の数字は縮尺	英語表記	場所	緯度	経度	縦	横	撮影年月日	操縦者	撮影者	高度 (m)	備考
1	表	(1)ランゲール					10.3	14.7					
	表	(2)ツアル及ランゲール					10.3	14.7				1500	
	表	(3)ツアル市付近					10.3	14.7				500	
	表	(4)ケイ諸島ヌフロフ島東岸中部	Kai	カイ諸島			10.8	15.4				1500	
	裏	ドボ	Dobo	アル諸島	5度45分	134度13分	11.4	16.2	昭和17年7月28日	米田大尉	佐藤飛曹長	4500	
	裏	ドボ	Dobo	アル諸島	5度45分	134度13分	11.4	16.2	昭和17年7月30日	掛塚一飛	碓一飛	800	
	裏	ドボ	Dobo	アル諸島	5度45分	134度13分	11.4	16.2	昭和17年7月30日	掛塚一飛	碓一飛	800	
	裏	ドボ	Dobo	アル諸島	5度45分	134度13分	11.5	16	昭和17年7月28日	米田大尉	佐藤飛曹長	4000	
2	表	(5)ヌフロフ島東岸中部	Kai	カイ諸島			11	15.6				500	
	表	(6)ヌフロフ島海岸側	Kai	カイ諸島			11	15.6				500	飛行場適地
	表	(7)ヌフロフ島山鹿地方	Kai	カイ諸島			11	15.6				500	
	表	(8)ヌフロフ島南岸東部	Kai	カイ諸島			10.8	15.3				500	
	裏	本艦錨地					11.5	16	昭和17年7月31日	井上二飛曹	寺内一飛	1000	
	裏	本艦錨地					11.5	16	昭和17年7月31日	井上二飛曹	寺内一飛	800	
	裏	サウムラッキ	Saumulakki	タンニバル諸島	7度59分	131度20分	11.5	16	昭和17年7月31日	井上二飛曹	寺内一飛	300	
	裏	サウムラッキ	Saumulakki	タンニバル諸島	7度59分	131度20分	11.5	16	昭和17年7月31日	井上二飛曹	寺内一飛	300	
3	表	(9)ヌフロフ島南岸中部	Kai	カイ諸島			11	15.2					
	表	(10)ヌフロフ島南岸中部海岸側	Kai	カイ諸島			11	15.2					
	表	(11)ミミカ河付近	Mimika	イリアンジャヤ			11	15.2					
	表	(12)ミミカ東方部落	Mimika	イリアンジャヤ			11	15.2					
4	表	(13)ミミカ東方部落	Mimika	イリアンジャヤ			11	15.2					撮影少々不明瞭
	表	(14)ミミカ東方部落中央	Mimika	イリアンジャヤ			11	15.2					
	表	(15)ミミカ東方部落西岸海岸	Mimika	イリアンジャヤ			11	15.2					
	表	(16)ファルシュ岬	Tanjung Vals	ドラク島	8度23分	137度38分	11	15.2				1500	
	裏	ヤムール湖東側原始林					14.2	21.7				1000	
	裏	仮称:ヤムール湖					14.2	21.8				1000	

5	表	(17)ファルシュ岬東方海岸	Tanjung Vals	ドラク島	8度23分	137度38分	10.7	15.3						
	表	(18)ファルシュ岬西岸	Tanjung Vals	ドラク島	8度23分	137度38分	10.7	15.3						
	表	(19)タナメーラ付近	Tanahmerah	イリアンジャヤ	6度4分	140度16分	10.7	15.3						
	表	(20)タナメーラ市街及飛行場	Tanahmerah	イリアンジャヤ	6度4分	140度16分	10.7	15.3						
	裏	仮称: デイダ河						14	21.3					1000
	裏	仮称: オンバ河						14.2	22					500
6	表	(21)タナメーラ付近ゲルグ河支流	Tanahmerah	イリアンジャヤ	6度4分	140度16分	10.7	15.6						
	表	(22)タナメーラ付近	Tanahmerah	イリアンジャヤ	6度4分	140度16分	10	15						
	表	(23)タナメーラ北部	Tanahmerah	イリアンジャヤ	6度4分	140度16分	11	15						
	表	(24)ヤンブイケ付近						11	15.3					
	表	(25)ツシラー付近						11	15.5					
	表	(26)ナムローズ湖及付近沼澤地						11	11.5					500
	表	(27)ヤンブイケ付近						11	15					350
	表	(28)ツシラー付近(ギグル河及ジャングル)	Digul	イリアンジャヤ				11	15.7					350
	裏	ナビリ河						21.3	14.3					500
	裏	?						14.3	21.6					500
	裏	仮称: オンバ河ナビリ河合流地点						14	21.5					
	裏	仮称: オンバ河						14	21.7					500
7	表	(29)ナムローズ湖岸						11	15.5					500
	表	(30)ナムローズ湖南方						11	15.5					400
	表	(31)ナムローズ湖北方						11	15.5					350
	表	(32)?						11	15.5					
	裏	オンバ河三角州						14.3	21.6					1400
	裏	オンバ河口付近						14.3	21.6					1400
8	表	(33)メラウケ町	Merauke	イリアンジャヤ	8度29分	140度23分	10.7	15.2						
	表	(34)メラウケ海岸飛行場	Merauke	イリアンジャヤ	8度29分	140度23分	10.7	15.2						
	表	(35)メラウケ飛行場	Merauke	イリアンジャヤ	8度29分	140度23分	10.7	15.2						
	表	(36)メラウケ飛行場の(イ)滑走路	Merauke	イリアンジャヤ	8度29分	140度23分	10.7	15.2						
	裏	仮称: オンバ河						14.4	21.5					1200
	裏	仮称: ラカヒア湾、ナニサ岬		イリアンジャヤ				14.4	21.5					1400
9	表	Selma島		ココス諸島	12度6分	96度53分	11.5	16	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正		200	
	表	Selma島砂湿地		ココス諸島	12度6分	96度53分	11.5	16	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正		200	
	表	Selma島砂湿地		ココス諸島	12度6分	96度53分	11.5	16	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正		200	
	表	Horsburgh島		ココス諸島	12度4分	96度50分	11.5	16	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正		300	

10	表	Horsburgh島南岸		ココス諸島	12度4分	96度50分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	150			
	表	Direction島		ココス諸島	12度5分	96度53分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	100			
	表	Direction島		ココス諸島	12度5分	96度53分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	270			
	表	Direction島		ココス諸島	12度5分	96度53分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	200			
11	表	Direction島兵舎付近		ココス諸島	12度5分	96度53分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	170			
	表	Direction島兵舎付近		ココス諸島	12度5分	96度53分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	100			
	表	NewSelma島		ココス諸島	12度12分	96度54分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	200			
	表	NewSelma島		ココス諸島	12度12分	96度54分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	180			
12	表	NewSelma島		ココス諸島	12度12分	96度54分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	230			
	表	NewSelma島		ココス諸島	12度12分	96度54分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	250			
	表	NewSelma島		ココス諸島	12度12分	96度54分	11.5	16.1	昭和18年8月2日	山崎飛曹長	中島一飛正	100			
13	表	マタランカ飛行場<1/16000>	Mataranka	オーストラリア	14度39分	133度05分	17	21.3							
14	表	オールサインクーエル飛行場<1/15000>							16.6	21.2					
15	表	バーダム飛行場<1/15000>	Birdum						16.8	21.4					
16	表	バーダム南方五十軒飛行場<1/15000>	Birdum			15度32分	133度26分	24	38						
17	表	タリウォーター飛行場<1/15000>	DalyWaters			16度16分	133度22分	23	23.5					DALY WATERS(飛行場)	
18	表	オールドボンド飛行場<1/15000>							35.2	32.2					
19	表	ウインドハム飛行場<1/15000>	Wyndham			15度08分	128度19分	25	20					WINDHAM(飛行場)	
20	表	ドライズデール飛行場	Drysdale			14度58分	127度05分	20.5	24.8						
21	表	エリザベス飛行場<1/4070>							20.4	24.5					
22	表	ダービー飛行場<1/7000>	Derby			17度13分	123度40分	21.9	23.5					DERBY(飛行場)	
23	表	ブルーム飛行場	Broome		17度51分	122度15分	16.5	21.3					BROOME(飛行場)		
		Cocos島其之一		ココス諸島	12度6分	96度53分	11	16	昭和17年7月20日			4500	NewSelma島及びDirection島		
								12度6分	96度53分	21	31.5	昭和17年7月20日		4500	NewSelma島及びDirection島
								12度4分	96度50分	11	16	昭和17年7月20日		4500	Horsburgh島
		Cocos島其之二		ココス諸島	12度9分	96度49分	17	45	(編集昭和18年5月1日)				West or Ross島		
										11	16	(編集昭和18年5月1日)			Direction島など
		(Cocos島其之一下図)		ココス諸島				11	16	(編集昭和18年5月1日)			トレースペーパー付		
		(Cocos島其之二下図)		ココス諸島				11	16	(編集昭和18年5月1日)					
		コラカ礦山<1/8600>		スラウエシ島南部	4度2分付近	121度35分付近	41.5	45.7	昭和19年3月10日	山本中尉	鈴木一飛正	4300	Co=245° F=0.50°(モザイク図)		
		島礦山<1/4000>		スラウエシ島南部	4度12分	121度30分	34.3	20.1	昭和19年3月10日	山本中尉	鈴木一飛正	2000	F=0.50°		

		エルチヨ飛行場 (1/22368)				10.7	25.1	昭和19年1月11日	筒井少尉	朝倉中尉	8500	F0.377 70Fcs	
一冊		カルカッタ港付近其 之一(0.25(引伸))	Calcutta	インド	22度32分	88度20分	19.9	24.5	昭和18年11月3日	安部中尉	渡辺中尉	9200	
		カルカッタ港付近其 之二(0.25(引伸))	Calcutta	インド	22度32分	88度20分	20	24.8	昭和18年11月3日	安部中尉	渡辺中尉	9200	
一冊		メラウケ飛行場 (1/23000)	Merauke	イリアン ジャヤ	8度22分	140度26分	16	19.8	昭和19年3月10日	大原飛曹長	岩井大尉	11500	百司偵 固定 航空写真機 (K8型50粉)
		テンバサル飛行場	Denpasar	バリ島	8度39分	115度12分	11	15.2	昭和17年11月21日	長内軍曹	松田曹長	500	F0.18 2.30
		バボ市街及埠頭	Bobo	イリアン ジャヤ	2度13分	133度25分	11	15.2	昭和17年12月28日	斉藤中尉	木村中尉	300	
		バボ飛行場①	Bobo	イリアン ジャヤ	2度13分	133度25分	11	15.2	昭和17年12月18日	斉藤中尉	木村中尉	200	F0.18 260
		バボ飛行場②	Bobo	イリアン ジャヤ	2度13分	133度25分	11	15.2	昭和17年12月18日	斉藤中尉	木村中尉	200	F0.18 α30°
一冊		バボ飛行場③	Bobo	イリアン ジャヤ	2度13分	133度25分	11	15.2	昭和17年12月18日	斉藤中尉	木村中尉	200	F0.18 α30°
		バボ飛行場④	Bobo	イリアン ジャヤ	2度13分	133度25分	11	15.2	昭和17年12月18日	斉藤中尉	木村中尉	200	F0.18 α30°
		バボ飛行場付属設 備	Bobo	イリアン ジャヤ	2度13分	133度25分	11	15.2	昭和17年12月18日	斉藤中尉	木村中尉	200	F0.18 α30°
		ファックファック (ニューギニア)	Fakfak	イリアン ジャヤ	2度51分	132度26分	11	15.2	昭和17年12月28日	美濃部曹長	塩野軍曹	300	

高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について

三木和美（大阪大・院）・亀山玲子（大阪大・学生）・
金 美英（大阪大・院）・竹内加枝（大阪大・学生）・
小林 茂（大阪大）

本稿では、高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図をはじめとする資料について、その性格を簡単に検討する。目録に示すとおり、資料は全 80 点で、図式は明治 19 年製版、一覧図は明治 18 年製版のものから確認された。

本資料は、その多くに手書きのメモが残され、折り皺の深さなどから伺われる使い古された資料の状態から、保存用としてではなく、高木菊三郎氏によって作業用として使用されたものと考えられる。

次に資料の位置付けにうつりたい。内邦地図一覧図に関する網羅的な目録はまだ作成されていないが、既往研究では清水（1970、1993）がここで紹介する多くの資料を記載している。戦前の一覧図全 46 点のうち、26 点は清水に記載されている資料と一致した。

記載されていなかった 20 点の資料の一つに、『陸地測量部発行地図区域一覧表』がある。これは大正 15 年に第三種郵便物認可を受けた、『キャムピング』5 月号（昭和 3 年発行）の特別付録としてジャパン・キャンプ・クラブによって発行された地図である。「月刊『キャムピング』は登山、キャムピング、旅行、狩漁、スキー、ハイキング等アウトドア・スポーツ全般の本邦唯一の月刊雑誌」と説明が記載されている。戦前において一覧図がこのような雑誌の付録となっていたのは興味ぶかい。

また、『陸地測量部発行地図区域一覧表』（昭和 16 年 10 月修正）には、カラーの凡例が手書きされている。「要塞地帯及秘図区域」、「削除出版図製版完成」、「削除出版図停止区域」、「削除出版図印刷完成」、「軍機保護法地帯発行停止」、「全右発行未停止」の 6 凡例が記され、実際に地図上にも用いられている。

さて、全 10 点ある「測図記号」や「図式」の年紀については、「製版」「出版」「修正」「編輯製版」「測図」「印刷」「発行」「所定」が記載されている。明治 19 年から 20 年半ばまでは、参謀本部陸軍部測量局が作成し版權を所有しており、宇津木信夫・岡田栄

助・小和田順之助の 3 人が発行に携わっている。明治 20 年から大正 7 年にかけては、陸地測量部が作成し、陸地測量部が著作権を所有し、印刷兼発行者になっている。縮尺に関しては、2 万分 1、5 万分 1、20 万分 1 が確認され、図式の対象地域には廣嶋、岡山、名古屋があった。

全 70 点ある「一覧図」や「一覧表」については、「製版」「製図製版」「測図」「修正測図」「修正」「再修」「修正再版」「調製」「調」「更改出版」「印刷発行」「訂正」「現在」の年紀が記載されている。

この間、多様な一覧表（図）の発行者・販売者が見受けられ、発行者によって大きく 3 つの時期に分けることができるのではないかと考える。まず、明治 20 年から 29 年までの時期は、岡田栄助・小和田順之助・宇津木信夫を中心として一覧図が発行されていた。次に、明治 41 年から昭和 16 年頃までの時期は、小林又七（川流堂）が、昭和 20 年頃から 52 年にかけての時期は、日本地図共販（株）・（株）武揚堂・内外地図（株）が中心となって地図を販売していたと推測される。昭和 7 年・11 年に「軍事教育会」や「軍人会館出版部」が関わっていることから、次第に戦時色が強くなっていった様子がうかがわれる。戦後、大百貨店の一つである松坂屋が地図の販売代理店を務めていたことも興味深い。

参考文献

- 清水靖夫「地図一覧図について—地図資料としての—」
地図 8-2 : 17-24, 1970。
清水靖夫「地図一覧図について—陸地測量部～地理調査所発行地図の索引類—」
地図 31-4 : 2-11, 1993。

表1 大阪大学蔵 高木菊三郎旧蔵 内邦図一覽(図式も含む)

No.	タイトル	年紀	作成	発行	定価	サイズ(行×ヨコ)cm
1-01	測図記号	製版 明治19年	作成 版權所有 参謀本部陸軍部測量局			43.5×57.2
1-02	測図記号	製版 明治19年 出版 明治20年8月28日	作成 版權所有 参謀本部陸軍部測量局	発行 宇津木信夫/ 岡田栄助/小和田順之助		46.0×58.0
1-03	測図記号	製版 明治19年 出版 明治20年9月28日	作成 版權所有 参謀本部陸軍部測量局	発行 宇津木信夫/ 岡田栄助/小和田順之助		42.9×58.2
1-04	二万分一地形図図式	測図 明治19年 製版 明治21年 明治25年 印刷 明治25年11月24日 発行 明治25年11月29日 所定 明治24年	作成 大日本帝国 陸地測量部	印刷兼発行者 著作権所有 陸地測量部	8銭5厘	45.8×57.8
1-05	仮製二万分一地形図記号	製版 明治20年 出版 明治20年8月26日	作成 版權所有 大日本帝国参謀本部 陸軍部測量局	発行所 宇津木信夫/岡 田栄助/小和田順之助		44.6×58.0
1-06	輯製二十万分一図 図式	編輯製版 明治20年 出版 明治20年9月28日 修正 明治21年7月	作成 版權所有 陸地測量部	発行所 宇津木信夫/岡 田栄助/小和田順之助		46.1×57.9
1-07	山岡(五万分一地形図岡山及丸 亀一号)	測図 明治四十何年 製版 明治四十何年	作成 大日本帝国 陸地測量部			40.6×50.1
1-08	名古屋〔二十万分一帝国図 図 式〕	製版 明治何年 〔明治33年式〕	作成 大日本帝国 陸地測量部			37.7×48.3
1-09	二十万分一帝国図 図式	製版 大正6年 印刷 大正7年2月25日 発行 大正7年2月28日	作成 大日本帝国 陸地測量部	著作権所有印刷兼発行者 大日本帝国陸地測量部	25銭	
1-10	地形図 図式(廣嶋)	測図 大正何年 制定 大正6年 製版 大正7年 印刷 大正7年5月25日 発行 大正7年5月30日	作成 大日本帝国 陸地測量部	著作権所有印刷兼発行者 陸地測量部		
1-11	第一軍管地方 二万分一迅速測 図一覽表	製版 明治20年	版權所有 参謀本 部陸軍部測量局		5銭	43.8×55.8
1-12	第一軍管地方 二万分一迅速測 図一覽表	製版 明治20年 修正 明治21年1月				41.4×50.8
1-13	第一師管地方 二万分一迅速測 図一覽表 五十万分一之尺	製版 明治20年 出版 明治21年4月25日 修正再版 明治21年7月	版權所有 陸地測 量部		7銭	45.9×58.0
1-14	第一師管地方 二万分一迅速測 図一覽表 五十万分一之尺	製版 明治20年 修正再版 明治21年 再修 明治28年 印刷発行 明治28年2月28 日	版權所有 印刷者 陸地測量部	発行者 岡田栄助/小和 田順之助/河村隆實/ 宇津木信夫/川勝鏗太 郎	8銭	46.4×57.5
1-15	第四軍管地方 假製二万分一地 形図一覽表 五十万分一之尺	製版 明治20年	版權所有 参謀本 部陸軍部測量局		2銭3厘	40.4×28.0
1-16	輯製二十万分一図一覽図 五百 万分一之尺	明治20年6月	版權所有 参謀本 部陸軍部測量局		5銭 4銭5 厘	44.2×55.8
1-17	輯製二十万分一図一覽図 五百 万分一之尺	明治20年6月 修正 明治21年1月 出版 明治21年4月25日	版權所有 参謀本 部陸軍部測量局	発行所 宇津木信夫/岡 田栄助/小和田順之助	7銭	46.2×57.7
1-18	輯製二十万分一図一覽図 五百 万分一之尺	製版 明治18年 修正 明治21年1月 出版 明治20年8月26日	版權所有 参謀本 部陸軍部測量局	発行所 宇津木信夫/岡 田栄助/小和田順之助		43.0×58.0

1-19	輯製二十万分一図一覽図 五百 万分一之尺	製図製版 明治18年 出版 明治20年6月16日 修正 明治23年 更改出版 明治23年6月27 日	版權所有 陸地測 量部	発行所 岡田栄助／河村 隆實／小和田順之助／ 山下督明／宇津木信夫		45.9×58.0
1-20	輯製二十万分一図一覽図 五百 万分一之尺	製図製版 明治18年 修正 明治23年 再修 明治25年 印刷発行 明治27年12月 28日	陸地測量部	発行者 岡田栄助／小和 田順之助／河村隆實／ 宇津木信夫／川勝鏗太 郎	9銭	46.0×58.0
1-21	東海道中部〔正式〕地形図一覽 表 五十万分一之尺	製版 明治22年 出版 明治22年6月29日	日本帝国陸地測量 部			43.0×50.5
1-22	東海道中部 地形図一覽表 五 十万分一之尺〔東海道中部 二 万分一地形図一覽表 全〕	製版 明治22年 再版 明治23年 印刷発行 明治29年5月1日	印刷者 陸地測量 部	発行者 岡田栄助／小和 田順之助／河村隆實／ 宇津木信夫／川勝鏗太 郎		43.5×55.0
1-23	東海道中部 地形図一覽表	製版 明治22年 出版 明治22年6月29日 修正 明治24年 更改出版 明治24年3月31 日	陸地測量部	発行所 岡田栄助／河村 隆實／小和田順之助／ 山下督明／宇津木信夫		44.8×55.5
1-24	東海道西部及畿内近傍 二万分 一地形図一覽表 五十万分一之 尺	製版 明治24年 修正再版 明治26年 出版 明治25年1月28日 印刷 明治26年5月29日	版權所有 印刷者 陸地測量部	発行者 岡田栄助／ 小和田順之助／河村隆 實／宇津木信夫／川勝 鏗太郎	7銭	46.0×56.0
1-25	二万分一地形図一覽表 本州中 部 第四号	製版 明治34年 印刷 明治35年3月25日 発行 明治35年3月30日	著作権所有印刷兼 発行者 陸地測量 部		8銭5厘	46.0×57.5
1-26	東海道西部及畿内近傍 五十 万分一之尺	製版 明治24年 修正 明治28年 印刷 明治28年9月25日 発行 明治28年9月30日	印刷者 陸地測量 部	発行者 岡田栄助／ 小和田順之助／河村隆 實／宇津木信夫／川勝 鏗太郎		44.0×55.0
1-27	五万分一地形図一覽表 中部 第二号	製版 明治29年 印刷 明治33年3月25日 発行 明治33年3月30日	著作権所有印刷兼 発行者 陸地測量 部		8銭5厘	45.8×57.6
1-28	五万分一地形図二十万分一帝国 図 同輯製図及百万分一東亜輿 地図発行区域一覽図 〔地形図及迅速測図発行区域一 覽図〕	製版 明治42年9月 修正改版 明治43年9月	大日本帝国陸地測 量部 〔印刷兼発行者 参謀本部構内陸地 測量部〕	〔地図販売元 川流堂 小林又七地図部〕		45.2×60.0
1-29	陸地測量部出版地図目録(第37 回)	調 明治43年3月31日 印刷 明治43年3月31日	印刷者 陸地測量 部 刊行 陸地測量部	販売元 小林又七		33.0×57.2
1-30	二万分一地形図発行区域一覽図	製版 明治42年9月	陸地測量部			45.1×55.6
1-31	陸地測量部御認可 陸地測量部 御出版地図一覽表	調 明治41年6月		販売者 西東書房 七條 愷		48.0×63.5
1-32	陸地測量部御出版地図一覽表	調 明治41年5月30日		販売者 兵林館主 柴田 源左衛門		39.3×54.9
1-33	陸地測量部出版地図区域一覽図	製版 大正3年3月	印刷発行者 陸地 測量部	販売者 兵材館 柴田源 蔵／西東書房 七條愷／ 厚生堂 相澤富蔵／川流 堂 小林又七／軍事教育 会 高橋静虎／書報社 星野錫		66.0×58.8
1-34	五万分一地形図一覽表 中部 第二号 〔大正3年3月 五万分一地形図 一覽表 本州中西部及四国〕	製版 明治29年 修正 大正3年3月 印刷 大正3年3月25日 発行 大正3年3月30日	印刷発行者 陸地 測量部		7銭5厘	46.2×58.1
1-35	五万分一朝鮮地形図一覽図	製版 大正4年6月				60.1×39.4

1-36	陸地測量部発行地図区域一覧表 (一万分一・二万分一・二万五千分一地形図及百万分一東亞輿地図) 〔陸地測量部出版地図区域一覧図 五万分一地形図及諸朝鮮地形図)付二十万分一地図〕	訂正 大正7年6月		発行 朝鮮総督府土地調査局測量陸地測量部／ 販売 川流堂本店 小林又七	3銭	54.0×78.7
1-37	陸地測量部発行地図区域一覧表 〔陸地測量部発行地図区域一覧表《一万分一・二万分一・二万五千分一・地形図及百万分一東亞輿地図》〕	訂正 大正8年9月		〔販売 川流堂本店 小林又七〕		54.6×78.6
1-38	陸地測量部御発行地図区域一覧図 五十万分一・二十万分一・五万分一(朝鮮ヲ除ク) 〔一万分一 二万分一 二万五千分一 百万分一 地形図一覧(本表二分數ヲ付記セサルモノハ総テ二万分一トス)〕	改正 大正10年6月 印刷 大正10年6月1日 発行 大正10年6月5日		翻刻発行兼印刷者 武揚堂 小島棟吉		39.7×54.2
1-39	陸地測量部出版地図区域一覧図 一万分一・二万分一・二万五千分一地形図 〔陸地測量部出版地図区域一覧図 五万分一地形図及二十万分一・五十万分一・百万分一諸地図〕	製版 大正5年3月 改版 大正10年6月 修正 大正11年9月	印刷兼発行者 陸地測量部			65.5×90.6
1-40	陸地測量部発行地図区域一覧表 《一万分一・二万分一・二万五千分一地形図及百万分一東亞輿地図》 〔陸地測量部発行地図区域一覧表〕	〔訂正 大正11年4月〕		販売 川流堂 小林又七	10銭	54.7×78.7

註:〔 〕は裏面に記載されていた事項

表2 大阪大学蔵 高木菊三郎旧蔵 内邦図一覧図

No.	タイトル	年紀	作成	発行	定価	サイズ(行×ヨコ)cm
2-01	陸地測量部発行地図区域一覽表 一万分一・二万分一・二万五千分一地形図及百万分一東亜輿地図	改版 大正14年11月		陸地測量部発行地図販売店 神戸書店 神戸國太郎	10銭	54.7×79.0
2-02	陸地測量部御発行地図区域一覽図 五十万分一・二十万分一・五万分一(朝鮮ヲ除ク) [一万分一 二万分一 二万五千分一 百万分一 地形図一覽]	改正 大正15年8月 〔印刷 大正15年8月1日 発行 大正15年8月15日〕		翻刻発行兼印刷者 武揚堂 小島棟吉 地図元賣捌所 武揚堂書店 販売代理店 島田書店	[10銭]	39.7×54.3
2-03	陸地測量部発行地図目録	昭和8年9月末日現在 印刷 昭和8年11月15日 発行 昭和8年11月20日	著作権所有兼発行者 陸地測量部	印刷者 小林又七 印刷所 陸軍省構内 小林又七印刷所		26.5×19.0
2-04	陸地測量部出版地図区域一覽図 一万分一・二万分一・二万五千分一地形図、十万分一・百万分一・二百万分一諸地図 〔陸地測量部出版地図区域一覽図(五万分一地形図 二十万分一・五十分分一諸地図)〕	製版 大正15年 修正 昭和2年3月	印刷兼発行者 陸地測量部	つるや書		74.8×105.0
2-05	五万分一地形図・各種都市近郊図二十万分一帝国図及輯製図・十万分一・五十万分一・百万分一・二百万分一雜図 陸地測量部発行地図区域一覽表 〔陸地測量部発行地図区域一覽表《一万分一・二万分一・二万五千分一・地形図及百万分一東亜輿地図》〕	大正15年12月9日第三種郵便物認可 昭和3年5月1日発行(71号)5月号		発行所 東京丸ビル ジャパン・キャンプ・クラブ 〔発売 川流堂本店 小林又七〕	[10銭]	54.6×79.0
2-06	陸地測量部発行地図区域一覽表 五万分一地形図・各種近郊図 二十万分一帝国図及輯製図・十万分一・五十万分一・百万分一・二百万分一雜図 〔參謀本部陸地測量部発行地図区域一覽表《一万分一・二万分一・二万五千分一・地形図及百万分一東亜輿地図》〕	[昭和7年5月現在]		[川流堂本店 小林又七／支店 小林又七朝鮮地図部／出張店 小林又七京都出張店]	[10銭]	54.2×79.0
2-07	陸地測量部発行地図区域一覽図 五万分一・二万五千分一・一万分一地形図、三角及水準測量成果表	製版 昭和6年9月 修正 昭和7年3月 昭和7年3月末日現在	印刷兼発行者 陸地測量部	発売元 軍事教育会		109.0×78.3
2-08	陸地測量部発行地図区域一覽図 二万分一地形図・編纂図・特殊図	昭和9年9月現在 製版 昭和9年9月	印刷兼発行者 陸地測量部			109.7×78.0
2-09	陸地測量部発行地図区域一覽図 二万分一地形図・編纂図・特殊図	昭和11年3月末日現在 製版 昭和11年4月	印刷兼発行者 陸地測量部	販売元 川流堂 小林又七／軍事教育会 高橋蔵男／武揚堂 小島棟吉／成武堂 横尾民蔵／つるや 岸 他丑／軍人会館出版部		108.5×78.5
2-10	陸地測量部発行地図区域一覽表《一万分一 二万五千分一 地形図及百万分一東亜輿地図》	調 昭和12年4月		小林川流堂		53.8×78.4
2-11	陸地測量部発行地図区域一覽表(五万分一地形図・各種近郊図 二十万分一帝国図及輯製図 十万分一・五十万分一・百万分一・二百万分一雜図)	調 昭和12年4月		川流堂 小林又七	10銭	54.6×78.2
2-12	二十万分一帝国図一覽表	製版 明治39年 修正 昭和12年4月				46.0×58.0

2-13	陸地測量部発行地図区域一覽図 五 万分一・二万五千分一・一万分一 地形図 〔陸地測量部発行地図区域一覽図 編纂図・特殊図・満州国・之部〕	昭和16年9月末日現在 修正 昭和16年10月	印刷兼発行者 陸 地測量部			108.5× 76.2
2-14	陸地測量部発行地図区域一覽図 編 纂図・特殊図・満州国・之部 〔陸地測量部発行地図区域一覽表 五万分一・二万五千分一・一万分一 地形図〕	昭和16年3月末日現在 製版 昭和16年4月	印刷兼発行者 陸 地測量部			108.8× 76.3
2-15	陸地測量部発行地図区域一覽表《一 万分一 二万五千分一・地形図及百 万分一東亜輿地図》 〔陸地測量部発行地図区域一覽表 五万分一地形図・各種近郊図 二十 万分一帝国図及輯製図 十万分一・ 五十分分一・百万分一・二百万分一 雑図〕	調 昭和16年2月		川流堂 小林又七	10銭	54.5×78.2
2-16	五万分一地形図一覽表 秘 〔二万五千分一地形図一覽表／百 万、五十万、二十万及一万分一図一 覽表〕	製版昭和19年	参謀本部			54.4×76.5
2-17	北海道本州四国及九州地図一覽図 其ノ一(五万分一) 〔有明 秘 二万五千分一地形図松本 近傍十二号〕	調製 昭和20年10月 〔測図 明治43年 修正測図 昭和6年〕	内務省地理調査所 〔大日本帝国陸地 測量部〕			46.1×58.0
2-18	内務省地理調査所発行地図一覽図	昭和21年8月	内務省地理調査所		50銭	46.3×57.7
2-19	内務省地理調査所発行地図一覽図 五万分一地形図	昭和21年12月	内務省地理調査所	内務省地理調査所発行 地図元売捌所 地図共販 (株)		45.6×57.2
2-20	地理調査所 地図一覽図 五万分一 地形図 二十万分一地勢図〔二万五 千分一地形図〕	昭和23年9月	地理調査所		5円	46.1×57.3
2-21	地理調査所 地図一覽図 五万分一 地形図 二十万分一地勢図〔二万五 千分一地形図〕	昭和24年9月	建設省地理調査所		5円	46.1×57.9
2-22	地理調査所 地図一覽図 五万分一 地形図 二十万分一地勢図〔二万五 千分一地形図〕	昭和26年11月現在	印刷兼発行者 建 設省地理調査所	元売捌店 日本地図共販 (株)／(株)ぶよお堂／内 外地図(株)		43.8×57.0
2-23	地理調査所 地図一覽図／地質調査 所発行 五十分分一・五万分一・二万 五千分一地質図一覽表	昭和27年6月現在	印刷兼発行者 建 設省地理調査所	元売捌店 日本地図共販 (株)／(株)ぶよお堂／内 外地図(株)		45.9×57.9
2-24	地理調査所発行 地図一覽図	昭和29年3月現在	印刷兼発行者 建 設省地理調査所	発売元 (株)ぶよお堂		45.6×56.6
2-25	地理調査所発行 地図一覽図 五十分分一地形図／二十万分一地 勢図／五十分分一市町村界素図 〔二万五千分一地形図 附一万分一〕	昭和30年3月現在	印刷兼発行者 建 設省地理調査所	元売捌店 日本地図共販 (株)／(株)ぶよお堂／内 外地図(株)		46.2×57.7
2-26	地理調査所発行 地図一覽図 五十分分一地形図／五十分分一地方 図／二十万分一地勢図 〔二万五千分一地形図 附一万分一〕	昭和32年3月現在	印刷兼発行者 建 設省地理調査所			46.4×58.5
2-27	地理調査所発行地図一覽図 五十分分一地形図／五十分分一地方 図／二十万分一地勢図／一万分一 〔二万五千分一地形図〕	昭和34年8月現在	印刷兼発行者 建 設省地理調査所	発売元 内外地図(株)		54.0×76.5
2-28	国土地理院発行地図一覽図 五十分分一地形図／五十分分一地方 図／二十万分一地勢図／一万分一 〔二万五千分一地形図〕	昭和37年8月現在	印刷兼発行者 建 設省国土地理院			44.0×62.5

2-29	建設省国土地理院発行全国地図目録 五万分一地形図／五十万分一地方図 〔二万五千分一地形図／一万分一〕	昭和37年7月現在				45.3 × 59.3
2-30	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／二十万分一地勢図／一万分一地形図 〔二万五千分一地形図／五十万分一図〕	昭和38年3月現在	印刷兼発行者 建設省国土地理院	元売捌店 日本地図共販(株)／(株)武揚堂／内外地図(株)		46.2 × 57.9
2-31	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／二十万分一地勢図／一万分一地形図 〔二万五千分一地形図／五十万分一図〕	昭和39年6月現在	印刷兼発行者 建設省国土地理院	発売元 内外地図(株)		46.3 × 58.1
2-32	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／二十万分一地勢図／一万分一地形図 〔二万五千分一地形図／五十万分一図〕	昭和41年4月1日現在	印刷兼発行者 建設省国土地理院	元売捌店 日本地図共販(株)／(株)武揚堂／内外地図(株) 国土基本図・国土基本写真図の取扱機関 (社)日本測量協会		46.0 × 57.6
2-33	空中写真フィルム保有区域一覧図	昭和42年7月現在(昭和42年度内完了予定分を含む)	建設省国土地理院			46.0 × 57.8
2-34	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／二十万分一地勢図／一万分一地形図 〔二万五千分一地形図／五十万分一図〕	昭和44年7月1日現在	印刷兼発行者 建設省国土地理院	発売元 内外地図(株)		44.2 × 62.2
2-35	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／二十万分一地勢図／一万分一地形図 〔二万五千分一地形図／五十万分一地方図〕	昭和45年7月現在	印刷兼発行者 建設省国土地理院	元売捌店 日本地図共販(株)／日本地図共販大阪出張所／日本地図共販九州営業所		45.7 × 58.5
2-36	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／二十万分一地勢図／一万分一地形図 〔二万五千分一地形図／五十万分一地方図〕	昭和46年10月現在	印刷兼発行者 建設省国土地理院			46.5 × 57.9
2-37	建設省国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／五十万分一地方図 〔二万五千分一地形図／一万分一地形図〕	昭和47年4月現在		販売元 (株)武揚堂／販売代理店 上野 松坂屋		45.9 × 58.0
2-38	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／一万分一地形図／二十万分一地勢図 〔二万五千分一地形図／五十万分一地方図〕	昭和49年10月1日現在				58.0 × 45.9
2-39	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／一万分一地形図／二十万分一地勢図 〔二万五千分一地形図／五十万分一地方図〕	昭和50年4月1日現在				58.0 × 45.9
2-40	国土地理院発行地図一覧図 五万分一地形図／一万分一地形図／二十万分一地勢図 〔二万五千分一地形図／五十万分一地方図〕	昭和52年4月1日現在		発売元 (株)武揚堂		57.6 × 45.9

註:〔 〕は裏面に記載されていた事項

5. 学会発表

2007年日本地理学会秋季学術大会（於 熊本大学）における岡本ほか報告、2007年人文地理学会大会（於 関西学院大学）における久武ほか報告、2008年日本地理学会春季学術大会（於 獨協大学）における小林ほか報告、山本ほか報告の発表要旨およびプレゼンテーション資料を掲載する。なお、各報告の発表要旨は『日本地理学会発表要旨集』および『人文地理学会大会研究発表要旨』からの転載である。

【発表要旨の出典】

- 岡本有希子・長澤良太・今里悟之・久武哲也・小林 茂（2007）「戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について」, 日本地理学会発表要旨集 72, 59 頁。
- 久武哲也・鳴海邦匡・石橋 諭・小林 茂（2007）「総合地理研究会と皇戦会—初期地政学グループの活動—」, 人文地理学会大会研究発表要旨, 48-49 頁。
- 小林 茂・村山良之・宮澤 仁（2008）「外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題—戦前期の地域資料の活用に向けて—」, 日本地理学会発表要旨集 73, 24 頁。
- 山本晴彦・岩谷 潔・張 継権（2008）「満州気象資料のデータベース化による中国東北地区の気候変動解析」, 日本地理学会発表要旨集 73, 25 頁。

戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について
 100151 The Positioning of Aerial Photographs Taken by Japanese Military
 in Mainland China during the Second World War

岡本有希子(大阪大・院)*・長澤良太(鳥取大)・今里悟之(大阪教育大)・久武哲也(甲南大)・小林 茂(大阪大)
 OKAMOTO, Yukiko (Graduate Student of Osaka Univ.), NAGASAWA, Ryota (Tottori Univ.), IMAZATO, Satoshi
 (Osaka Univ. of Education), HISATAKE, Tetsuya (Konan Univ.), KOBAYASHI, Shigeru (Osaka Univ.)

キーワード：日本軍、中国大陸、空中写真、標定

Keywords : Japanese Military, Mainland China, Aerial Photography, Positioning

日本軍は、1928 年以降空中写真による地図作製を本格的に開始し、第二次大戦中も各地でこれを実施した。これらの写真は、大部分が終戦時に焼却されたが、一部が 2002 年 9 月アメリカ議会図書館で発見された。翌 2003 年には、このうち標定が可能と思われるもの 723 枚をスキャンして持ち帰り、この一部について中国製衛星写真と比較対照しつつ標定に成功し(安徽省五河付近)、すでに分析がこころみられている(長澤ほか、2005、岡本勝男、2007)。本発表は、さらに残されていた空中写真について、とくにその方法と撮影地域を報告する。

1. 標定の方法 空中写真に付された地名はごく簡略なため、地名辞典によりまず関係する地域を特定した。スキャンした空中写真をプリントし、これを飛行コース(東西方向)ごとにはりあわせて特徴的な地形を観察してから、Google Earthによって類似のものを探した。拡大縮小が容易なGoogle Earthでは能率的に作業を進めることができ、ひとまとまりの飛行コースの標定はほぼ一日で終了した。

2. 撮影場所 図1にそれぞれの位置、表1にひとまとまりの飛行コースの北西・南西・北東・南東隅の緯度経度を示す。緯度経度は暫定的にGoogle Earthにより読み取ったもので、今後の本格的な標定の参考にするものである。撮影地域は農村部にかぎられ、特徴的な農地パターンがみられた。またGoogle Earthにみられる湖岸線や農地パターンと比較すると、大きな変化がみとめられ、解放後の中国における土地開発の進行がうかがわれた。今後は本格的な標定をおこなうとともに、オルソ化などもすすめたい。

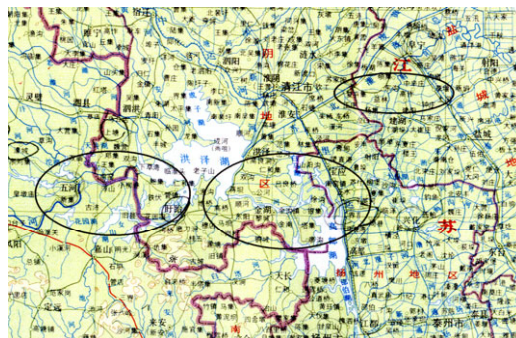


図1 空中写真の撮影地域

表1. 標定が終了した空中写真の飛行コース位置 (A~Eは飛行コースの周囲)

地域名<標定済 空中写真数:枚>	A(上:N,下:E)	B	C	D	E
五河地区(281)	33°15'16.59" 117°42'46.21"	33°16'33.52" 118°26'36.04"	32°59'01.53" 118°29'27.71"	32°56'46.13" 118°05'54.89"	33°07'37.57" 117°34'43.32"
五河南方安淮集 (41)	33°08'22.59" 117°46'41.26"	33°05'32.66" 117°55'35.11"	32°55'02.21" 117°52'50.02"	32°57'13.16" 117°44'03.74"	
界首鎮(72)	33°02'15.62" 119°00'05.82"	33°03'41.72" 119°24'30.04"	32°50'49.14" 119°17'36.93"	32°49'59.10" 119°08'37.96"	
阜寧南方(119)	33°42'01.63" 119°13'15.24"	33°41'17.60" 120°01'13.62"	33°31'06.22" 119°59'48.26"	33°33'13.86" 119°11'13.00"	
宝應西南方(124)	33°15'24.14" 118°47'24.21"	33°15'42.92" 119°21'17.04"	33°06'23.60" 119°24'52.12"	33°06'45.55" 118°38'31.50"	
宝應地区(78)	33°09'14.48" 118°43'44.81"	33°09'21.43" 119°25'55.89"	33°01'49.36" 119°25'19.32"	33°01'57.78" 118°51'17.78"	33°05'51.06" 118°43'05.50"

戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について

岡本有希子(大阪大・院)*・長澤良太(鳥取大)・
今里悟之(大阪教育大)・久武哲也(甲南大)・
小林 茂(大阪大)

2007.10.7 日本地理学会大会 熊本大学

外邦図研究プロジェクトについて

概要

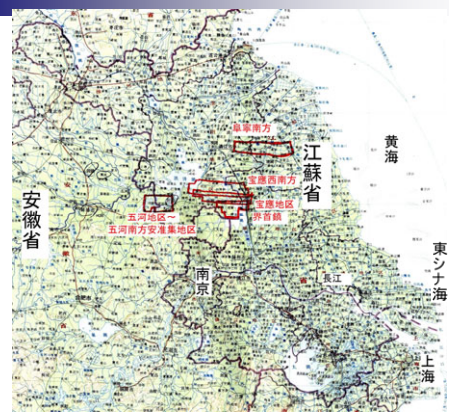
- 1945年8月まで日本が海外で軍事用・植民地統治用に作製した地図(外邦図)の全容を把握し、その作製過程を検討するとともに、新たな観点から学術資料として再生することを目的として2002年から開始された。2004年秋の日本地理学会大会でシンポジウムを開催した。
- 日本の外邦図作製の特色や、国家や「帝国」と地図作製との関係を明らかにする。
- 景観復元に利用し、地球環境の変動を追跡する資料としての可能性を探る。

2

空中写真について

- 2002年に合衆国議会図書館(ワシントンD.C.)で旧日本軍撮影の中国の空中写真が約2000枚所蔵されていることが判明(久武・今里)。
- 翌2003年、これらの空中写真のうち標定が可能と考えられるもの723枚をスキャンし(長澤・今里)、日本に持ち帰った。この一部については標定に成功し、すでに分析がころみられている(長澤ほか、2005)。
- 縮尺は約2万分の1で撮影されている(ツアイス社製RMLP20)。

3



標定を終えた地域

4

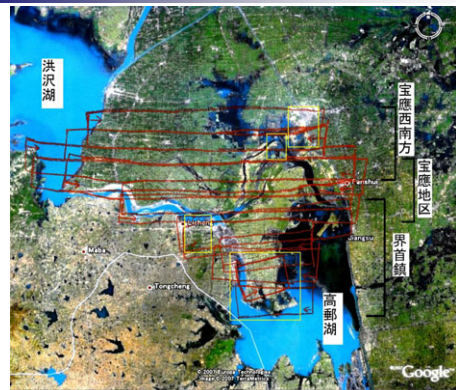
これまでの標定作業の結果(安徽省・江蘇省)

- 五河地区 No.9~289 計263枚標定完了(2005)。
- 五河南方安准集 No.137~161 計42枚標定完了(2005)。
- 界首鎮 No.28~110 計72枚標定完了。
(100~114の計16枚は未完 ※110は2枚)
- 阜寧南方 No.1~47, 23~59, 106~141 計120枚標定完了。
- 宝應西南方 No.38~161 計119枚標定完了。
- 宝應地区 No.10~87 計78枚標定完了。
⇒計694枚が標定完了(723枚中)。

方法

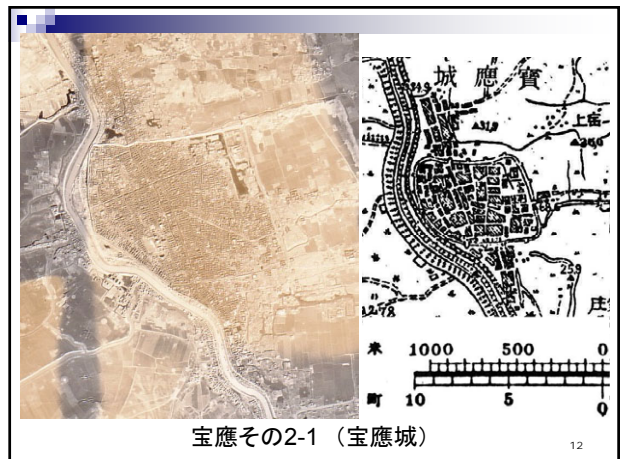
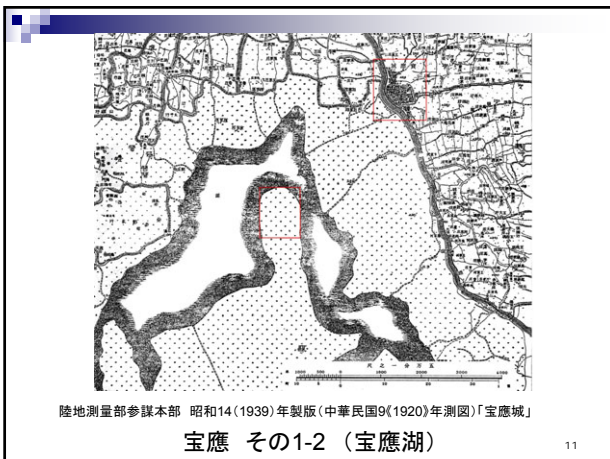
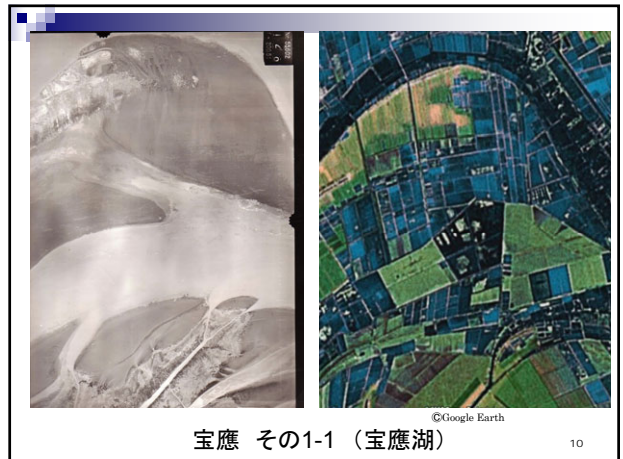
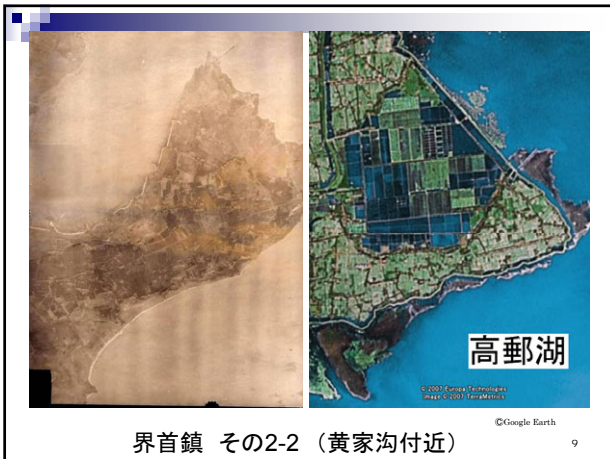
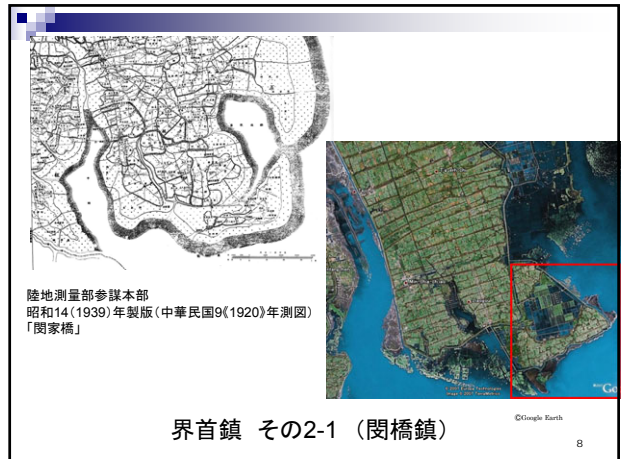
- ランドマーク(水辺、河川、灌漑水路、街、大きな道 など)を目印に © google earth と照らし合わせて標定。

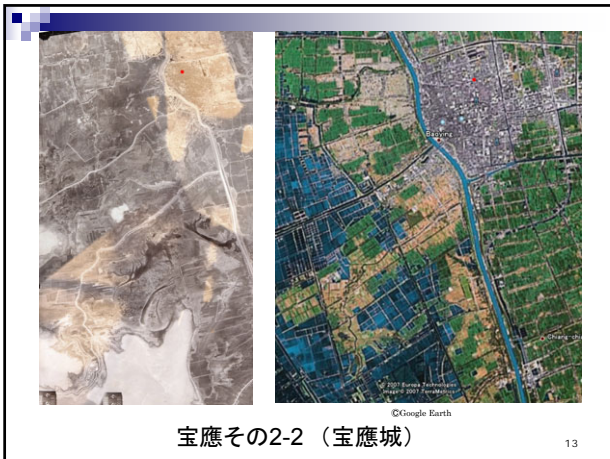
5



界首鎮～宝應地区～宝應西南

6





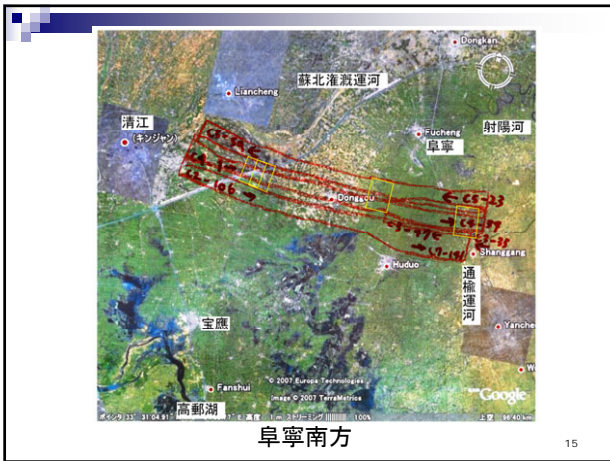
宝應その2-2 (宝應城)

13



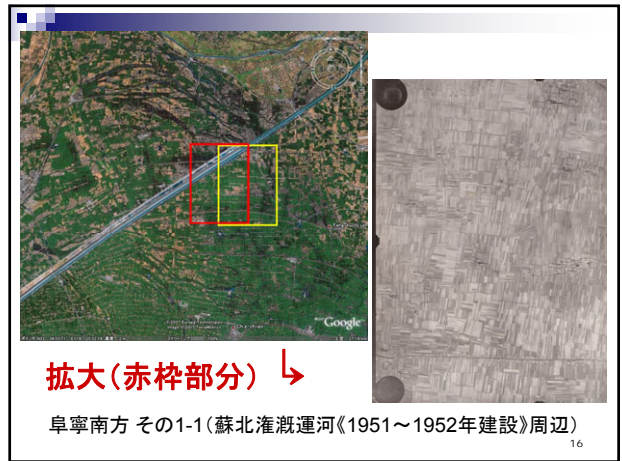
宝應その2-3 (宝應城)

14



阜寧南方

15



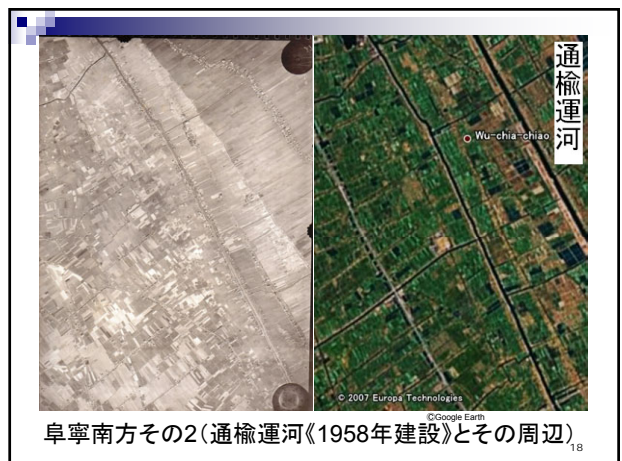
拡大(赤枠部分) ↓

阜寧南方 その1-1(蘇北灌溉運河《1951~1952年建設》周辺)

16



阜寧南方 その1-2(蘇北灌溉運河周辺、前項黄枠部分)



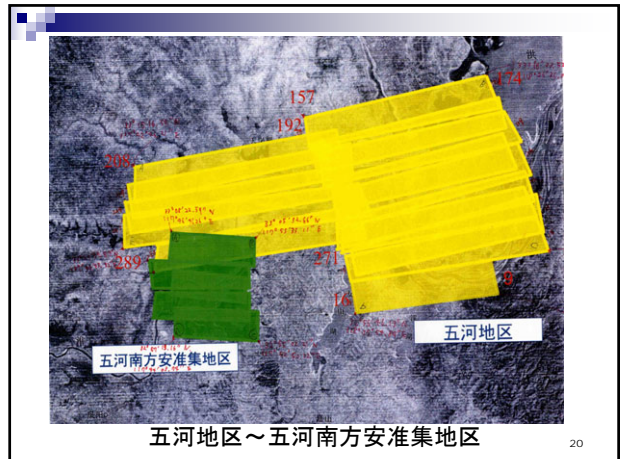
阜寧南方その2(通榆運河《1958年建設》とその周辺)

18



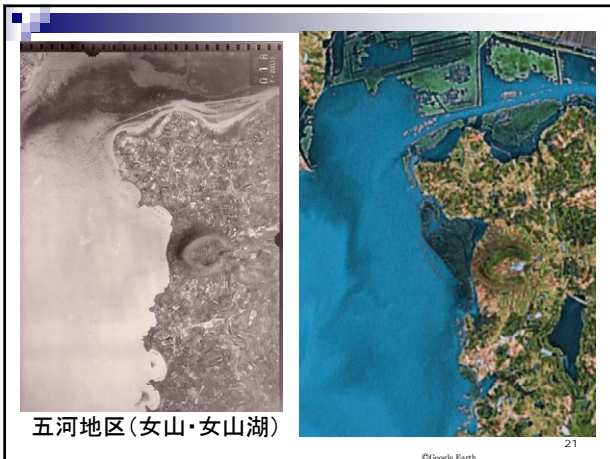
阜寧南方 その3 (射陽河とその周辺)

19



五河地区～五河南方安准集地区

20



五河地区(女山・女山湖)

21

おわりに

- 空中写真の標定は、©Google Earthを利用することで容易になる。
 - 縮尺を自在に変えることができるため。
 - 空中写真を手に入れた当初は、標定が成功するとは考えられていなかった。
 - 五河地区の標定では、©Google Earthが利用出来なかったため、作業が難航した。
- 多数の灌漑水路の建設や、湖岸や湿地の干拓による耕地の拡大、それらによる土地区画の大きな変化が確認できた。
- 市街地や集落の規模拡大を確認することができた。
 - 改革開放政策後の土地開発の進行をうかがうことができる。
 - 大きな道や水路、河川、地形などには変化がなかったため、標定を行うことができた。
 - 標定を行い、地域を特定することで、景観の長期的な変遷をモニターできる可能性。

今後の課題

- 今回空中写真の標定を行った地域における土地利用や集落に関する先行研究は現在調査中。
- 今回の空中写真の標定では©Google Earthを用いたが、標定を行った地域は農村部であり、画像の解像度が低い。解像度の高い画像を用いて、より詳細な比較対照を行いたい。(五河地区については、すでにランドサットの画像を用いて比較対照が行われた《長澤ほか、2005》)。

地名や土地利用についての調査において、
金美英さん(大阪大学・院)にご協力いただきました。
心から感謝を申し上げます。

22

総合地理研究会と皇戦会—初期地政学グループの活動—

The Early Phase of Japanese Geopolitik School: The Relation between the Sogo-chiri-kenkyukai and the Kosenkai

久武哲也(甲南大学[故人])・鳴海邦匡(大阪大学)・石橋諭(大阪大学・院)・小林茂(大阪大学)*

HISATAKE Tetsuya (Konan University), NARUMI Kunitada (Osaka University),

ISHIBASHI Satoshi (Grad.Stud., Osaka University), and KOBAYASHI Shigeru (Osaka University)

キーワード：地政学、戦争、軍、総合地理研究会、皇戦会

Keywords: Geopolitik, War, Military, Sogo-chiri-kenkyukai, Kosenkai

演者らは、これまで外邦図の研究に従事し、その過程で近代地理学と戦争、あるいは地理学者と軍隊の問題に関心をふかめてきた(『外邦図研究ニューズレター』1~4, 2003~2006)。とくに今日大学に所蔵されている外邦図の来歴を追跡するうちに、第二次世界大戦末期に参謀本部を中心に組織された「兵要地理調査研究会」の活動について、元大本営参謀、渡辺正氏が所蔵されてきた資料を検討することとなった(渡辺正氏所蔵資料集編集委員会 2005)。この研究会は、東京在住の地理学者を中心に、兵要地誌的な調査・企画業務をおこなった臨時委員会とでもいうべきもので(久武, 2005)、日本本土での連合軍に対する戦争にそなえて地理的情報を整備することを主目的としていた。またこの研究会には、京都大学を中心とする地理学者も参加していたが、彼らは他方で「総合地理研究会(総合地理研究会)」を組織し、軍との関係を別のかたちで強化していたことはよく知られている。地政学を標榜し、イデオロギー的な活動もおこないつつも、並行して秘密の調査・企画活動を続けていたのである。

この二つの「研究会」についてはなお検討すべきことが多いが、主要な一次資料が刊行された「兵要地理調査研究会」に対して、とくに「総合地理研究会」については、活動の全容を示す資料はまだ発見されているとはいえ、組織や財政基盤、さらには軍との関係などについて多くの不明な点がこのようにされている。京都大学・大学文書館に最近架蔵されることになった室賀信夫氏の個人資料は、「皇戦会関係書簡」(1939-1942)、「総合地理研究会関係原稿」(1939-1940)、「皇戦地誌に関する意見」(1940年)をふくみ(松田 2005)、これらにアプローチする手がかりを提供している。本発表では、その予察的な分析の結果を紹介する。

1. 室賀信夫氏の個人資料 故室賀信夫氏(1907-1982)は、京都大学地理学教室の講師、助教授をつとめ、1946年の辞職後も地理学史の研究に従事した。その古地図、地理学史関係コレクションは、現在京都大学図書館に架蔵されている。これに対し上記資料が含まれる個人資料は、講義録や書簡、論文別刷り、原稿、ノートなどで構成されている。演者らが閲覧し検討を開始しているのは、そのうち書簡と原稿で、従来知られていなかった初期の総合地理研究会の活動および皇戦会との関係を示している。

2. 皇戦会 皇戦会は、陸軍将校高嶋辰彦(1897-1978)が組織した団体で、参謀本部嘱託が職員となっていた「国防研究室」と密接な関係をもち、とくに仲小路彰(1901-1984)を中心とする著作活動と小牧実繁(1898-1990)らの地政学グループの活動を援助したとされている(藤田 1981)。その開始は1939年という(野島 2006, 304)が、さらに検討の余地がある。仲小路らは戦争文化研究所から雑誌『戦争文化』とともに多数の書物を刊行しており、高嶋はこの軍による買い上げを手配するとともに、皇戦会を通じて財政的な援助もおこなっていたと考えられる。また高嶋自身も戦争文化研究所から書物を刊行している。

注目される皇戦会の財政基盤は、地政学グループとの連絡にあたった陸軍将校の間野俊夫によれば、高嶋が大阪・東京の商工会議所の「理事者」に要請し、とくに関西経済界から援助をうけることにより確立された。そのため、大阪商工会議所の理事が皇戦会の監査役になっていた(間野 1981)。また間野によれば、高嶋の意図は「欧米のアジア侵略の意図と戦略をつき、アジア解放の聖戦を強調し、思想戦の強化を計ることにあった」とされる。この意図と総合地理研究会の活動との関係が注目される。なお、高嶋の

著作(1941)を検討すると反ユダヤ的傾向が強い。

3. 皇戦会と総合地理研究会との関係 現在まで閲覧できた室賀信夫氏の個人資料に含まれる書簡の中で、もっとも注目されるのは、上記間野俊夫より1939年7月28日発信と推定されるもので、皇戦会の財政的な基礎が確立されたので、「久しくご不自由をかけし研究費も貴殿に対しては乍些少月額金壹百圓也毎月末に御送附致すことゝ定め」と述べている。これは、それまで研究を依頼しても長期間経費が支払われなかったことを示している。またこの送金は定額であるところから、室賀氏個人にあてた謝金的な性格もあわせもっていたことをうかがわせる。

もう一つ注目されるのは、皇戦会から1940年1月12日に発信された、「皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや」について月末までに原稿提出をもとめるもので、これに対応して、1月27日にひらかれた研究会のメモもみられ、柴田孝夫はじめ、関係者の意見が簡略に書きとめられている。「通称『吉田の会』による地政学関連史料」(『空間・社会・地理思想』6, 59-112, 2001)に収録された「皇戦地誌に関する意見」(74-89, 1940年)は、あきらかにこれによって作製されたもので、依頼に応じて各種レポートが提出されたことがあきらかである。他の関連原稿でも、こうした依頼をメモしているものが一部みとめられる。

その他の書簡で注目されるのは川上健三からのもので、彼が総合地理研究会と皇戦会のあいだを調整しており、その京都側の窓口は室賀氏であったことがあきらかである。

さらに関心を引くのは、提出されたレポートの内容が、参謀総長はじめ陸軍の幹部に対し、高嶋や川上によって紹介されたことが報告されている点である(1940年1月30日発信および同2月22日発信)。これらでは高嶋がレポートの内容を高く評価したことが強調されている点も留意される。

このような点からすると、このころの総合地理研究会の役割は今日でいえばシンクタンクのようなものであったことが推測される。上記1940年1月30日発信のものである、室賀氏の「印度支那半島侵略史」(これはあきらかに上記「通称『吉田の会』による地政学関連史料」に収録された、「印度支那半島に於る英佛の侵略とその政策」1939年12月[67-73]に対応している)が紹介されたことが報告されている。インドシナへの進駐が意識されていた当時は、軍事情報以外にこのような歴史叙述も求められていたこ

とを示すといえよう。

4. 今後の研究に向けて 以上室賀氏の個人資料に含まれるいくつかの書簡や資料の検討結果を示した。すでに上記「通称『吉田の会』による地政学関連史料」が刊行されているとはいえ、これらは資料が作製された状況や経過に関する情報を欠いており、またそのことは解題(水内2001)にも反映している。室賀氏の個人資料にみられる書簡や原稿、メモは、こうした情報を提供するだけでなく、活動資金の出所、それに対する軍関係者の思惑など言説分析をこえる内容をもっている。この点で、さらに整理と分析をくわえる必要があろう。

これに向けて、とくに必要なのは、すでに松田清京都大学教授によって準備されている資料目録をさらに精緻なものとし、関係資料の全容を把握するだけでなく、それをクロノロジカルに整理し、画期を検出して、重要なものについては刊行していく必要があろう。それによって、久武(2005)がこころみた二つの研究会の特色の把握を深化させるとともに、すでにおこなわれている小牧実繁の著作の分析(柴田2006)についても、その形成に於ける室賀氏の役割など、重要な局面に迫ることができると考えられる。

末尾になるが、資料の閲覧に便宜をはかっていただいた、松田 清先生・西山 伸先生(京都大学)に感謝したい。

文献

- 柴田陽一 2006. 「小牧実繁の『日本地政学』とその思想的確立」『人文地理』58, 1-19.
- 高嶋辰彦(1941)『世界史の真相』陸軍士官学校記事編集部.
- 野島芳明 2006. 『昭和の天才仲小路彰』展転社.
- 久武哲也 2005. 「『兵要地理調査研究会』について」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科地理学教室, 5-19.
- 藤田 清 1981. 「皇戦会と高嶋さん」森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』森晴治(福岡市), 36-42.
- 松田 清 2005. 「室賀信夫氏個人資料の寄贈」『京都大学大学文書館便り』8, 5-6.
- 間野俊夫 1981. 「高嶋さんと総力戦」森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』森晴治(福岡市), 70-75.
- 水内俊雄 2001. (解題)「通称『吉田の会』による地政学関連史料」『空間・社会・地理思想』6, 59-63.
- 渡辺正氏所蔵資料集編集委員会 2005. 『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科地理学教室.

総合地理研究会と皇戦会 —初期地政学グループの活動—

久武哲也(甲南大学[故人])
鳴海邦匡(大阪大学)・石橋諭(大阪大学・院)・
小林茂(大阪大学)

1

外邦図研究

外邦図の作製過程へのアプローチ
外邦図の目録作製:東北大・京大・お茶大
終戦から戦後の外邦図の移転と収蔵過程の
研究
兵要地理調査研究会の役割が大きい

→『終戦前後の参謀本部と陸地測量部:渡辺正
氏所蔵資料集』の刊行(2005)

2

兵要地理調査研究会

1944年12月～1945年1月に大本営参謀、渡辺正
少佐より多田文男東大助教授組織化の打診
辻村太郎・田中啓爾など関東の地理学者が中心
京大の地政学グループも参加
日本本土での連合軍に対する戦争にそなえて地
理的情報を整備することを主目的としていた

久武哲也(2005)『『兵要地理調査研究会』について』

3

総合地理研究会(総合地理研究會)

京大の小牧實繁(1898-1990)・室賀信夫(1907-1982)を中
心とする

1939年3月に発足(『総合地理研究会趣旨』1940)

京都大学の近くの吉田に民家を借りて研究資料を蓄積
1945年8月以降に解散

活動の内容はよく知られていない

村上次男(1999)『日本地政学の末路』……唯一の当事者
の証言、ただし村上は1942年春以降に総合地理研究会
に参加→初期の活動はとくによく知られていない

4

室賀信夫氏の個人資料の 京大文書館への収蔵

室賀氏の資料

1. 古地図・地理学史関係資料(室賀コレクション)→京大図書館
2. 個人資料→京大文書館に収蔵、目録の作成
地政学講演原稿(1943)／総合地理研究会関係原
稿(1939-40)／皇戦地誌に関する意見(1940)など

松田清(2005)『室賀信夫氏個人資料の寄贈』 Kyoto U.
Archives Newsletter, 8, pp. 5-6.

5

皇戦会

陸軍将校高嶋辰彦(1897-1978)が組織した団体

①仲小路彰(1901-1984)を中心とする活動(戦争文
化研究所による著作・出版活動)

②小牧実繁らの地政学グループの活動
を援助した

資金は関西財界から

その理念:「欧米のアジア侵略の意図と戦略をつき、
アジア解放の聖戦を強調し、思想戦の強化をは
かる」

藤田清(1981)『皇戦会と高嶋さん』／間野俊夫(1981)『高嶋
さんと総力戦』

6

高嶋辰彦の略歴

1997年生まれ
1918年陸軍士官学校卒業(銀時計下賜)
1925年陸軍大学校卒業
1936年参謀本部部員
1937年内閣情報部情報官その後すぐに大本営陸軍参謀
第一部戦争指導班班長
1939年参謀本部戦史、総力戦研究課長
1940年12月台湾歩兵第一連隊長
1941年第十六軍(ジャワ攻陥)高級参謀兼第三艦隊参謀
1943年第三軍(在満州牡丹江)参謀長
1944年12月第十二方面(東京)軍参謀副長、のち参謀長
「年譜」(森晴治編『雪松 高嶋辰彦さんの思い出』1981)

7

皇戦会と総合地理研究会

総合地理研究会より皇戦会にレポートを提出
皇戦会より資金援助
両者のあいだには間野俊夫(陸軍将校)と川上
健三(京大地理1933年卒)が介在
川上は藤田清とともに参謀本部嘱託として
「国防研究室」(青山四丁目)に勤務。これが
廃止され、1942年3月に「総力戦研究所」嘱託
となる
室賀資料の川上健三書簡(1942年2月4日など)

8

総合地理研究会のレポートと皇戦会

総合地理研究会のレポートは、高嶋や川上が内容を
参謀本部の幹部に紹介

川上書簡(1940年1月31日など)

その内容

すでに一部が「通称『吉田の会』による地政学関
連資料」(2001年)に紹介されている。

現地の情報にもとづいた軍事的なレポートある
いは国際関係の理解にもとづいた戦略的な提言と
いうより、歴史的経緯や立地の説明

その一例→日本軍の南部仏印進駐

9

仏印進駐と室賀レポート

1939年12月「印度支那(半島に)於る英仏の侵略[とその
政策]」(1937年12月起草)→皇戦会

1940年5月23日「『欧州戦乱に対処するタイ国の軍事経
済上の指導概要』への卑見」投函(参謀本部嘱託より
川上健三を通じて依頼)

1940年6月「日泰和親条約の締結と仏印問題につきて」
提出→皇戦会

1940年6月17日、フランスがドイツに降伏

1940年7月「南洋華僑の一考察」→皇戦会

1940年9月23日、日本軍が北部仏印に進駐

1940年12月28日「シンガポールの軍事地理」小牧に提
出→皇戦会

1941年6月18日「西貢港の地政学的位置に就いて」稿了
→皇戦会

1941年7月28日、日本軍が南部仏印に進駐

10

南部仏印進駐の準備と室賀レポート

フランスのドイツに対する降伏(1940年6月)

タイの仏印攻撃(1940年11月)

→両者を調停しつつ、南部仏印に航空基地・海軍基地を設定、ま
たこれを警備する機関の設置を計画(1941年1月に方針決定)

室賀レポート(「シンガポール」・1940年12月、「西貢港」・1941年6
月)は、それぞれ要地の歴史的背景と立地について述べる。ま
た日米開戦を前提としながら、日本中心の南進論の枠組みで
南部仏印進駐の必要性を力説。

南部仏印進駐はアメリカの参戦をうながすという懸念については、
「米国の参戦は米国自身の事情によって決定す」と、その回避
などは考慮しない。

日米関係および日米戦争に関する「地政学」は展開していない
軍の内部からと思われるような秘密情報はほとんど含まれていな
い

アジア歴史資料センター資料「対タイフランス領インドシナ国策決定文書
／1仏印泰処理要項」 RC: B02032438600

11

皇戦会の資金と影響力の低下

高嶋辰彦の台湾転勤(1940年12月)

間野俊夫の総力戦研究所への転出(1942年3月)

→皇戦会に軍人がいなくなり、軍との関係は個
人的なつてをたよって

→皇戦会の資金力も低下(地図作製の費用が
負担できない)

川上健三書簡(1942年10月27日)

→他の資金源の模索

12

総合地理研究会と皇戦会(結論)

1. 最初に訂正: 久武(2005)では総合地理研究会に高嶋らを通じ軍の資金が提供されたとしたが、これは誤りで、このルートでは軍からの直接の資金提供はなかった。
2. 総合地理研究会のメンバーと参謀本部の幹部との直接的な接触は、皇戦会を通じてはなかった。高嶋や川上を介した関係
3. 皇戦会は高嶋個人の尽力によるところが多く、その台湾転勤(1940年12月)とともに活動が停滞していった→1942年以降は急速に活動が低下
4. 室賀レポートの位置づけ: 歴史的背景と立地中心の報告で、日本の軍事行動を正当づけるもの
その根拠となった資料はほとんど示されないが、欧米人の研究を広範に参照した可能性がみとめられる。(野間三郎書簡、1939年8月、関沢秀隆書簡、1940年10月)

13

兵要地理調査研究会と総合地理研究会

兵要地理調査研究会

さまざまな大学の関係者、研究者より構成され自然地理学者中心

軍事的に必要と考えられる地理情報の収集と提示

資金(謝金)は直接軍から

終戦直前に臨時的に活動

総合地理研究会

ひとつの大学の卒業生でしめられ、人文地理学者中心

日本の軍事行動を正当づける議論を展開し、その軍事的意義はうすい

資金は民間から

シンクタンク・著述集団として活動

14

外邦図との関係

皇戦会は、総合地理研究会にほとんど秘密の外邦図を提供しなかったと考えられる: 間野俊夫が苦勞して手に入れた南方地図を提供(川上書簡、1942年?月25日) / 室賀よりバンコクでの地図の購入を依頼されたができない(関沢秀隆書簡、1940年10月)

逆に皇戦会が地図の借用を申し入れている(川上書簡、1941年10月8日、1942年?月25日)

→地図が提供されたのは皇戦会以外のルートで?

ただし中国の地図は多色刷りの航空図(村上、1999)

15

外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題

——戦前期の地域資料の活用に向けて——

100023

Making databases of maps and aerial photographs of Asia-Pacific areas prepared

by former Japanese military and colonial governments

小林茂(大阪大)、村山良之(山形大)、宮澤仁(お茶の水女子大)

Shigeru KOBAYASHI (Osaka Univ.), Yoshiyuki MURAYAMA (Yamagata Univ.), Hitoshi MIYAZAWA (Ochanomizu W.U.)

キーワード: アジア太平洋地域、日本軍、地図、空中写真、データベース管理

Keywords: Asia-Pacific areas, Japanese military, Maps, Aerial photographs, Database management

演者らは、1945年8月まで旧日本軍や植民地政府がアジア太平洋地域について作製した地図(外邦図)の目録(東北大・京大文・お茶大所蔵図)を作成するとともに、やはり地域資料である空中写真にも関心をおこなってきた。これらは、作製・撮影以後60年以上を経過し、この地域の景観変動を追跡するに際し、ベースラインとしての価値をもつ可能性が大きいからである。また上記目録を基礎に、データベース科研により、東北大学の外邦図の画像データベースを構築してきた。本発表では、その過程で判明した課題を報告し、解決の方策を考えてみたい。

1. 外邦図と空中写真の所在 外邦図は第二次世界大戦終結直後に大量に焼却されたが、日本にはいくつかの大学、国立国会図書館、岐阜県図書館のコレクションのほか、陸地測量部旧蔵分があり、全2万数千種類に達すると考えられる。また海外では、アメリカ議会図書館のほか、いくつかの大学図書館、大英図書館などが収蔵しており、これらは第二次大戦後の接収によるものが大部分とみられる。空中写真も終戦時に焼却されたが、アメリカ国立公文書館が収蔵するもののほか、アメリカ議会図書館で演者らのグループが発見したものが知られている。その量は少なく、3万枚程度と考えられる。ただし、外邦図・空中写真とも、今後中国やロシアなどで発見される可能性は大きい。

2. 外邦図の画像データベース化 すでに60年以上を経過し一部で劣化がはじまっているため、外邦図のデジタル画像化は保存と利用の両面から要請された。地図資料の画像を含むデジタルアーカイブは前例に乏しく、書誌情報(目録)の項目設定から画像の解像度に至るまで試行錯誤を経てその方法を決定した。現在は、取得画像から解像度を落とすものを書誌情報とともにウェブ上に公開するという様式をとっている。主要所蔵先の所蔵状況もあわせて表示していることも特徴の1つである。

地図検索には、書誌情報からだけでなく、索引図による方法が有効である。現在まで図郭に緯度経度の記入のあるものについては、ウェブ上で索引図からの検索が可能となっている。ただし、緯度経度の記入のないもの(中国大陸の地形図にはこれが多い)については容易に索引図が作成できず、大きな課題となっている。Google Earthの画像と比較対照しつつ一点一点緯度経度を確定する方法、地理院や国会図書館作成索引図の利用等も考えられるが、地図の精度も関連し、検討すべき点が多い。

3. 外邦図のウェブ上での公開 データベース科研で作製したものは、公開するのが原則となっているが、これにもいくつか課題がある。外邦図の性格からしても、そのデータベースが海外で閲覧されるのは当然であるし、それにむ

けたサービスが必要である。利用案内や目録、索引図を外邦人でも容易に参照できるような配慮が不可欠と考えられるが、これをどのようにおこなうかは、検討を要する。現在のデータベース科研の枠組みで、これを実現することは容易ではなく、外国人の利用を前提とした本格的な公開の大きな障害になっている。

また、外邦図が図示する地域は、現在はそれぞれ主権国家に属している点にも留意が必要である。このなかには、地形図など大縮尺図を軍や研究機関以外で使用することを認めていない地域があり、すでに古地図とよんでよい外邦図でも、これを無条件に公開できるか、とする慎重論がある。また外邦図には、日本の植民地政府や陸地測量部が当時の法律に従いながら作製したものもあるが、日本軍の非合法的な秘密測量によるもの、さらに外国製の地図を一部改変して複製したものも少なくない。とくにこの複製図には、当該地域の政府が作製したもの(中国など)のほか、植民地政府が作製したもの(旧オランダ領東インドなど)もあり、両者はややちがうものと考えるべきであろう。現在これらをウェブ上で一律に公開できるかということになると、判断は容易ではない。

4. データベースの維持管理 外邦図は今後増加していく資料ではないので、今後中国やロシアで発見されるものがあるとしても、資料の追加は恒常的には発生しないと考えられる。目録やデータベース上の追加作業は一時的なものであり、学生アルバイトや業者委託で実施可能である。

ただし、デジタルデータのマイグレーションをはじめとするデータの保持やサービスの改善、利用者の発掘など、継続性を前提とした管理とサービスをどのように長期的に維持していくかは今後の大きな課題となる。これを研究者がおこなうというのは困難で、継続性の点からも大きな問題がある。演者らのグループでは、これまで科研費(基盤研究Aおよびデータベース)や国土地理協会の助成によって活動を続けてきたが、今後もこれが維持できる保証はない。また現在公開しているデータベースは、東北大学図書館のサーバーを利用しているが、図書館スタッフの交代など、継続性に影響する変化も予想される。

このような課題がみえはじめ、現在演者らは外邦図データベースの社会的位置づけを本格的に検討する必要性を感じている。外邦図と空中写真が、近代の日本が1945年8月に至る過程で作製してきた地域資料として、アジア太平洋地域の人びとに共有されるべきものとすれば、そろそろ研究者レベルをこえた議論が必要と思われるわけである。本シンポジウムで、それにいたるコースが示されることをつよく期待する。

外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題

—戦前期の地域資料の活用に向けて—



小林 茂(大阪大)・村山良之(山形大)・宮澤 仁(お茶の水女子大)

外邦図研究の成果

- 10回の研究会(うち3回は海外の研究者も参加)
- 目録の作成と刊行
東北大・京大文・お茶大
- データベースの作成(東北大)
- 資料調査:アメリカ・イギリス
国内では国立国会図書館・公文書館
- ニューズレター(1~4号)の編集と刊行、ウェブで公開
- 資料集の刊行(渡辺正氏所蔵資料)
- 論文の投稿と刊行
- 出版助成の申請

外邦図に関する課題

1. 整理はかなりすすんだが、どう**利用**するか?
外邦図は、使いにくい素材か?
2. どのように研究者・社会に**提供**するか?
国内だけでなく国外も
3. 歴史的遺産として、どのように**継承**するか?
現物とデータを保持し、サービスを維持
→ **デジタルアーカイブ**の構築と運用
4. 研究者中心のこのプロジェクトをどのように終了・継承していくか?

外邦図のデジタル化

基本仕様

使用機材: 大判フラットベッドスキャナ
画像の仕様

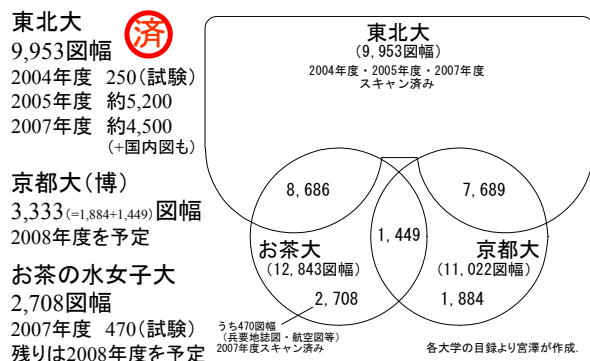
用途	形式	解像度	カラー	平均サイズ(縦版)
保存用	TIFF	360dpi	24bit	150MB
閲覧用	JPEG	360dpi	24bit	5-8MB
ネット公開用	JPEG	2000pixels *	24bit	0.4-0.8MB
サムネイル	JPEG	480pixels *	24bit	0.04-0.06MB

*: 縦または横の長い方

保存媒体 HDD (RAID5) × 4台
4箇所分散保管(東北大(地理学教室と附属図書館)、お茶大、京大)
総計 8TB? = 2TB+3TB+3TB?

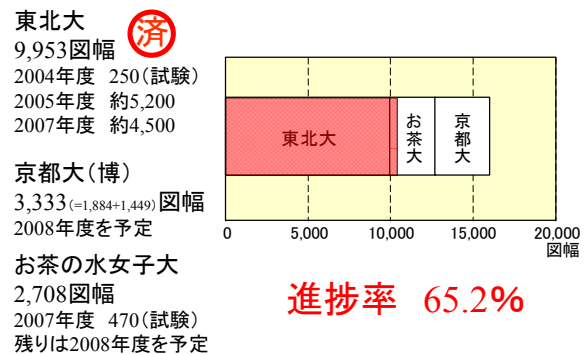
デジタル化対象図

デジタル化対象図(国内図等を除く)



デジタル化対象図

デジタル化対象図(国内図等を除く)



アーカイブシステム

外邦図デジタルアーカイブ [URL http://dbs.library.tohoku.ac.jp/gaihozu/](http://dbs.library.tohoku.ac.jp/gaihozu/)

内容: 地図画像 + 目録 (書誌データ)

公開方法: 東北大附属図書館のサーバによるインターネット公開

▼トップページ

▼地図画像

▲書誌情報ページ

アーカイブシステム

検索システム

- インデックスマップ検索
広域図→狭域図+リストと連動
- キーワード検索
広域地名、地域名、縮尺、年代等
プルダウンメニュー(の組合せ)→リスト
- 地域別データリスト検索
地域別リスト
- ワールドマップ検索(システム構築中)
地図クリック位置→関連全地図リスト

▼検索フロー

トップページ → 検索ページ → 書誌情報ページ → 地図画像

アーカイブシステム

インデックス
マップ検索

- ・目的の地図へ到達しやすく
- ・ページを分割することで役割区別化
- ・インデックスマップの作成
1. 岐阜県図書館
2. 東北大の目録に掲載された経緯度データを使用

①エリア、縮尺・系統選択

②小地域の選択

③図幅を選択して書誌情報ページを表示

紋り込みにあわせて動的に表示

アーカイブシステム

システム構築

LAMP: データベース連動型のWebアプリケーションを
開発するのに人気の高いオープンソース

ソフト
Linux の組み合わせ

MySQL (データベース)
php
Apache (サーバ) 地図画像 書誌情報 インデックスマップ

Linux (OS)

低コスト
システム構築費用 0円

高速処理
静的インデックスマップ
+ 動的情報検索

アーカイブシステム

アーカイブシステムの課題

1. 検索システムの高度化
インデックスマップ検索 経緯度データの整備、精度
静的インデックスマップ
ワールドマップ検索
→ 動的システム (Mapサーバ、WebGIS等) の導入
2. 特殊な地図の公開に関して
なかには高解像度画像の配信が必要な地図も?
- 処理速度、通信速度の問題
3. 公開用サーバの管理・維持、マイグレーション
継続的に人員、機材を手当する必要
- 大学の講座・研究室単位での対応は困難

特殊な地図の公開

特殊な地図

- ・細かい文字の視認性
- ・大判のデジタル地図画像の操作性、表示・配信速度に配慮

例え、兵要地誌図、一覧図

→ マルチレゾリューション・タイル構造の画像形式を選択

広東省水路網図
50万分の1図 14枚 193cm×210cm

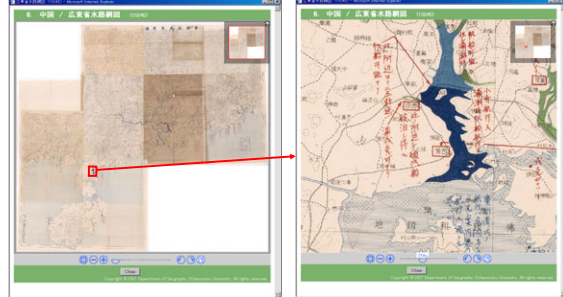
特殊な地図の公開

iPallet(イパレット)

FreeZoom Pack形式の選択

技術仕様オープン
→ 低コスト

外邦図デジタルアーカイブ お茶大所蔵兵要地誌図 (近日公開)



外邦図の来歴と公開に関する問題

デジタルアーカイブ

公開範囲 2008/02/09 現在

政治的配慮

大地域名	地域名	データ数	公開数
▼ 東アジア	中国	3,897	0
▼ 東南アジア	インドネシア	831	831
	タイ	61	61
	ビルマ・メルグイ諸島	46	0
	フィリピン	104	104
	マレーシア	141	141
▼ オセアニア	ソロモン諸島	10	10
	太平洋	4	4
	ニューカレドニア	9	9
	ニューギニア島	283	283
	パラオ	16	16
	マーシャル諸島	4	4
	ミクロネシア	25	25
総計		5,431	1,488

外邦図の来歴と公開に関する問題

1. 日本が植民地で測量作製した図
2. 日本軍が海外で測量・作製した図
戦場での測量・秘密測量
3. 日本軍が外国製地図を入手し、一部改変して刊行
 - 3-1. その地域の政府機関が作製したもの
 - 3-2. 植民地地域で、宗主国の機関が作製した図

外邦図の来歴と公開に関する問題

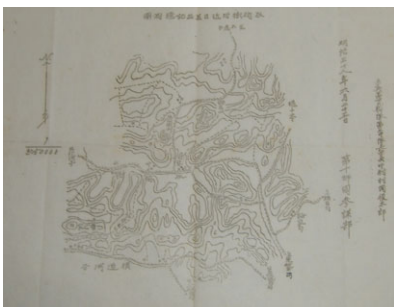
植民地機関が作製した図



「台湾堡図」の台北図幅
(二万分の一)
1904年

外邦図の来歴と公開に関する問題

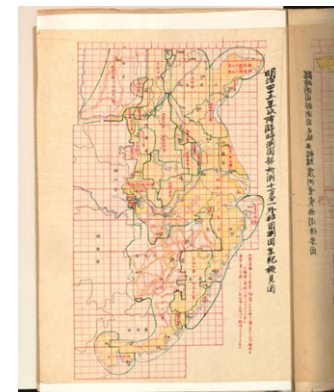
戦場で作製した図



孤楡樹附近
目撃並記憶測図

1905年6月23日
歩兵三十九連隊
第二中隊長
村岡俊太郎中尉
第十師団司令部

外邦図の来歴と公開に関する問題



秘密測量で
作製した図

中国大陸
1902~1925年
10万分の1

外邦図の来歴と公開に関する問題

外国製図を改変して刊行した図



1938年製版・発行

外邦図の来歴と公開に関する問題

高木菊三郎の中国製図の精度評価



外邦図の来歴と公開に関する問題

中国製図の一覧図

1938年以後増大

1937年の南京占領(南京事件)時に民国軍参謀本部の陸地測量總局で大量の地図を「押収」

→これを一部改変して使用

→中国大陸に関する外邦図のかなりの部分を占める

しかも、原図は戦後返還されていない

(中華民国vs. 中華人民共和国)

外邦図の来歴と公開に関する問題

外邦図の公開について留意すべき点

外邦図の性格

1. 日本以外のアジア太平洋地域の地理情報
2. 多くはもと軍事情報: ただし現在はその意義はほとんどない
3. 歴史資料: 軍事史、技術史、環境史など

公開の妥当性

1. 法的問題(国内法+国際法)
2. 道義的問題

外邦図の来歴と公開に関する問題

海外の類似機関における資料の取り扱い

The Aerial Reconnaissance Archives (TARA), Keele University, UK

2004年よりNational Archivesのもとで、Allied Central Interpretation Unit (連合軍中央写真判読隊)の空中写真(約500万枚)の一部をウェブで公開

ただし、(旧)ワルシャワ条約機構地域及び第2次世界大戦の中立国、UKの空中写真はふくまない模様(ただしアジア・アフリカの英植民地領の写真は含まれる)

外邦図データベースの今後

いくつかの可能性

1. 今後も大学が独自で管理運営→しんどい
2. 他の機関とリンクして運営

図書館: 国立国会図書館・岐阜県図書館

文書館: 国立公文書館、アジア歴史資料センター

その他の機関: 地球環境関係?

3. 他の機関にハンドオーバーする

参考: 「アジア歴史資料とは、近現代の我が国とアジア近隣諸国等との関係に関わる歴史資料として重要な我が国の公文書及びその他の記録」(アジア歴史資料センター)

今後の作業

1. 関係機関の理解を喚起→予備的協議
2. 海外の類似機関の調査研究
3. この種の資料に関連する専門家によるシンポジウム、ワークショップの開催
→地理学・地図学だけでなく、広く歴史学、資料学、生態学、環境科学の専門家の参加もえる
4. 外邦図に関連する書物の刊行
専門書・一般書・図集

満州気象資料のデータベース化による中国東北地区の気候変動解析

100103 Climate change analysis of the northeast area in China by Manchuria meteorological databases

山本 晴彦・岩谷 潔 (山口大学) ・張 継権 (東北師範大学)

Haruhiko YAMAMOTO・Kiyoshi IWAYA (Yamaguchi Univ.), Jiqian ZHANG (Northeast Normal Univ.)

キーワード: 気候変動、気象資料、中国、データベース、満州

Keywords: Climate change, China, Database, Manchuria, Meteorological data

戦前期の満州(現在の中国東北地区)では、気象観測業務は南満州鉄道株式会社や満州国中央観象台が主要な都市に観測所を設置して実施されていた。終戦前後の混乱期には資料が廃棄・焼却された経緯や気象観測記録の収集には東北3省(黒竜江省・吉林省・遼寧省)の気象台も積極的でない事情から、散逸している旧満州の気象観測記録の収集・整理が進んでいない。筆者は、(財)三菱財団、(財)住友財団からの研究助成により、満州で観測された戦前期の気象資料を国内外で収集・整理し、データベースを構築してきた。本発表では、気象観測業務の変遷、気象観測資料の保存状況、データベースの概要、データベースを用いた気候変動解析の試みを紹介し、今後の課題について考察した。

1. 気象観測業務の変遷 満州におけるわが国の気象観測業務は、日露戦争に際して軍事上の目的から中央気象台(現在の気象庁)が1904年8月に大連(第6)・營口(第7)、1905年4月に奉天(第8)、5月に旅順(第6・出張所)に臨時観測所を設けたのが始まりで、その後は関東都督府に引き継がれ、名所変更をはじめ、長春、四平街、周平子等に測候所や支所が開設された。1925年以降は、南満州鉄道株式会社に一部を委託された。南満州の観測所では、1904・05年から1945年の終戦までの約40年間にわたる観測業務が実施されている。一方、満州国が建国(1932年3月)され、その翌年11月に中央観象台官制が制定されたため、それ以降に開設された北満の観測所では観測期間はかなり短く、扎蘭屯では観測期間が1939年からの7ヶ年に過ぎない。1942年の満州国地方観象台制では、中央観象台(新京)、地方観象台4ヶ所、観象所46ヶ所、支台46ヶ所と簡易観測所が設置されている。

2. 気象観測資料の保存状況 国内では、気象庁図書館、山口大学経済学部の東亜経済研究所、国立国会図書館、広島大学附属図書館気象文庫、北海道大学附属図書館旧外地関係資料(北方資料データベース)、国立公文書館(アジア歴史資料センター)等で、満州の気象観測記録に関わる資料を収集・整理を行った。また、中国国家気候資料センター、吉林省図書館等の所蔵資料も確認したが、1941年(紀元2601年、康德8年)3月以降の満州気象月報(図1)は、日中両国での保存が確認できなかった。このため、2007年9月に米国議会図書館・公文書館を訪問して気象資料の所在について調査したが、満州高層気象月報は昭和19年6月~10月(第14号~18号)が保管されていたが、満州気象月報は日本と同様に1941年3月以降は確認出来なかった。

3. 満州気象データベースの概要 東亜気象資料 第五巻 満州編(図2、中央気象台、1942)をデータベースの基礎資料とし、満州気象資料、満州気象月報、満州気象報告、気象要覧(昭和18年10月号において、新京他17カ所の記載がある)などに掲載されている気象観測データを収集・整理し、観測開始の1905年から1943年(1941年以降は一部)までの30万データを越える月値について、データベー

ス化を行った。データはエクセルファイルに保存されており、観測所毎に月・年値、平年値が表示される。たとえば、奉天では、平均気温・最高気温平均・最低気温平均以下、36個の気象要素が収録されている。

満州 秘 気象月報

第七十五號
康德八年三月
(2601)

中央観象台
新京

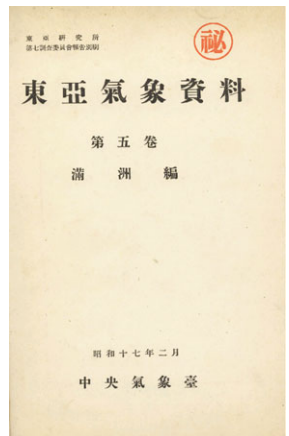


図1 満州気象月報 (康德8(紀元2601)年3月) 図2 東亜気象資料 満州編 (昭和17年2月)

4. 満州気象データベースを用いた気候変動解析の試み 構築した満州気象データベース(1905年~1943年)に筆者が入手した1950年以降の気象観測記録を統合して、中国東北地区の温暖化を解析した。瀋陽(奉天)、長春(新京)、ハルビンにおいて、1月の月平均気温は約100年間で2.6~2.7°Cの上昇が認められている。また、満州移民を送出した1940年前後は異常低温の発生頻度が高い低温期に相当している(図3)。8月は気温上昇が認められないが、1970年代は異常低温期に遭遇している。

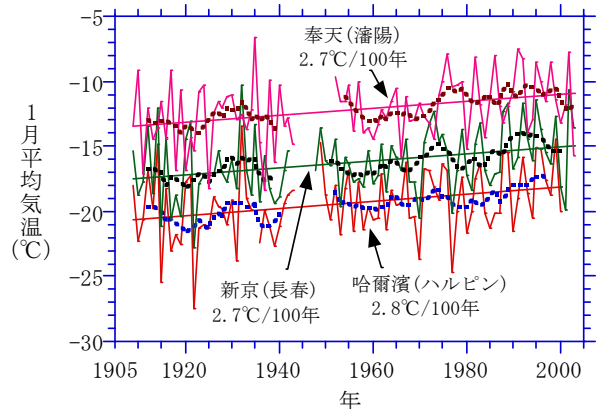


図3 瀋陽(奉天)、長春(新京)、ハルビンにおける約100年間の1月の月平均気温の推移

5. 今後の課題 戦後の中国で観測された気象資料の入手が困難なことから、満州気象データベースを十分に活用できない状況にある。今後は、関連する研究者・機関との連携を図りながら、多方面で利活用を進めていく必要がある。

シンポジウム「地域の知」の統合に向けて
 — 地域情報データベースの利活用 —
 日本学術会議地域研究委員会地域情報分科会、社団法人日本地理学会
 2008年3月29日 獨協大学

満州気象資料のデータベース化による中国東北地区の気候変動解析



満州国中央観象台

中央観象台 (H) 正通広路

山本 晴彦・岩谷 潔
 (山口大学)

張 継権
 (東北師範大学)

満州の呼称

- 中国では、大日本帝国が傀儡国家として建国した「満州国」を「偽満州国」と称している。
- 本研究では、調査資料が当時に印刷・発行されたものであることから、当時の呼称をそのまま使用している。

本研究の目的

- 本研究では、「戦前期の旧満州における気象観測記録と寒地農業資料の収集・整理とデータベース化」を研究題目とし、上述したように気象観測記録と寒地農業資料の収集・整理を実施し、中国東北地区の温暖化予測や寒冷農業に利活用が可能な気象データベースを作成することを目的としている。
- ここでは、旧満州における気象観測業務の変遷と気象資料の保存状況、印刷媒体の気象資料のデジタルアーカイブ構築の状況について報告する。

研究のステップ

1997年の中国東北部での洪水調査時に、長期にわたる雨量データが未整備、利用出来ない

韓国や台湾では、戦前の総督府の気象観測資料がデータベース化され、HPで公開、2003年韓国水書で利活用

- (財)三菱財団(平成15年度人文科学研究助成金、～平成16年度)
- 戦前期の旧満州における気象観測記録と寒地農業資料の収集・整理とデータベース化(研究代表者・山本晴彦)
- ↓
- (財)住友財団(2005(平成17)年環境研究助成、～2006(平成18)年)
- 旧満州・樺太・南洋地域における20世紀気候アーカイブの作製に基づく旧植民地の気候変動分析(研究代表者・山本晴彦)
- ↓
- 科学研究費補助金 基盤研究A(平成19年度、～平成21年)
- アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成(研究代表者・小林 茂)

日本の地球温暖化と気候変動予測

- 2050年には日本の地上気温は現在より1.0～1.5°Cも上昇するものと予測されており、高温化・降水変動による農業生産への影響が懸念されている。
- とくに、高緯度地帯においては温暖化の影響は大きいものと予想されている。農業生産の予測精度を高める上で高緯度地帯における長期間の気象観測データの収集・分析が必要となっている。
- 日本では、1890年代から各地で気象観測業務が開始され、100年以上にわたる気象観測データの蓄積がある。

わが国における気象観測の歴史

- 明治4(1871)年、イギリス人のジョイネルが明治政府に気象観測の必要性を建議したことにはじまる。
- 明治5(1872)年に日本初の気象観測所が函館に開設。英国人経営の貿易会社に勤めていた福士成豊が英国人プラキストンから測量や機械、気象などを学び、自宅に観測所(晴雨計、乾湿計、雨量計)を設置
- 明治8(1875)年には気象庁の前身の東京気象台が現在の東京赤坂に設立。地震観測と1日3回の気象観測を開始。
- 大正13(1924)年に天気図が新聞に掲載されるようになり、翌年にはラジオの天気予報がはじまる。
- 昭和28(1953)年にはテレビによる天気予報がスタートし、気象庁の役割は国民生活に重要な位置を占めるようになった。

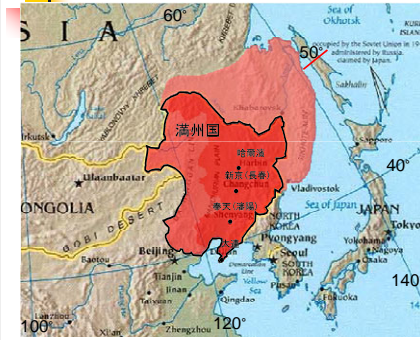
気象庁(東京管区气象台)



1875(明治8)年6月1日
 ・東京府第2大区(のち赤坂区)溜池葵町内務省地理寮構内で気象業務を開始(気象庁の前身東京气象台)、地震観測と1日3回の気象観測を開始



満州国(中国東北地区)の位置

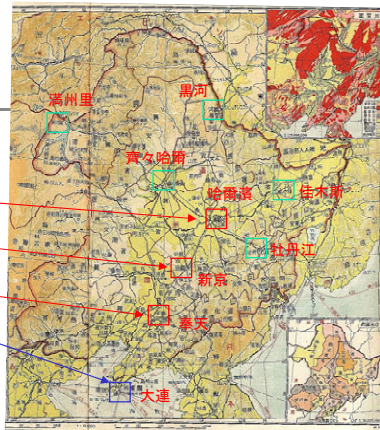


北緯38度45分～53度50分
 東経115度20分～135度20分

国土面積
 日本 37万km²
 ↓約4.2倍
 満州国 155万km²

満州国

- 東北地区
 黒竜江省
 省都: 哈爾濱
 吉林省
 省都: 長春(新京)
 遼寧省
 省都: 瀋陽(奉天)
 軍港: 大連



1942年発行

日本と満州の位置・気候比較

国名	都市	北緯(°)	気温較差(°C)	大陸度	
				Gorczynski値	Johansen値
日本	札幌	43° 03'	27.2	47.3	48.7
	旭川	43° 46'	30.0	53.3	56.4
	帯広	42° 55'	29.4	53.0	56.1
	仙台	38° 16'	23.7	44.7	46.5
	長野	36° 40'	26.2	54.2	53.2
(本州)	東京	35° 41'	22.7	45.7	47.2
	大阪	35° 39'	23.3	49.2	50.2
	高知	33° 34'	21.1	44.2	46.1
(四国)	高知	33° 34'	21.1	44.2	46.1
(九州)	福岡	33° 35'	21.7	46.3	47.7
満州	大連	38° 54'	29.6	59.7	60.4
	奉天	41° 47'	37.7	73.8	75.6
	新京	43° 52'	41.0	80.2	79.4
	哈爾濱	45° 45'	42.4	80.2	79.7
	牡丹江	44° 35'	42.5	76.5	81.8
齊々哈爾	47° 20'	45.8	85.5	74.7	

満州各地の気温較差(°C、最高気温と最低気温の較差)は、日本各地に比べて著しく大きく、新京(長春)以北の北満では40°Cを超えている。大陸性気候を比較する指標となる「大陸度」を提唱しているGorczynskiとJohansenの計算式から求めた結果、旭川や帯広、本州で内陸性気候に属する長野などで最大55～56であるのに対して、満州では南端の黄海に面した大連でも約60と同緯度の長野よりも高く、北満地方では80前後に達し、齊々哈爾では85.5とわが国とは大きく異なる著しい大陸性気候を有している。

旧満州における気象観測

- 中国が成立した1949年以降は、中国気象局によって気象観測所が整備され、気象観測記録の保存も行われてきた。
- 戦前期の旧満州における気象観測は、満州国政府の中央観測台が主要な都市に観測所を設置している以外に、南満州鉄道株式会社への委託、軍関係でも独自に気象観測を行うなど、さまざまな機関で気象観測業務が実施されてきた。
- 気象業務職員の養成、気象観測測器は、日本の中央気象台を中心に、全面的に委託・支援された。
- 1945年8月の終戦前後の混乱期に、資料の紛失や廃棄されたものも数多く見受けられる。
- 旧植民地化で観測された気象観測記録の収集には、東北地区の3省(黒竜江省・吉林省・遼寧省)の気象台も積極的に関与していない側面もあり、散逸している旧満州の気象観測記録の収集・整理が進まず、長期観測記録に基づく温暖化の予測、農業生産の予測等に関する研究が進展しない状況にある。

満州における気象観測業務とその変遷

- 中央気象台(現在の気象庁)が1904年8月に大連(第6)・營口(第7)、1905年4月に奉天(第8)、5月に旅順(第6・出張所)に臨時観測所を開設
- 関東都督府に引き継がれ、名所変更をはじめ、長春、四平街、周平子等に測候所や支所を開設
- 1925年以降は、南満州鉄道株式会社(満鉄)に一部を委託
- 満州国設立時(1932年)には、関東観測所(大連)、関東観測所支所(旅順・營口・奉天・四平街・新京)、満鉄委託観測所(鞍山・開原・撫順・鄭家屯・林西・洮南・齊々哈爾・哈爾濱・海倫・鳳凰城・海龍・敦化)が設置
- 建国以降(1933年11月に中央観測台官制が公布)は、新京(長春)に中央観測台を設置し、黒河・海拉爾等に観測台を設置
- 1937年12月、治外法権の撤廃及び満鉄附属地行政権の委譲に伴って、旅順・奉天・四平街・新京の4支所は満州国に委譲
- 大連の関東観測所は、関東気象台官制(昭和13年勅令第705号)により、関東気象台として引き続き気象業務を施行

満州国地方観象台制

(康德9年2月28日(昭和17年))

- **中央観象台**(四平・開魯・林西・魯北・老爺嶺・額穆索の6観象所)
- **奉天地方観象台**(營口・錦州・赤峰・阜新・通化・連山関・大孤山・山海関・葉柏壽の9観象所)
- **哈爾濱地方観象台**(克山・安達・一面坡・鷗浦・呼瑪・仏山・綏化・奇克の8観象所、黒河支台)
- **齊々哈爾地方観象台**(満州里・興安・扎蘭屯・索倫・嫩江・阿爾山・奈勒穆の7観象所、海拉爾・白城の2支台)
- **牡丹江地方観象台**(富錦・春化・東安・綏芬河・東寧・虎林・饒河・通河・勃利・羅子溝・依蘭・天橋嶺・湖南・八面通・宝清・春陽の16観象所、延吉・佳木斯の2支台)

地方観象台(4)、観象所(46)、支台(4)=54ヶ所

旧満州国中央観象台史

終戦時の企画室長の出淵重雄氏が編著
昭和63(1988)年6月1日発行、275頁

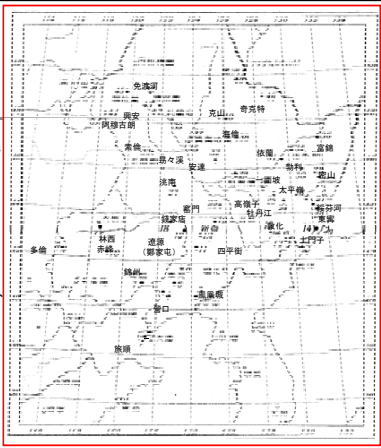
- 序文
- 第1編 概説
 - 第1章 旧満州国成立と旧満州国中央観象台創設
 - 第2章 中央観象台施設と業務
 - 第3章 気象研究所と研究
 - 第4章 観象職員訓練所と委託について
 - 第5章 満州国の演進と中央観象台の終焉
- 第2編 沿革
 - 第6章 旧満州国中央観象台沿革大要
- 第3編 落日の修羅
 - 第7章 中央観象台中枢部の避難と機能喪失
 - 第8章 東部圏境方面の官署
 - 第9章 北部圏境方面の官署
 - 第10章 西部圏境方面の官署
- 第4編 旧満州国中央観象台余録
 - 第11章 敗戦直後混乱期の気象業務
 - 第12章 中華人民共和国東北地区の気象観測点
- 附図1~附図7 参考文献 人名索引 主な資料提供者氏名 再びあとがき



満州国中央観象台

満州国の48観象台(所)
(新京の中央観象台を含む)

- 1旅順、2大連、3鳳凰城、4營口、5承德、6鞍山、7錦州、8奉天、9多倫、10赤峰、11開原、12延吉、13四平街、14土門子、15敦化、16遼源(鄭家屯)、17林西、18饒家屯、19新賓、20東寧、21綏芬河、22密門、23太平嶺、24牡丹江、25高嶺子、26一面坡、27洮南、28密山、29哈爾濱、30勃利、31依蘭(三姓)、32安達、33索倫、34佳木斯、35易々溪、36富錦、37齊々哈爾、38海倫、39扎蘭屯、40克山、41阿穆古朗、42博克圖、43興安、44免渡河、45海拉爾、46奇克特、47滿洲里、48黒河



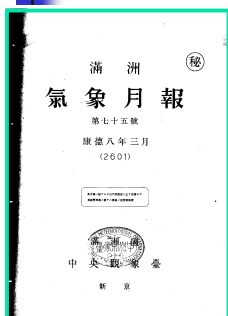
気象庁(戦前の中央气象台)図書館における満州気象月報の保存状況

No	特集記事	年Vol.No	所蔵場所	登録番号
1	康德2年-1年度3年	(1935- 1)~(1936- 12)	M/518:82.2:18	300148114
2	康德2年-3年	(1935- 2-1)~(1936- 3-12)	M/518:82.2:18:35-36	300006856
3	康德4年	(1937- 1)~(1937- 12)	M/518:82.2:18:1937	300148034
4	康德4年	(1937- 4-1)~(1937- 4-12)	M/518:82.2:18:37	300006865
5	康德4年	(1937- 4-1)~(1937- 4-12)	M/518:82.2:18:37	300006874
6	康德5年	(1938- 1)~(1938- 12)	N/518:82.2:18:1938	300148025
7	康德5年	(1938- 5-1)~(1938- 5-12)	M/518:82.2:18:38	300006883
8	康德5年	(1938- 5-1)~(1938- 5-11)	M/518:82.2:18:38	300006892
9	康德5年	(1938- 5-1)~(1938- 5-12)	M/518:82.2:18:38	300006909
10	康德6年	(1939- 6-1)~(1939- 6-12)	M/518:82.2:18:39	300006918
11	康德7年	(1940- 7-1)~(1940- 7-11)	M/518:82.2:18:40	300006927
12	康德7年	(1940- 7-1)~(1940- 7-11)	M/518:82.2:18:40	300006936
13	康德5年	(1941- 8-1)~(1941- 8-3)	M/518:82.2:18:41(1)	300006945

康德8年(昭和16年、1941年)4月以降の気象月報については、日本・中国(「旧満州 東北地方文献聯合目録」が大連市・黒龍江省図書館が編者となり出版されており、その複製版がわが国でも出版されている。そこでは、「天文・地質(天文・気象)」の中で気象観測資料の蔵書状況が記載されているが、東北地区(満州)の大学附属図書館や市の図書館における蔵書数はきわめて少ない。ほぼすべての蔵書は日本に存在する)・米国(GHO(連合国軍最高司令官総司令部)が戦後直後に接収した満州関連の膨大な資料があり、井村(1995)によって整理されているが、所蔵されていない。)において保存されておらず、未確認の状況にある。

戦前期の満州気象月報

(気象庁図書館で所蔵する最も新しい月報)



康德8年、昭和16年
西暦1941年、皇紀2601年
4月以降の月報が未収集



康德8年3月気象一覽表

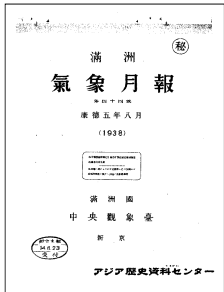
- 1新賓、2一面坡、3哈爾濱、4安達、5白城、6齊々哈爾、7克山、8嫩江、9鷗浦、10呼瑪、11黒河、12奇克特、13佛山、14通河、15依蘭(三姓)、16佳木斯、17湖南營、18勃利、20富錦、21虎林、22東安、23牡丹江、24綏芬河、25東寧、26春化、27羅子溝、28延吉、29通化、30大孤山、31連山関、32四平街、33奉天、34營口、35錦州、36山海関、37葉柏壽、38承德、39赤峰、40林西、41開魯、42索倫、43扎蘭屯、44興安、45海拉爾、46奈勒穆、47滿洲里、48阿穆古朗、49多倫、50老爺嶺、51額穆索、52高嶺子、53寶清、54八面通、55春陽

新 京		新 京	
日	時	日	時
1935.7.1	00	1935.7.1	00
1935.7.1	01	1935.7.1	01
1935.7.1	02	1935.7.1	02
1935.7.1	03	1935.7.1	03
1935.7.1	04	1935.7.1	04
1935.7.1	05	1935.7.1	05
1935.7.1	06	1935.7.1	06
1935.7.1	07	1935.7.1	07
1935.7.1	08	1935.7.1	08
1935.7.1	09	1935.7.1	09
1935.7.1	10	1935.7.1	10
1935.7.1	11	1935.7.1	11
1935.7.1	12	1935.7.1	12
1935.7.1	13	1935.7.1	13
1935.7.1	14	1935.7.1	14
1935.7.1	15	1935.7.1	15
1935.7.1	16	1935.7.1	16
1935.7.1	17	1935.7.1	17
1935.7.1	18	1935.7.1	18
1935.7.1	19	1935.7.1	19
1935.7.1	20	1935.7.1	20
1935.7.1	21	1935.7.1	21
1935.7.1	22	1935.7.1	22
1935.7.1	23	1935.7.1	23
1935.7.1	24	1935.7.1	24
1935.7.1	25	1935.7.1	25
1935.7.1	26	1935.7.1	26
1935.7.1	27	1935.7.1	27
1935.7.1	28	1935.7.1	28
1935.7.1	29	1935.7.1	29
1935.7.1	30	1935.7.1	30
1935.7.1	31	1935.7.1	31

簡易気象観測成績		簡易気象観測成績	
日	時	日	時
1935.7.1	00	1935.7.1	00
1935.7.1	01	1935.7.1	01
1935.7.1	02	1935.7.1	02
1935.7.1	03	1935.7.1	03
1935.7.1	04	1935.7.1	04
1935.7.1	05	1935.7.1	05
1935.7.1	06	1935.7.1	06
1935.7.1	07	1935.7.1	07
1935.7.1	08	1935.7.1	08
1935.7.1	09	1935.7.1	09
1935.7.1	10	1935.7.1	10
1935.7.1	11	1935.7.1	11
1935.7.1	12	1935.7.1	12
1935.7.1	13	1935.7.1	13
1935.7.1	14	1935.7.1	14
1935.7.1	15	1935.7.1	15
1935.7.1	16	1935.7.1	16
1935.7.1	17	1935.7.1	17
1935.7.1	18	1935.7.1	18
1935.7.1	19	1935.7.1	19
1935.7.1	20	1935.7.1	20
1935.7.1	21	1935.7.1	21
1935.7.1	22	1935.7.1	22
1935.7.1	23	1935.7.1	23
1935.7.1	24	1935.7.1	24
1935.7.1	25	1935.7.1	25
1935.7.1	26	1935.7.1	26
1935.7.1	27	1935.7.1	27
1935.7.1	28	1935.7.1	28
1935.7.1	29	1935.7.1	29
1935.7.1	30	1935.7.1	30
1935.7.1	31	1935.7.1	31

国立公文書館「アジア歴史資料センター」における満州気象資料(気象月報)の電子提供

- 近現代の日本とアジア近隣諸国等との関係に関わる歴史資料をインターネット上で電子提供
- 陸満機密・密・普大日記(防衛庁防衛研究所図書館所蔵):
 - 所収年代: 昭和8年~昭和15年。分量: 25冊。内容: 満州事変関係機密文書で、勤員・作戦・要務・兵器・物品・材料・衣糧・船舶・運賃等およびこれに関する往復文書。文書発簡区分は陸満機密第0号。所収年代: 明治37年~明治40年、昭和7年~16年の内、昭和期の分量: 182冊。内容: 満州事変関係の機密文書およびこれに関する往復文書で、細部内容は密大日記の内容に該当するもの。文書発簡区分は陸満機密第0号。
- 気象資料提出の件(目録)
 - 昭和11年~14年の33件
 - 昭和14年「陸満密大日記 第12号」
 - 200画像、気象月報(康德五年七月、八月)、高層気流月報(康德五年九月)



山口大学経済学部東亜経済研究所で保存されている満州気象資料



- 満州農業気象報告、南満州鉄道株式会社殖産部農務課、昭和6年5月16日発行
- 北満州気象報告、南満州鉄道株式会社哈爾濱事務所、昭和8年6月16日発行
- 満州農業気象報告(産業資料第31号)、南満州鉄道株式会社地方部農務課、昭和9年3月30日発行
- 第三次満州農業気象報告(産業資料第35号)、南満州鉄道株式会社地方部農務課、昭和11年5月30日発行

南満州鉄道株式会社で発行された農業気象報告・気象報告(月別値掲載、中央観象台からの委託観測)

- 満州農業気象報告、南満州鉄道株式会社殖産部農務課、昭和6年5月16日発行
公主嶺(公主嶺農事試験場本場)・熊岳城(農事試験場熊岳城分場)・鄭家屯(鄭家屯試作場)・洮南(洮南事務所)・開原(開原原種圃)・鳳凰城(鳳凰城煙草試作場)・齊々哈爾(齊々哈爾事務所)の7ヶ所、~1929年
- 北満州気象報告、南満州鉄道株式会社哈爾濱事務所、昭和8年6月16日発行
満州里、海拉爾、免渡河、博克圖、札蘭屯、昂昂溪、安達、哈爾濱、密門、一面坡、牡丹江、大平嶺、三姓の13ヶ所、~1929年
- 満州農業気象報告(産業資料第31号)、南満州鉄道株式会社地方部農務課、昭和9年3月30日発行
熊岳城(農事試験場熊岳城分場)・鳳凰城(鳳凰城煙草試作場)・海龍(海龍農事試作場)・開原(開原原種圃)・敦化(敦化農事試作場)・鄭家屯(鄭家屯事務所)・公主嶺(公主嶺農事試験場本場)・黑山頭(黑山頭種羊場)・洮南(洮南事務所)・哈爾濱(哈爾濱事務所)・齊々哈爾(齊々哈爾事務所)の11ヶ所、~1932年
- 第三次満州農業気象報告(産業資料第35号)、南満州鉄道株式会社地方部農務課、昭和11年5月30日発行
熊岳城(農事試験場熊岳城分場)・鳳凰城(鳳凰城煙草試作場)・遼陽(遼陽棉花試作場)・海龍(海龍農事試作場)・開原(開原原種圃)・敦化(敦化農事試作場)・鄭家屯(鄭家屯事務所)・公主嶺(公主嶺農事試験場本場)・林西(林西種羊場)・洮南(洮南農事試作所)・齊々哈爾(齊々哈爾事務所)・海倫(哈爾濱事務所海倫派出所)の12ヶ所、~1935年

東亜気象資料 第一巻~第六巻(中央気象台編集、東亜研究所第七調査委員会報告別刷)

- 第一巻 支那ノ部
603頁、図版31葉、説明56頁、昭和16年11月20日発行
- 第二巻 ヒリッピン、佛領印度支那、泰、ビルマ、マレー及び印度篇
570頁、昭和16年11月20日発行
- 第三巻 蘭領東印度及豪州編
544頁、昭和16年12月25日発行
- 第四巻 シベリヤ編
533頁、図版120葉、説明27頁、昭和17年1月20日発行
- 第五巻 満州編
471頁、昭和17年2月28日発行
- 第六巻 本邦編
319頁、図版40葉、昭和17年2月20日発行

東亜気象資料 第五巻 満州編

(東亜研究所第七調査委員会報告別刷)

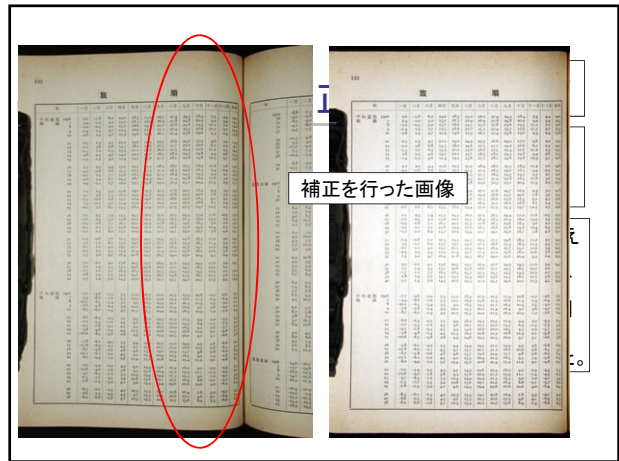
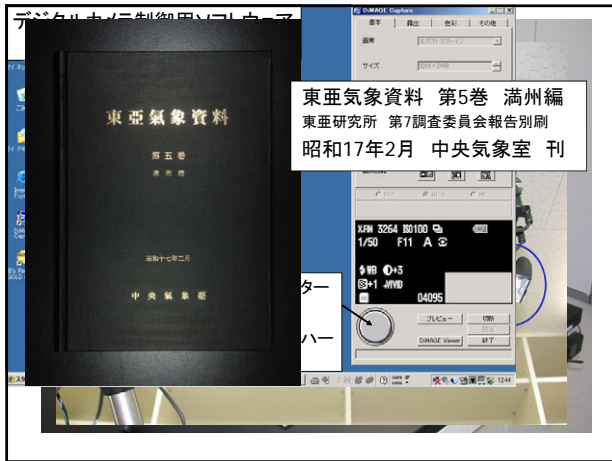


- 第一篇 累年平均
 - 第二篇 各年各月気象表
- 氷点気圧平均、氷点気圧高極、氷点気圧低極、海面気圧、平均気温、平均最高気温、平均最低気温、気温高極、気温低極、平均水蒸気張力、平均湿度、最小湿度、平均雲量、平均風速度、最大風速度、降水量、降水量最大日量、日照時数、日照率、蒸発量、蒸発量最大日量、最低地温の極、平均地面温度、地中温度(0.1・0.2・0.3・0.5・1.0・2.0・3.0・4.0・5.0m)、降水日数、快晴日数、曇天日数、霧日数、霪日数、霰日数、不照日数、電雷日数、暴風日数、地震回数、最大積雪量

牡丹江における気象資料(最低気温の平均)

(東亜気象資料 第五巻 満州編、昭和17年より)

年	極小値 牡 丹 極大値 江												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
1917	-25.3	-23.3	-13.4	-2.9	2.5	11.9	17.3	16.1	6.2	-1.2	-20.2	-23.8	-4.8
18	-27.8	-23.5	-12.8	-1.7	5.8	11.4	16.3	15.0	8.9	-2.2	-13.7	-22.9	-3.9
19	-28.7	-21.5	-11.7	-1.5	3.8	10.3	16.4	13.8	5.7	-0.4	-16.4	-24.7	-4.4
20	-23.4	-13.5	-10.4	-1.3	5.8	10.9	17.5	14.1	5.2	-3.9	-10.9	-26.3	-4.4
21	-26.1	-21.7	-12.9	-1.1	5.5	10.2	16.2	15.5	6.8	-1.7	-13.9	-24.2	-4.0
22	-35.8	-21.4	-13.3	-0.4	5.4	11.4	17.4	14.3	6.5	-0.3	-15.4	-19.8	-4.3
23	-27.1	-20.2	-9.7	-1.9	6.1	10.6	16.0	15.2	5.9	-1.4	-11.1	-24.2	-3.5
24	-27.4	-26.9	-15.4	-0.5	4.8	11.7	17.9	15.9	5.0	-3.0	-14.4	-25.7	-4.6
25	-29.9	-25.7	-13.1	-1.3	6.8	11.5	16.1	16.1	9.8	-0.8	-9.7	-20.9	-3.4
26	-25.9	-20.0	-11.3	-3.4	6.8	10.4	15.6	15.9	9.1	-3.4	-13.5	-23.8	-3.6
27	-27.1	-24.4	-13.5	-1.6	4.6	10.6	17.1	14.0	6.1	0.8	-14.0	-25.2	-4.4
28	-27.3	-29.5	-12.2	-2.2	5.5	11.2	15.9	17.0	8.9	-1.1	-14.5	-26.0	-4.2
29	-29.0	-24.0	-12.1	-1.9	5.4	12.0	17.2	15.3	5.2	-1.9	-11.0	-26.7	-4.5
30	-27.9	-23.3	-9.9	-2.3	5.5	11.0	17.2	15.3	7.8	-1.9	-11.4	-22.6	-
31	-29.1	-27.4	-12.4	-3.0	3.9	11.6	13.8	15.5	8.1	-1.7	-10.5	-22.5	-4.5
32	-22.5	-23.2	-14.0	-2.6	6.1	12.0	17.7	14.7	8.3	0.6	-14.2	-18.3	-3.0
33	-27.3	-24.5	-15.9	-1.2	5.3	13.0	17.6	15.4	7.4	-0.5	-10.8	-23.7	-3.7
34	-26.4	-25.1	-8.4	-0.7	6.9	12.4	18.9	14.9	9.4	0.6	-9.4	-23.5	-2.0
35	-26.5	-20.0	-9.4	-1.5	6.0	12.7	18.1	17.3	10.2	-1.2	-10.4	-18.2	-1.7
36	-23.4	-19.9	-9.5	-1.5	-	12.8	15.1	14.9	-	-	-	-	-



年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月
1905	0.6	0.0	-1.8	1.0	6.2	14.0	18.5	23.0	24.2
7	2.4	-1.4	1.0	5.2	13.3	17.9	18.3	22.9	27.8
8	-1.4	1.0	-0.5	5.0	12.0	13.3	18.6	24.5	26.7
9	-0.4	1.9	1.1	3.7	12.9	18.6	22.7	26.2	27.4
10	-2.8	1.3	1.4	4.0	12.9	19.3	22.9	26.1	27.4
11	0.3	1.3	1.3	4.1	11.2	19.0	24.7	25.5	26.6
12	-1.7	3.8	3.3	6.8	14.5	18.0	24.7	27.7	29.3
13	-1.3	1.4	6.3	13.9	14.0	17.2	22.8	26.8	27.5
14	2.8	2.5	1.6	4.6	14.0	17.2	25.3	28.3	29.2
15	-1.9	-1.4	-1.2	4.6	12.4	19.5	23.8	27.1	28.7
16	1.1	2.1	2.0	4.1	11.2	19.0	24.7	25.5	26.6
17	-4.2	-0.8	0.8	5.0	10.5	20.3	25.9	27.4	28.2
18	-0.7	2.5	2.3	7.7	14.7	18.3	24.0	27.3	28.4
19	-2.6	3.4	3.1	8.1	14.3	28.7	24.2	28.1	31.4
20	0.9	0.9	+1.2	6.7	16.0	23.7	25.3	29.3	30.3
21	1.1	1.1	2.4	5.9	13.6	19.0	24.3	27.1	27.8
22	-3.7	3.8	3.3	7.3	16.1	18.4	26.8	29.9	28.8
23	-1.5	-0.6	0.8	6.8	12.1	20.4	24.6	27.5	28.6



認識データのワークシート化

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
平均最高気温	0.6	-1.8	6.2	14.0	18.5	23	26.1	27.4	24.3	24.8	20.2	7.5
平均最低気温	-1.0	-5.2	13.7	18.3	22.8	26.9	27.8	24.8	20.2	9.2	11.1	11.1
全データセル数	753											
正答セル数	629											
OCRの認識正答率	83.5%											

満州気象データベース

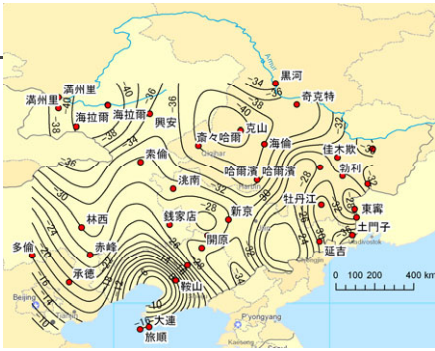
データベースに収録した48観測所

1. 旅順、2. 大連、3. 鳳凰城、4. 遼口、5. 承德、6. 鞍山、7. 瀋陽、8. 奉天、9. 多倫、10. 承德、11. 開原、12. 延吉、13. 四平街、14. 本関、15. 敦化、16. 延慶、17. 吉林、18. 延吉、19. 延吉、20. 延吉、21. 延吉、22. 延吉、23. 延吉、24. 延吉、25. 延吉、26. 延吉、27. 延吉、28. 延吉、29. 延吉、30. 延吉、31. 延吉、32. 延吉、33. 延吉、34. 延吉、35. 延吉、36. 延吉、37. 延吉、38. 延吉、39. 延吉、40. 延吉、41. 延吉、42. 延吉、43. 延吉、44. 延吉、45. 延吉、46. 延吉、47. 延吉、48. 延吉

奉天(最低気温平均)の事例

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
1907	-20.1	-21.1	-5.6	2.2	8.9	15.9	20.0	17.6	10.1	3.8	-9.5	-13.6	9.0
1908	-15.1	-19.3	-7.0	2.3	8.9	14.5	18.4	19.3	11.0	4.2	-8.9	-17.8	0.9
1909	-22.7	-19.7	-7.2	1.6	7.7	16.0	19.0	19.2	11.5	4.3	-8.1	-11.7	0.7

1939年1月の気温低極の分布図



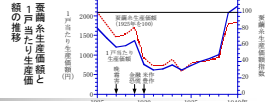
当時の気象観測資料の有効的活用は？ 気象観測資料は、極秘(秘)

満蒙開拓団の歴史



- 「旧満州(現在の中国東北地区)」の概要
 - 国土面積: 約130万km² (日本(37万km²)の約3.5倍) ・人口: 約4,400万人
- 昭和4(1929)年に拓務省が設置。⇒ 昭和6年「満蒙移住計画」を作成
- 昭和7(1932)年3月1日、「王道楽土」「五族協和」を合い言葉に満州国が成立
- 昭和7(1932)年3月 第一次官衛開拓団493人(弥生(いよさか)村)入植
- 昭和8(1933)年7月 第二次官衛開拓団494人(千振(ちぶり)村)入植
 - 在郷軍人による武装移民の吉林省依蘭地方へ入植
- 昭和11(1936)年8月 広田弘毅内閣
 - 対滿移民政策「二〇箇年百万戸開拓民送出計画」など七重大国策を決定。
- 昭和12(1937)年8月 ・日中戦争 ・満州拓殖会社(のち公社)が設立
 - 移民の送出地は、耕地の乏しい山村の農民が多い。移民地は、ソ満国境や満州中核都市の外縁部が多い
 - 第一: 昭和恐慌下にある日本農村の過剰人口対策・飢饉の救済
 - 第二: 満洲に日本人人口を増やして治安維持を図り、満州重工業地帯の防衛、対ソ防衛
 - 第三: 日本の食料供給基地としての位置付け
- 昭和20(1945)年 日本人の満州移民(一般開拓民22万人、満蒙開拓義勇隊員10万人)
- 昭和20(1945)年8月9日 ソ連侵攻 ・8月15日 敗戦 満州国の終焉・開拓団の悲劇

満州移民と分村移民政策



- 1927(昭和2)年5月12日の長野野下桑園6万町歩の大半を襲った晩霜害 ⇒ 被害桑園4万6,400町歩(桑園全体の72%)、損害見積額1,500万円
- 1929年(昭和4年)からの世界大恐慌の影響を受けた昭和恐慌の中で、とくに農村では困窮が深刻化(蚕繭糸生産価格・薪炭材価格の暴落)。
- 1938(昭和13)年から、本村または母村を分割して一部が満洲に集団で移民する分村移民政策を実施。
- 分村移民政策
 - 村の人口を計画的に削減して一戸当たりの耕地を増大させるとともに、「むら」の共同体的結合を利用して、満洲移民の送出と定着の両面から効果を上げようとする政策。
- 日本が戦時経済に転換すると、国内の兵力動員と労働力需要増で、拳家離村の分村移民が困難。そのため、16~19歳の青少年層の送出をはかる満蒙開拓青少年義勇軍の募集を強力。

満蒙開拓団 ⇒ 満蒙開拓青少年義勇軍

満蒙開拓団の推移

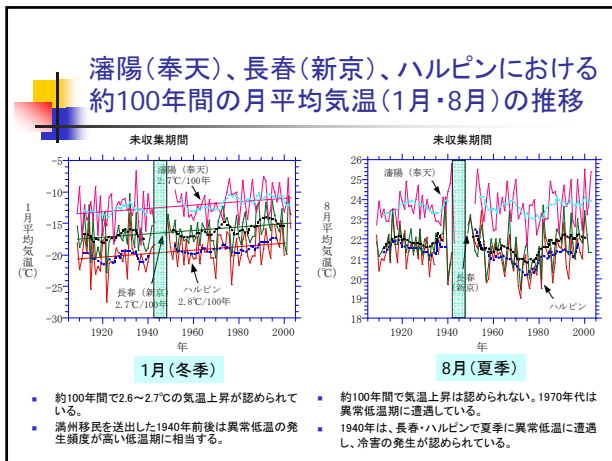
表 満蒙開拓団における作付面積と當農戸数の推移(満州国通信社、1944より作成)

西暦	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年	1942年	1943年
元号	康徳4年	康徳5年	康徳6年	康徳7年	康徳8年	康徳9年	康徳10年
#	昭和12年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年
作付面積(ha)	10,000	24,000	49,000	91,000	125,000	175,000	239,000
當農戸数(戸)	3,100	7,000	12,000	20,000	28,000	37,000	47,000
1戸当たり作付面積(ha)	3.23	3.43	4.08	4.55	4.46	4.73	5.09

表 満蒙開拓団における年度別の入植計画戸数(拓務省、1937より作成)

西暦	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年
元号	康徳4年	康徳5年	康徳6年	康徳7年	康徳8年
#	昭和12年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年
農業集団移民	5,000	10,000	15,000	20,000	20,000
一般移民	1,000	5,000	6,000	8,000	10,000
合計	6,000	15,000	21,000	28,000	30,000

昭和12(1937)年の時点で作付面積が10,000haであったが、翌年は2.4倍の24,000haとほぼ倍増のペースで増加し、昭和18(1943)年には239,000haにまで拡大している。當農戸数も昭和12(1937)年の時点3,100戸であったが、6年後の、昭和18(1943)年には47,000戸に拡大している。1戸あたりの作付面積は、昭和12(1937)年の時点で3.23haであったものが徐々に拡大し、昭和18(1943)年には5.09haにまでなっている。



気象要覧 (秘) 軍資料秘 (中央气象台、昭和18年10月)

新京 他 17カ所の記載あり

米国議会図書館 The Library of Congress

Madison Building
Jefferson Building
Adams Building

2007年 9月17日~9月22日

日本人スタッフ
・目録部日本課 藤代真苗氏
・アジア部日本課 太田米司氏
・ " 伊藤氏

気象資料の検索・撮影

満州高層気象月報 第14号~18号 昭和19年6月~10月

極秘
第14号
新京・海拉爾・白城子
康德11年
昭和19年 6月

本書は之を厳重に保管すべし

一連番号 第 24 号
作成官署 中央観象台
作成年月 康德11年7月1日
作成部数 100部

南洋庁における気象観測業務の沿革

- 大正3年 日本海軍の占領によりドイツ関係の簡易観測は中止
- 大正4年 海軍南洋守備隊がサイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ、クサイ、ヤルトで気象観測を開始
- 大正11年4月1日 南洋庁官制公布
- 大正11年10月1日 パラオ諸島コロール島に南洋庁観測所を設置
- 大正12年2月1日 地上観測業務を開始
- 大正13年3月 気象月報を発刊
- 昭和2年10月 南洋庁観測所にサイパン、ポナペ出張所を設置
- 昭和9年6月 トラック出張所を設置
- 昭和10年6月 ヤルト出張所を設置
- 昭和11年11月 ヤップ出張所、オレアイ、ウルシイ、バガン分室を設置
- 昭和12年10月 トコベ、クサイ、エニウエタック、ウオッチェ分室を設置
- 昭和13年7月 南洋庁気象台官制公布(南洋庁気象台をパラオに置く、分室を測候所に改称)
- 昭和14年4月 クワール、ロタ、モウク、エンダービー測候所を設置
- 昭和16年3月 第4海軍気象隊がパラオに進出して本部を気象台に置く。気象台職員は海軍属託となり海軍と協同業務を行う。
- 昭和17年4月 第4海軍気象隊本部はトラック島に移り、パラオにはパラオ支隊が置かれる。
- 昭和19年9月 気象台は本島ガスパン方面を移転。気象資料や書類は全部焼却。
- 昭和20年6月 終戦となり、南洋庁気象台をはじめ測候所、観測所の業務は全部閉止される。

南洋庁観測所における 気象資料の変遷

第16年第1号
(昭和14年1月)



■ 南洋庁観測所 気象月報

大正12年7月 第1年第5号 大正12年8月3日発行 (M(96)82.2 1 23)
大正13年 第2年 (M(96)82.2 1 24)
大正14年 第3年 (M(96)82.2 1 25)

■ 南洋庁観測所月報(観測成績之部)

大正15年(1月~11月)-昭和元年(12月) (M(96)82.2 1 26)
昭和2年 第4年第1号 (M(96)82.2 1 27)
昭和3年 第5年第1号 (M(96)82.2 1 28)
昭和4年 第6年第1号 (M(96)82.2 1 29)
昭和5年 第7年第1号 (M(96)82.2 1 30)
昭和6年 第8年第1号 (M(96)82.2 1 31)
昭和7年 第9年第1号 (M(96)82.2 1 32)
昭和8年 第10年第1号 (M(96)82.2 1 33)
昭和9年 第11年第1号 (M(96)82.2 1 34)
昭和10年 第12年第1号 (M(96)82.2 1 35)
昭和11年 第13年第1号 (M(96)82.2 1 36)

■ 内南洋 気象月報

昭和12年 第14年第1号 (M(96)82.2 1 37)
昭和13年 第15年第1号 (M(96)82.2 1 38)
昭和14年 第16年第1号 (M(96)82.2 1 39)
昭和15年 第17年第1号 (M(96)82.2 1 40 II)
昭和16年 第18年第1号 (M(96)82.2 1 41 II)

観測所

- 南洋庁気象台(ハラオ)
- 南洋庁気象台サイパン測候所
- 南洋庁気象台ボナペ測候所
- 南洋庁気象台ヤルット測候所
- 南洋庁気象台ヤップ測候所
- 南洋庁気象台オレアイ測候所

管内測候所

- 南洋庁熱帯産業研究所サイパン支所(ガラバン)
- 南洋興発株式会社第一農場事務所(アスリート)
- 他 27ヶ所

今後の研究方向

- 満州気象月報(1941(昭和16)年4月以降)は、どこにあるか？(防衛研究所 史料閲覧室 他...)
- 中華人民共和国の建国(1949年~)以降の気象資料の状況把握と気象データの接続(中国気象局における気象官署の位置(観測所移転による接続)、HP公開・有料データ等の確認)
- 約100年間にわたる満州気象データベースの構築に基づく温暖化分析(ハルビン・長春・瀋陽・大連および主要な地域、地温トレンド分析など)
- 都市ヒートアイランド減少に伴う気温上昇分の分離(地形図・空中写真による土地利用変遷の解析による植被率の推定、2007年8月に長春市でのヒートアイランド調査を実施)
- 満州気象データベースの英語版の作成、利活用しやすいソフトウェアの開発、公開(WMO、世界気象機関)

6. 短報

訂正

『外邦図研究ニューズレター』4号109頁「短報」の訂正記事、第3パラグラフ2行目にみられる「版面紙」(2カ所)はあやまりで、いずれも正しくは「印画紙」です。

『「地図」が語る日本の歴史：大東亜戦争終結前後の測量・地図史秘話』の刊行

外邦図研究会に参加されてきた菊池正浩氏が、『「地図」が語る日本の歴史：大東亜戦争終結前後の測量・地図史秘話』(暁印書館、2007年4月、1,800円)を刊行した。元大本営参謀、渡辺正氏の事績にはじまり、1940年にはじまる地図出版の統制についてもふれている。外邦図研究会の成果である『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』(2005年)に収録した渡辺正氏所蔵資料が、各所に引用されている。

『測量臺灣：日治時期繪製臺灣相關地圖』の刊行

第9回外邦図研究会で、「清末から日本統治初期の台湾に関する地図」を発表された魏徳文氏(南天書局：台北)らは、このほど植民地期の台湾における測量と地図作製に関する『測量臺灣：日治時期繪製臺灣相關地圖』(南天書局、2008年1月、全287頁、1,200円)を刊行した。共著者は高傳棋・林春吟・黄清琦の3氏で、魏氏はフォースト・オーサー。

台湾における近代地図作製は、台湾史への関心の高まりもあって重要テーマと考えられるようになっており、1999年には施添福氏(元台湾大学教授、現中央研究院台湾史研究所研究員)によるリプリントと解説の刊行(『臺灣堡図』1996年および『臺灣地形圖：日治時代二萬五千分之一』1999年、いずれも遠流出版公司)、国立台湾博物館での地図展の開催(2005年、図録として『地図台湾』を刊行)、『日治時期臺灣都市發展圖集』(黄武達編著、南天書局、2006年)の刊行などにより資料がそろってきている。また、『台湾鳥瞰図：一九三〇年代台湾地誌繪集』(遠流出版社、1996年)のような、吉田初三郎らのパノラマ図をあつめた書物もみられる。植民地期の台湾で作成された図は、多岐にわたっているが、いずれも外邦図研究に

にとって重要な意義もっている。また魏氏は、南天書局の總經理として、台湾研究書(英文・和文もふくむ)の刊行のほか、古地図のリプリントも手がけ、台湾の地図研究の推進者として精力的に活動されており、今回の『測量臺灣：日治時期繪製臺灣相關地圖』の刊行はその一端である。

ウェブページ「外邦図研究プロジェクト」を公開中

「外邦図研究プロジェクト」のウェブページを公開しています。これまで刊行した『外邦図研究ニューズレター』1~4号、および、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集—』の全文をPDFファイルでご覧いただけます。ウェブページのURLは以下の通りです。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/>